

金沢大学構内遺跡 宝町遺跡

宝町遺跡第 19 次発掘調査報告書

2021

金沢大学埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、石川県金沢市宝町地内に所在する宝町遺跡の第19次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査原因は金沢大学附属病院第2立体駐車場建設であり、令和元（2019）年度に第19次発掘調査として本発掘調査を実施した。本書には、その調査成果を収録している。
3. 現地調査の期間と担当者は次の通りである。

期 間 令和元（2019）年5月7日～7月31日
担当者 松永篤知（金沢大学埋蔵文化財調査センター特任助教）
4. 出土品整理は、金沢大学埋蔵文化財調査センターにて実施した。
5. 本書の編集・執筆は、足立拓朗センター長の指導の下、松永篤知が担当した。
6. 調査に関する記録は、金沢大学埋蔵文化財調査センターが保管している。
7. 調査・報告にあたり、以下の機関・個人の助言・協力を得た。記して感謝申し上げる。

石川県金沢城調査研究所、石川県教育委員会、石川県埋蔵文化財センター、石川県立図書館、金沢市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター、金沢市立玉川図書館近世史料館、金沢大学資料館、献珠寺、フォッサマグナミュージアム
相羽重徳、上田長生、小河原孝彦、奥野正幸、景山和也、神谷嘉美、久保田慎二、小林正史、佐々木達夫、佐々木花江、庄田知充、滝川重徳、端猛、増山仁、松山和彦、宮下和幸、宮島宏（五十音順、敬称略）
8. 自然科学分析（樹種同定、繊維同定、金属製品の元素マッピング分析、寄生虫卵分析、珪藻分析、リン・カルシウム分析）については、株式会社パレオ・ラボに委託した。本報告書の自然科学分析部分は、同社の小林克也氏・黒沼保子氏・森将志氏・野口真利江氏・竹原弘展氏による分析報告を松永が編集した。また、一部石製品について、フォッサマグナミュージアムの宮島宏氏・小河原孝彦氏に、ルーペ・実体顕微鏡・エネルギー分散型分析装置付き走査型電子顕微鏡による岩石鑑定を依頼した。

凡 例

1. 本書で使用する方位・座標は、世界測地系（第Ⅶ系）による。
2. 土層・胎土等の色調については、農林水産省農林水産技術協議会事務局監修の『新版標準土色帖』に準拠した。
3. 遺構図や遺物実測図の縮尺は、各図中に示した。
4. 遺構記号は、『発掘調査のてびき』（文化庁文化財部記念物課 2010）を参考に、SB:建物、SD:溝、SK:土坑、P:ピット、SX:その他（性格不明遺構）とした。

目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘作業の経過	3
第3節 整理等作業の経過	4
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の方法と成果	9
第1節 調査の方法	9
第2節 層序	10
第3節 遺構	15
第4節 遺物	31
第5節 自然科学分析	54
第4章 総括	72
報告書抄録	96

挿 図 目 次

図 1	宝町遺跡の範囲と今回の調査区（病院第 2 立体駐車場地点）の位置	2
図 2	石川県・金沢市と宝町遺跡の位置	6
図 3	宝町遺跡と周辺の主な遺跡	7
図 4	今回の調査区及びグリッド配置図	9
図 5	今回の調査区の土層柱状図	11
図 6	トレンチ壁断面図（1）	11
図 7	トレンチ壁断面図（2）	12
図 8	トレンチ壁断面図（3）	13
図 9	トレンチ壁断面図（4）	14
図 10	今回の調査区の全体平面図	16
図 11	A 区東・B 区東の遺構平面図	17
図 12	A 区中央・B 区中央・B 区西の遺構平面図	18
図 13	下層壁断面図（1）	20
図 14	下層壁断面図（2）	21
図 15	個別遺構断面図	22
図 16	上層出土遺物	32
図 17	下層出土遺物（1）	34
図 18	下層出土遺物（2）	35
図 19	下層出土遺物（3）	36
図 20	下層出土遺物（4）	38
図 21	下層出土遺物（5）	39
図 22	下層出土遺物（6）	40
図 23	下層出土遺物（7）	42
図 24	下層出土遺物（8）	43
図 25	下層出土遺物（9）	44
図 26	下層出土遺物（10）	45
図 27	下層出土遺物（11）	47
図 28	下層出土遺物（12）	48
図 29	下層出土遺物（13）	49
図 30	下層出土遺物（14）	50
図 31	宝町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（1）	57
図 32	宝町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（2）	58
図 33	繊維同定の試料写真及び光学顕微鏡写真	60
図 34	簀の元素マッピング図	62
図 35	産出した寄生虫卵	64
図 36	堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真	66
図 37	堆積物中の珪藻化石分布図	68

図 38	プレス試料及びリンとカルシウムの元素マッピング図	69
図 39	宝町遺跡の過去の調査区と今回の調査区的位置図	73
図 40	近世絵図と今回の調査区の照合	74
図 41	近代病院図面と今回の調査区の照合	75

表 目 次

表 1	遺構観察表	30
表 2	遺物観察表（土器・陶磁器）	52
表 3	遺物観察表（土製品・磁器製品）	53
表 4	遺物観察表（瓦）	53
表 5	遺物観察表（石製品）	53
表 6	遺物観察表（金属製品）	53
表 7	遺物観察表（木製品・植物製品）	53
表 8	遺物観察表（ガラス製品）	53
表 9	宝町遺跡出土木製品の樹種同定結果	54
表 10	宝町遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧	55
表 11	宝町遺跡出土繊維製品の同定結果	59
表 12	元素マッピング分析の分析対象	60
表 13	元素マッピング図中ポイントの半定量分析結果	61
表 14	寄生虫卵分析、珪藻分析、リン・カルシウム分析の分析試料一覧	63
表 15	試料の計測値と寄生虫卵数	66
表 16	堆積物中の珪藻化石産出表	67
表 17	蛍光 X 線半定量分析結果	70

写 真 目 次

写真 1	附属病院駐車場の満車状況	1
写真 2	宝町遺跡第 19 次発掘調査の現場作業状況	4
写真 3	発掘調査速報展の様子	5
写真 4	宝町遺跡第 19 次発掘調査の整理作業状況	5
写真 5	SK20 出土モモ核	37
写真 6	A 区東から出土した眼科第 7 研究室のプレート	76

写真図版目次

写真図版 1	調査区遠景・全景 (1)	81
写真図版 2	調査区遠景・全景 (2)	82
写真図版 3	近代遺構	83
写真図版 4	A区近世遺構検出	84
写真図版 5	B区近世遺構近景	85
写真図版 6	B区近世遺構 (1)	86
写真図版 7	B区近世遺構 (2)	87
写真図版 8	B区近世遺構 (3)	88
写真図版 9	B区近世遺構 (4)	89
写真図版 10	B区近世遺構 (5)	90
写真図版 11	近世主要遺構出土土器・陶磁器 (1)	91
写真図版 12	近世主要遺構出土土器・陶磁器 (2)	92
写真図版 13	近世主要遺構出土土器・陶磁器 (3)	93

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

金沢大学宝町地区には、医薬保健学域医学類と大学附属病院がある。金沢大学は1862（文久2）年創設の加賀藩彦三種痘所を創基とするが、以後医学の系譜が連綿と続いており、加賀藩卯辰山養生所（1867（慶応3）年）、金沢医学館（1870（明治3）年）、石川県病院（1875（明治8）年）、石川県医学所（1876（明治9）年）、石川県金沢医学校（1879（明治12）年）、石川県甲種医学校（1884（明治17）年）、第四高等中学校医学部（1887（明治20）年）、第四高等学校医学部（1894（明治27）年）、金沢医学専門学校（1901（明治34）年）、金沢医科大学（1923（大正12）年）を経て、1949（昭和24）年に金沢大学医学部となった（金沢大学50年史編纂委員会1999）。さらに2008（平成20）年、学域・学類制導入によって医薬保健学域医学類となり、現在にいたる（金沢大学総務部広報室2020）。すなわち、約160年の歴史があり、1905（明治38）年の小立野（宝町地区）移転以降に限っても、一世紀を優に超える。

宝町地区の中央に位置する附属病院は、金沢市民・石川県民をはじめとする一般の方々に最先端の高度な医療を提供する場として、年間38万人前後の来院がある。これを一日平均に換算すると、約1,500～1,600人に及ぶ（金沢大学附属病院2019・2020）。だが、それゆえに駐車場の空きを待つ渋滞が慢性的に発生しており、来院者の車が構内を大きくはみ出すことが日常茶飯事となっていた（写真1）。

そのような中、平成30（2018）年に、宝町地区の西端に第2立体駐車場を建設することが正式に決まった。この場所は、平面駐車場であったが、慢性的な渋滞を少しでも緩和するために、同地に立体駐車場を建てることになったのである。

この立体駐車場建設工事決定によって発生したのが、建設予定地の地下にある埋蔵文化財への対応である。宝町地区は、近世（江戸時代）の加賀藩与力町・寺域等にあたり、1998（平成10）年以降、構内工事のたびに緊急発掘調査を実施してきた（佐々木・妹尾・横山2017）。附属病院第2立体駐車場の建設予定地も、近世の加賀藩城下町絵図（「寛文七年金沢



写真1 附属病院駐車場の満車状況

図)、「延宝金沢図」等)に描かれており、地下に近世の遺構・遺物が埋蔵されていることが容易に推測されたのである。

ただ、今回の第2立体駐車場建設予定地は、平成30年度初めの時点で埋蔵文化財包蔵地としての周知化がなされていなかった。その状態で、埋蔵文化財調査なしに駐車場建設工事に着手した場合、掘削作業中に近世の遺構・遺物が出てくることはほぼ確実である。そうになると、文化財保護法上の「不時発見」となって工事が中断となったり、制約下での発掘調査を急遽実施することになったりすることが懸念された。そこで、石川県教育委員会文化財課埋蔵文化財グループ及び金沢市教育委員会文化財保護課と協議の上、2019(平成31)年1月25日付で周知の包蔵地に追加を受け、工事前に通常の手順で発掘調査を実施できるようにした(図1)。そして、2019(平成31)年3月4日付で文化財保護法第93条・第92条の届出をして、宝町遺跡第19次発掘調査実施の運びとなった。

その後、入札によって日本海航測株式会社が発掘調査支援業務を受託することが決定し、速やかに金沢大学埋蔵文化財調査センター特任助教の松永篤知を担当者とする調査体制を構築した。現地調査にあたっては、特任教員の松永には勤務制限等があるため、日本海航測株式会社から支援調査員として森由佳氏に加わってもらった。同社からは、施工管理技士1名にも常駐してもらうこととし、さらに程なくして、調査補助員1名・作業員7名から成る現地調査体制が出来上がった。



図1 宝町遺跡の範囲と今回の調査区(病院第2立体駐車場地点)の位置

第2節 発掘作業の経過

2019（平成31）年4月に、今回の調査に係る協議や準備工を行った。今回の調査対象は、立体駐車場建設予定地の1,024㎡であるが、調査区外に排土置き場を確保することができなかつたため、調査区を便宜的に北西側半分のA区と南東側半分のB区に分けて、一方を掘削・調査し、残る一方を排土置き場とする反転調査の手法を採用することにした（図4）。準備工としては、4月17日より仮設建物を搬入・設置し、順次備品搬入や電気工事、調査範囲測量、舗装撤去等を行った。

そして、元号が変わった連休明けの2019（令和元）年5月7日より、A区の重機掘削（表土掘削）を開始した。重機掘削にあたっては、病院の都合で撤去できない既設埋設物等の制約があったため、A区をさらに東・中央・西に分けて掘削することにした。0.45㎡級平爪バケット仕様のバックホウで土の変化を見ながら慎重に掘削を進め、立体駐車場基礎工事の予定掘削深度である現地表下-1.2mまで掘り下げたところ、地山ブロック混じりの近代整地土までにはしか到達しなかつた。基礎直下にも工事の影響があることを考慮して、さらに30cm下、現地表下-1.5mまで掘り下げても、その状況は変わらなかつた。そこで、A区東の北西角に土層観察用のトレンチ（C2トレンチ）を設定して深掘りを試みた結果、現地表下-3.0mで地山に到達した。さらにA区東の東角にもトレンチ（D3トレンチ）を設定して掘り下げたが、当該地点では現地表下-2.3mで地山に到達し、緩やかに傾斜した地形を確認することとなった。D3トレンチでは、近世と見られる遺構が少数確認できた。続いてA区中央でもトレンチ調査を実施し（C4トレンチ）、やはり現地表下-2.3mで近世遺構を少数確認した。しかし、遺構深度・遺構密度・遺物密度を総合的に勘案して、これらの遺構は立体駐車場建設工事による影響を受ける可能性は極めて低いものと判断し、遺構形状等の検出記録を取った上で埋め戻し保護することにした。なお、A区東の南東側、現地表下-1.5m前後で、近代の建物跡を検出し、それが金沢大学附属病院の前身病院の眼科病棟基礎であることを確認した。これは、遺構としてはかなり新しい時代のものであることから、金沢大学埋蔵文化財調査センターとして可能な限り記録を取った。

A区の掘削・記録が一通り終わった5月23日、RCヘリコプターを用いた航空写真測量を実施し、立体駐車場予定地北西半分の調査は終了となった。

5月24日からはA区の埋め戻しを開始し、5月31日にはB区の舗装撤去に移った。そして、6月3日にはB区の重機掘削に着手した。B区についても、A区の既設埋設物の延長等を考慮して、東・中央・西に分けて掘削を進めた。なお、A区は東、中央、西の順に重機掘削を行ったが、B区については西、中央、東の順に掘削した。これは、調査開始前からB区東で水銀による土壌汚染が確認されていたためである。土壌汚染対策法上、B区東の形質変更が可能となるまで、B区西・中央の掘削を先に進めることにした。

6月19日からB区東の掘削に移ったが、間もなくして現地表下-1.3mで汚染源と見られる円管を、眼科病棟の続きとともに検出した。そこで、B区東の掘削深度は現地表下-1.3mを基本とし、汚染範囲外の一部に深掘りトレンチ（F5トレンチ）を入れることにした。B区西・中央でもトレンチによる遺構確認を試みたところ（E5トレンチ・E6トレンチ）、いずれのトレンチにおいても現地表下-2.0mほどで近世と見られる遺構を確認した。その後、

6月25日に現地にて石川県文化財課・金沢市文化財保護課より指導を受け、土壌汚染のないB区西・中央については、地山面まで掘り下げて近世遺構の確認及び調査を面的に実施することとなった。

6月27日から地山面までの掘削を始め、掘り下がったところから速やかに近世遺構の検出・掘削・記録を行った。そして、7月8日にB区の航空写真測量を実施した。航空測量終了後も、B区内で補足調査を行い、調査が完全に済んだところから埋め戻しを進めた。この埋め戻しは、調査原因である立体駐車場工事が翌年度の施工となるため、病院としてはひとまず平面駐車場を復旧して使用する必要があったために実施したものである。最終的に、工期の7月31日までに平面駐車場再舗装工事や撤収作業を済ませ、今回の宝町遺跡第19次発掘調査における現地作業は無事終了となった。



写真2 宝町遺跡第19次発掘調査の現場作業状況

第3節 整理等作業の経過

現場終了後の2019（令和元）年8月より、出土遺物の整理作業を開始した。整理担当者である松永が資料館を主所属とするため、資料館業務（ワークショップ・特別展・企画展）との同時進行であったが、金沢大学の考古学特別プログラム生を中心に学生を整理作業員として雇用し、注記・接合・遺物実測の各種作業を進めた。2020（令和2）年2月末の時点で、注記・接合は概ね終了し、一部遺物実測にも着手した。

この整理の過程で、2020（令和2）年2月8日～2月28日の間、金沢大学資料館展示室にて「財のまち！？宝町—宝町遺跡第19次発掘調査速報展—」を開催した（金沢大学資料館2020）。これは、発掘調査中に現地説明会を開くことができなかったため、せめて出土遺物と写真パネルで調査成果を速報的に伝えようと企画したものである。実際の展示においては、宝町遺跡第19次発掘調査だけでなく、過去の構内遺跡発掘調査についても紹介し、宝町遺跡（近世・近代主体）・角間遺跡（縄文時代・古代主体）・鶴間遺跡（近世・近代主体）の価値を学内外に伝える場とした。なお、この企画展は当初3月8日まで開催する予定であったが、予期せぬ新型コロナウイルス感染拡大により、やむを得ず会期を早めて終了することとなった。結果、1か月弱の会期となってしまったが、大学の冬休み期間にもかかわらず369人もの来館があり、開催の意義は十分にあったと言える。

その後、新型コロナウイルスは日本各地に広がり、新年度を迎えた4月には状況が著しく悪化、4月13日に石川県と金沢市で緊急事態宣言が出され、4月16日には国の緊急事態宣言が全国に拡大された。それを受けて、金沢大学でもかなりの勤務制限が設けられることとなり、5月以降、松永が一人で整理を行うこととなった。具体的には、出土遺物の実測や自然科学分析の委託準備を進めた。7月には新型コロナウイルスの感染者が全国で急増して第2波到来というべき状況になったが、8月後半になると感染者数が減少傾向を示したため、9月1日から学生を整理作業員として再び雇用することにした。

9月25日には、株式会社パレオ・ラボ社員が埋蔵文化財調査センターに来て自然科学分析用のサンプリングを実施した。その成果は、12月25日に納品された。

学生による整理作業は、12月中旬まで継続したが、卒業論文提出時期が近いことや、新型コロナウイルスの感染第3波が深刻になったことを考慮して、12月下旬から3月上旬にかけては基本的に松永一人で残る作業（本文執筆・遺物実測・デジタルトレース・写真撮影・図表作成・組版等）を行うことにした。この間、特に1月中、大雪等の影響で予定変更を余儀なくされながらも、各所の専門家に対面・メール・電話で教示を仰いだ。1月20日には、新潟県糸魚川市のフォッサマグナミュージアムで石製品3点の岩石鑑定を受けた。

そして、3月中旬に完全原稿を入稿し、本書は3月31日に無事刊行となった。

なお、上記の整理作業期間中、東瑞貴、鏡百恵、小納谷麗奈、滝沢香織、竹中郁恵、長谷川由貴、宮田和希、森島康太の金沢大学学生諸氏の協力を得た。謝意を込めて、ここに明記しておきたい。



写真3 発掘調査速報展の様子



写真4 宝町遺跡第19次発掘調査の整理作業状況

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

宝町遺跡は、石川県金沢市宝町地内に所在する埋蔵文化財包蔵地である。金沢大学宝町地区にあたり、近世・近代を主体とする。本節では、宝町遺跡の地理的環境について述べる（図2）。

宝町遺跡が所在する石川県は、本州中央部に位置し、日本海に面しており、富山県・福井県とともに、北陸三県を成す。県庁所在地の金沢市を中心に、110万人以上の県民が暮らしている。その県域は南北約200km、東西約100kmと、南北方向に細長い平面形を呈しており、総面積は約4,185 km²に及ぶ。旧国名を踏襲して、北部は能登地方、南部は加賀地方と呼ばれる。能登地方は、日本海に突き出した能登半島にあたり、半島東側の内浦では能登島を囲む七尾湾や九十九湾など入り組んだ海岸が連続し、一方半島北側・西側の外浦では険しい岩石海岸が続く。半島基部の口能登では、宝達丘陵の北側に邑知潟平野が広がっている。加賀地方については、西側の沿岸部に手取川扇状地を主体とする金沢平野（加賀平野）が広がり、東側には標高2,702 mの白山を主峰とする山地帯が発達している。加賀地方の海岸では内灘砂丘・小松砂丘といった砂丘列が形成されており、さらに砂丘の内側には河北潟・柴山潟・木場潟といった潟湖の存在が知られる（川崎1993）。

宝町遺跡が所在する金沢市は、加賀地方の北側に位置し、西側は日本海に面する。市域は南北37.3 km、東西23.3 kmにわたり、総面積約469km²、人口約46万人の中核市である。県庁所在地として、常に石川県の行政・文化・経済の中心となっている。市域のうち、北西半は金沢平野が占め、南東半は白山山系から連なる山地が占めている。市街地では、寺町台・小立野台・卯辰山という3つの台地の間を、犀川（犀川水系の二級河川）・浅野川（大野川水系の二級河川）の二大河川が流れており、起伏に富む地形で知られる（金沢市2020）。

宝町遺跡が所在する金沢市は、加賀地方の北側に位置し、西側は日本海に面する。市域は南北37.3 km、東西23.3 kmにわたり、総面積約469km²、人口約46万人の中核市である。県庁所在地として、常に石川県の行政・文化・経済の中心となっている。市域のうち、北西半は金沢平野が占め、南東半は白山山系から連なる山地が占めている。市街地では、寺町台・小立野台・卯辰山という3つの台地の間を、犀川（犀川水系の二級河川）・浅野川（大野川水系の二級河川）の二大河川が流れており、起伏に富む地形で知られる（金沢市2020）。

宝町遺跡は、石川県金沢市の丘陵地に立地する。より詳しく言えば、犀川と浅野川に挟まれた小立野台の丘陵中央部、標高約55～60 mに立地する（松永2019）。



図2 石川県・金沢市と宝町遺跡の位置

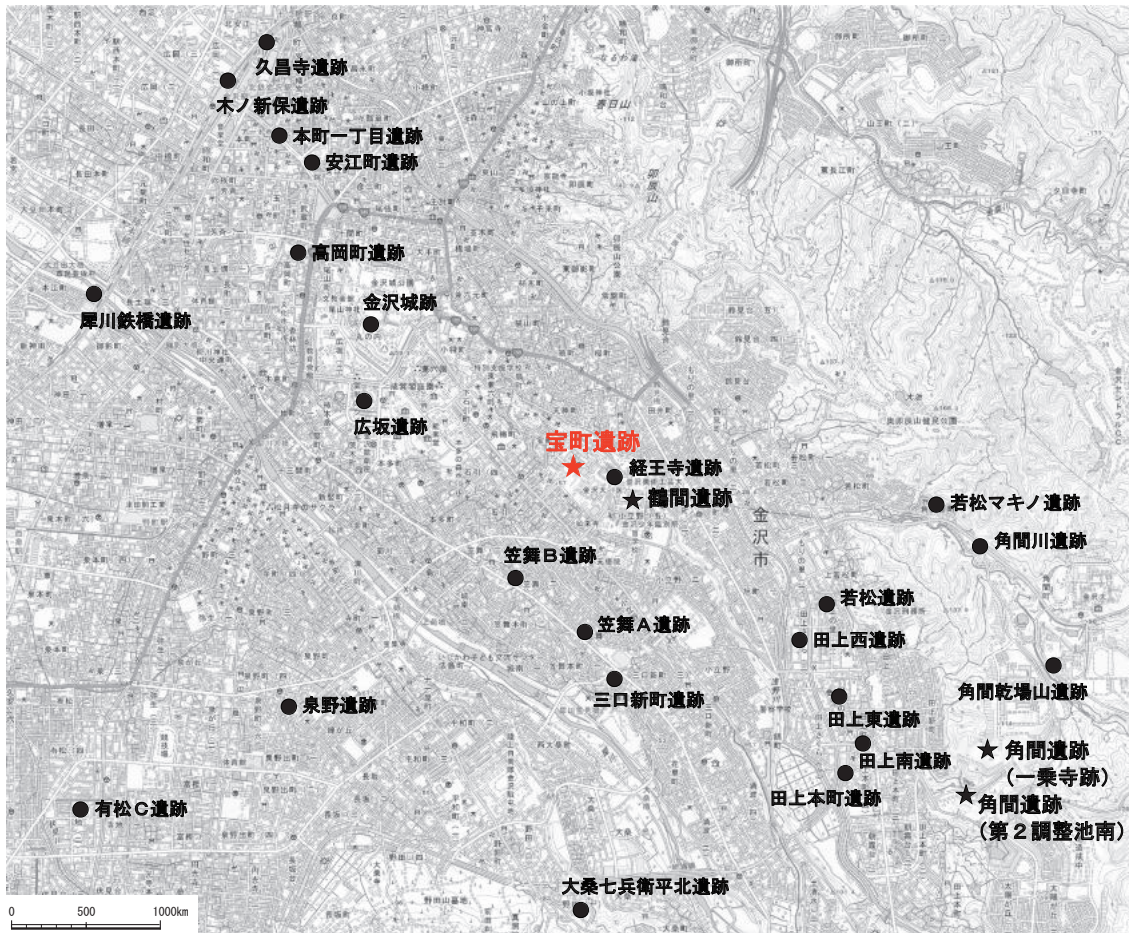


図3 宝町遺跡と周辺の主な遺跡（国土地理院タイルに遺跡名等を追記して作成）

第2節 歴史的環境

宝町遺跡の周囲には、先史時代以来、多くの遺跡が存在している。図3は、宝町遺跡から3～4km圏内の主な遺跡を示したものである。本節では、この図を見ながら、他の発掘調査報告書等も参考にしつつ（金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005・2020、佐々木・妹尾・横山2017、松永2019）、小立野台を中心とする遺跡の変遷を概観する。

旧石器時代については、金沢城跡石川門前土橋・車橋調査区から、旧石器時代後期の剥片石器が出土しているという。しかし、この時代について詳細な状況は把握できない。

縄文時代になると丘陵地を中心に遺跡が増え、若松マキノ遺跡・角間川遺跡・角間乾場山遺跡・角間遺跡・菅舞A遺跡・菅舞B遺跡・犀川鉄橋遺跡などが知られる。これらのうち、金沢大学角間地区にある角間遺跡については、金沢大学埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施しており、縄文時代中期前葉を中心とする遺構・遺物が見つかった。角間遺跡の遺構については土坑が少数見つかった程度に過ぎないが、遺物については中期前葉の縄文土器が多数出土しており、比較的まとまりのある資料として注目される。

弥生時代・古墳時代については、角間遺跡・若松遺跡・田上南遺跡・田上本町遺跡・本町一丁目遺跡・高岡町遺跡・広坂遺跡などで、弥生時代後期・末～古墳時代初頭・前期の遺構・遺物が確認されている。金沢大学角間地区の角間遺跡では、弥生時代後期の墓坑の可能性が

ある土坑が1基検出されている。しかし、この土坑に伴う遺物は、弥生土器片がわずかに出土した程度であり、それ以上の詳細は不明である。

古代については、広坂遺跡で古代瓦が大量に出土しており、文献に記録がない古代寺院（広坂廃寺）の存在が推測されている（出越 2013）。金沢大学埋蔵文化財調査センターが発掘調査した角間遺跡（一乗寺跡地点）でも、「一乗」・「寺」と書かれた9世紀後半の墨書土器や越州窯系青磁水注が出土しており、古代山間寺院の存在をうかがわせる。さらに角間遺跡の別地点（第2調整池南地点）では、平安時代の埋葬施設の可能性がある方形周溝状遺構の貼床面及び貼床直上からガラス玉・丸靱が出土しており、当時の信仰等を考える上で特筆すべき事例と言える。

中世については、高岡町遺跡や田上遺跡群などがある。特に高岡町遺跡では、この時代の薬研堀と見られる溝状遺構が見つまっている。

近世については、当然のことながら金沢城跡が第一に挙げられる。金沢大学は、元々金沢城内にキャンパスがあり、井上鋭夫氏・貞末堯司氏・佐々木達夫氏らによって発掘調査が行われている（井上 1969、佐々木 1981、貞末・石崎・前田 1986）。城内から角間へのキャンパス移転後、近年では石川県金沢城調査研究所が継続的に発掘調査を進めている。金沢城の城下町遺跡も頻繁に調査されており、具体例として木ノ新保遺跡・久昌寺遺跡・本町一丁目遺跡・高岡町遺跡・広坂遺跡・宝町遺跡・鶴間遺跡などが挙げられよう。金沢大学宝町地区の宝町遺跡、同鶴間地区の鶴間遺跡は、金沢大学埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施している。特に宝町遺跡は、近世の与力町や寺域にあたり、大量の陶磁器とともに廃棄土坑・井戸・地下室・寺域周溝などが見つまっている。

近代以降については、金沢城跡・宝町遺跡・鶴間遺跡で発掘調査が行われている。特に宝町遺跡・鶴間遺跡については、金沢大学及び金沢大学埋蔵文化財調査センターにとって重要な調査成果が得られている。宝町遺跡では、金沢大学附属病院の前身病院の遺構・遺物が見つまっている。「金澤病院」・「金澤醫科大學」・「金澤醫科大學附属醫院」・「大学醫院」等の銘が入った病院食器は、病院名から使用時期が特定できる貴重な近代資料である。また、宝町遺跡の南東に位置する鶴間遺跡では、明治五大監獄の一つである金沢監獄の跡が見つっており、こちらでは「監」・「刑」の銘が入った監獄食器・刑務所食器が出土している。

このような歴史的環境の中で、今回の宝町遺跡第19次発掘調査区は、過去の調査区と同様に、近世・近代の遺跡として認識される。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

今回の宝町遺跡第19次発掘調査にあたっては、宝町地区の限られた範囲で本調査を実施することになったため、排土置き場の確保に工夫が必要であった。そこで、第1章第2節でも述べたように、調査対象範囲1,024 m²を二分し、片方を発掘調査して、残り半分を排土置き場とする反転調査の方法を採用することにした。二分した調査区は、北西側半分をA区、南東側半分をB区として設定し、それぞれをさらに東・中央・西に分けた上で、A区の方から掘削を開始した。

発掘調査用のグリッドについては、過去の宝町遺跡発掘調査で使用されていた10 mグリッドを延長した上で、新規に設定することにした。具体的には、X = 61,920、Y = 44,350（世界測地系）を起点の座標として、X = 0、Y = 0とした。グリッド番号は北から南に向かってアラビア数字を（1～6）、西から東に向かってアルファベット（A～F）を、それぞれ昇順に付して組み合わせた（図4）。遺構番号については、過去の調査と区別するために、新規に番号を付すことにした。『発掘調査のてびき』（文化庁文化財部記念物課2010）を参考に

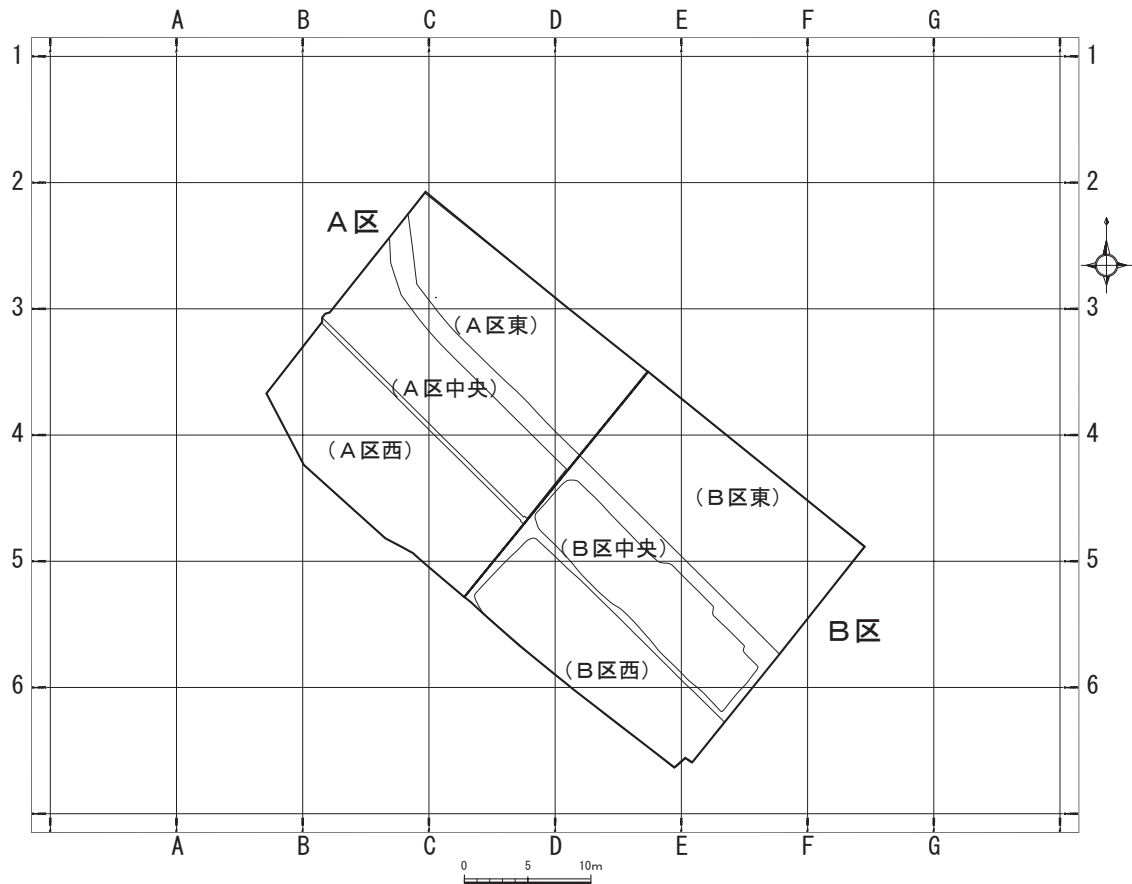


図4 今回の調査区及びグリッド配置図

して、遺構の種類を問わず通し番号を付け、遺構記号はSB：建物、SD：溝、SK：土坑、P：ピット、SX：その他（性格不明遺構）を用いた。特に近代の遺構については、近世の遺構と区別するため、遺構記号の前に「近代」を付けることにした。なお、過去の宝町遺跡発掘調査における主な遺構記号は、独自のものを使用しており、PX：土坑、PW：溝、RD：道、PZ：近代遺構、BB：近代建物等としていた。

出土遺物は、グリッド・層位・遺構ごとに取り上げを行うこととし、特に重要な遺物については測量図面に位置を記して点上げの対象とした。取り上げの際には、ユポ紙のラベルに調査略号（KTB1919:金沢大学宝町病院(20)19年第19次発掘調査の意）・グリッド名・遺構名・層番号・取り上げ年月日等を記し、それを各遺物または遺物群に付してチャック付きポリ袋に同封した。

写真記録については、『発掘調査のてびき』の基準を満たす2000万画素以上（短辺4000ピクセル以上、RAW形式撮影可能）のデジタル一眼レフカメラを使用し、遺構断面や完掘状況、遺物出土状況等を必要に応じて撮影することにした。土層記録については、『新版標準土色帖』に基づく土色と、ウェントワース（Chester K. Wentworth）による粒度分類の組合せを基本とし、それに個々の特徴（混入物や縮まり等）を適宜追記した。測量記録については、土層断面図は手取り実測とし、平面図は航空写真測量によって作図した。

第2節 層序

今回の調査区は、近現代の盛土等が厚く堆積しており、遺物包含層もほとんど残っていなかった。しかし、トレンチの壁断面の土層観察などから、A区・B区ともに現地表面（標高56.8～57.0m）から地山までの地層を、遺構埋土を除いてⅠ～Ⅲ層の三つに大別することが可能である（図5～9）。

Ⅰ層：近現代の盛土等から成る表土層である。約2mかそれ以上の層厚を測り、細分すると内容はかなり複雑である。粘土質シルトから円礫までの様々な土層が幾重にも重なっており、今回の発掘調査前に平面駐車場となるまでの来歴が見てとれる。特に、現地表下約-0.6mの標高56.2m～56.4mで近代眼科病棟期の地表面が確認でき、場合によってはこれを境に上下に分けることも可能である。

Ⅱ層：いわゆる遺物包含層にあたる土層である。黒色や黒褐色の粘土質シルトを基本とする。後世の掘削等のために面的にはかなり残りが悪いが、壁面を見ると層厚0.2m～0.3mほどの土層として認識できる。ただし、実際の遺物含量は多くなく、極端な遺物集中も見られなかった。それでも、この層に近世遺物が含まれることは間違いない事実であり、またこの層と同様の土が近世遺構の主な埋土となっている。

Ⅲ層：地山層であり、この層の上面を近世遺構の検出面とした。地点によって漸移的な層になったり、グライ化したりと土色・土質に変化が認められるが、基本的に黄褐色の粘土質シルト・粘土から成る。概ね北西から南東に向かって高くなる傾向があり、北西端のC2トレンチでは標高54.0mでこの層に達したのに対し、南東端のF5トレンチでは標高55.1mで地山漸移層に到達した。

今回の宝町遺跡第19次発掘調査においては、上記の層序に基づいて遺物の取り上げや遺構検出・掘削・記録等を行った。

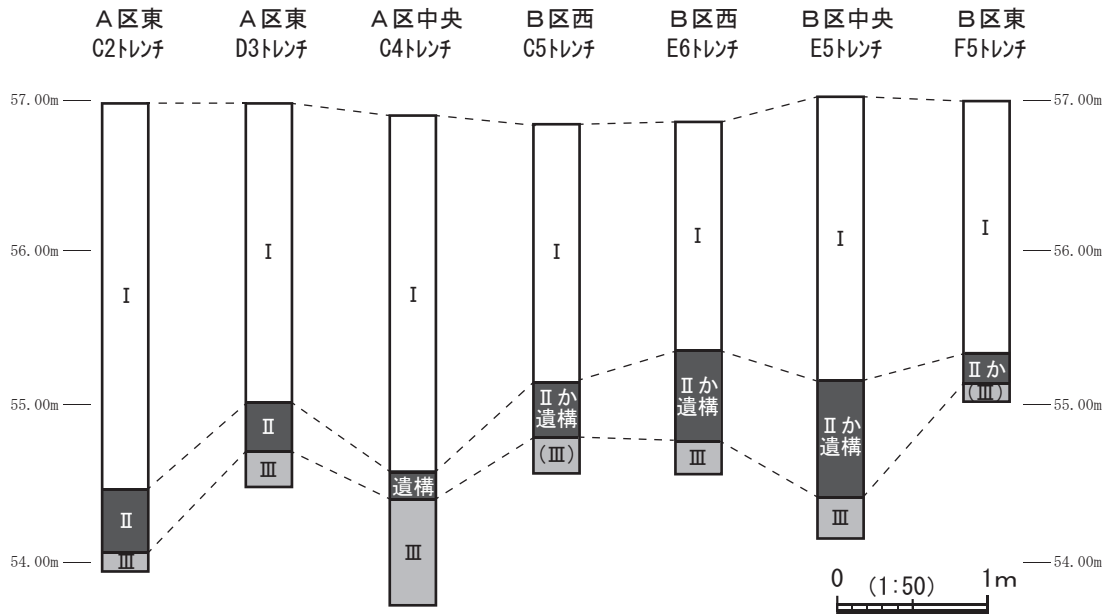
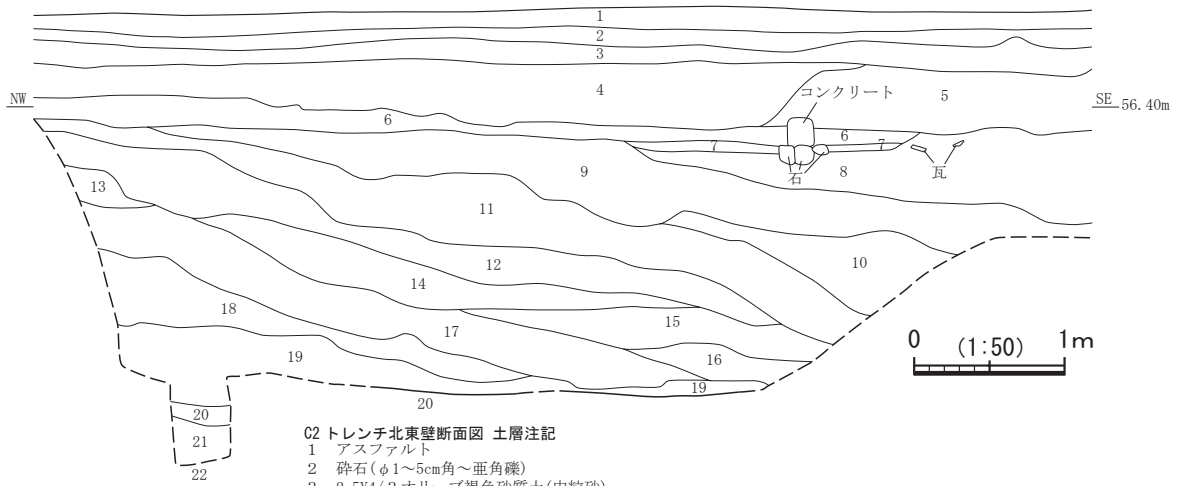


図5 今回の調査区の土層柱状図

C2 トレンチ北東壁断面図



C2 トレンチ北東壁断面図 土層注記

- 1 アスファルト
 - 2 碎石 (φ1~5cm角~亜角礫)
 - 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 (中粒砂)
 - 4 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト (セメント・レンガ・鉄筋・コンクリート・φ5~20cm亜角~円礫大量)
 - 5 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (炭10%、φ1cm程度亜円~円礫5%、レンガ)
 - 6 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (炭1%、φ1~3cm亜角~亜円礫10%)
 - 7 砂利層 (φ1~3cm亜角~円礫、中粒砂) ← 近代の路面か
 - 8 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (22層土2%、φ1~5cm亜角~円礫3%)
 - 9 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト (22層土10%、φ1~5cm亜角~円礫10%、セメント)
 - 10 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (22層土50%、φ1~10cm亜円~円礫15%)
 - 11 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (22層土10%、φ1~15cm亜角~円礫15%、炭1%)
 - 12 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト (22層土2%、φ1~5cm亜角~円礫3%、脆い)
 - 13 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (22層土30%、亜角~亜円礫、硬い)
 - 14 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (22層土3%、φ1~7cm亜円~円礫10%)
 - 15 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (22層土3%、φ1~5cm亜円~円礫3%、やや脆い)
 - 16 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (22層土30%、φ1~10cm亜円~円礫3%、脆い)
 - 17 10YR4/4 褐色粘土質シルト (18層土40%、φ1~10cm亜角~円礫3%、炭1%、脆い)
 - 18 10YR2/1 黒色粘土質シルト (19層土40%、φ1~3cm亜円~円礫2%、炭1%、脆い)
 - 19 10YR4/4 褐色粘土質シルト (18層土10%、20層土10%、φ1~3cm亜角~円礫2%、脆い)
 - 20 10YR4/2 暗灰黄色粘土質シルト (炭1%、22層土1%)
 - 21 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト (22層土10%、炭1%)
 - 22 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト ← 地山 III
- 8~19 近代盛土 I
 20~21 包含層か II

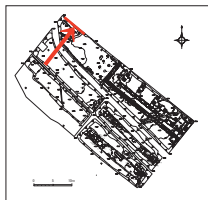


図6 トレンチ壁断面図 (1)

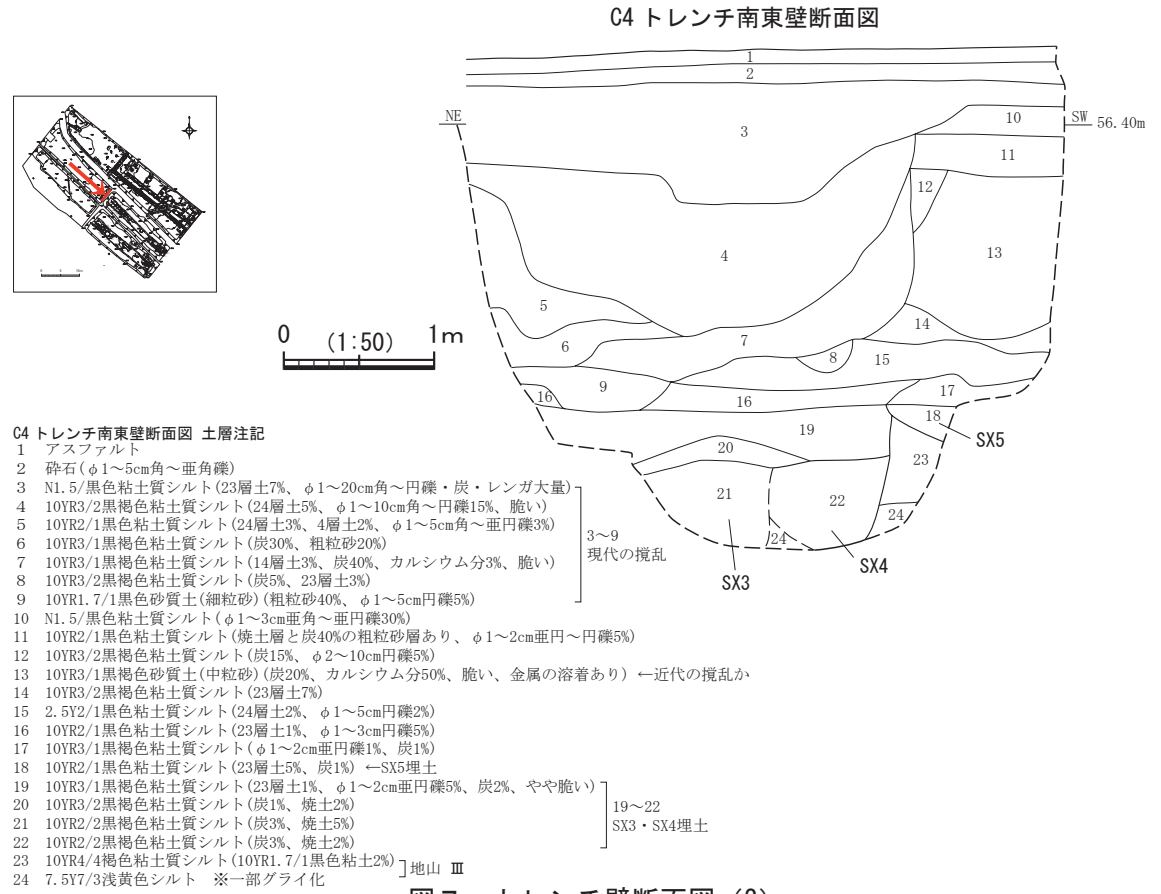
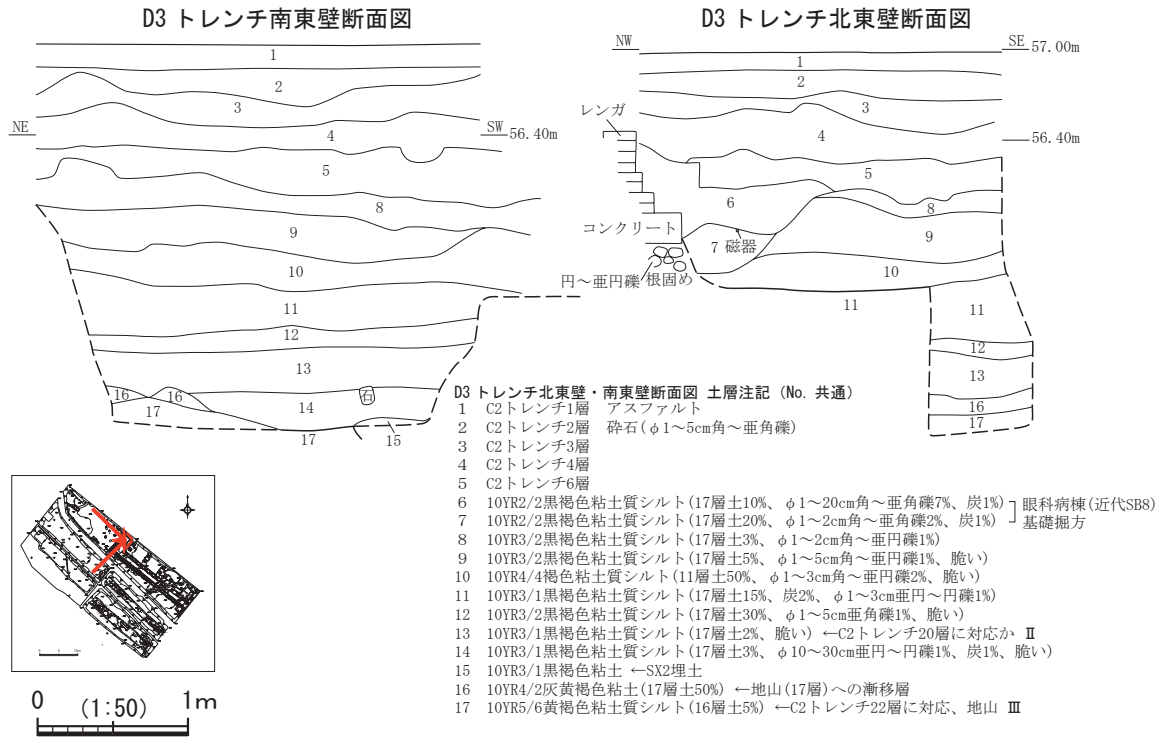
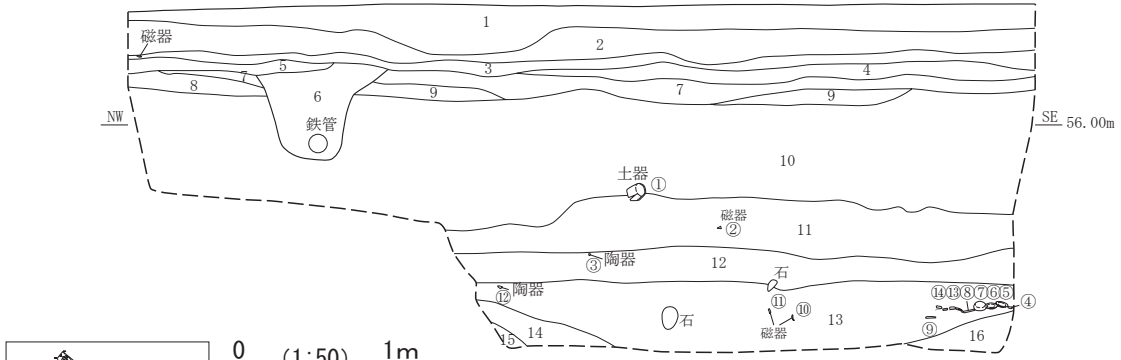


図7 トレンチ壁断面図(2)

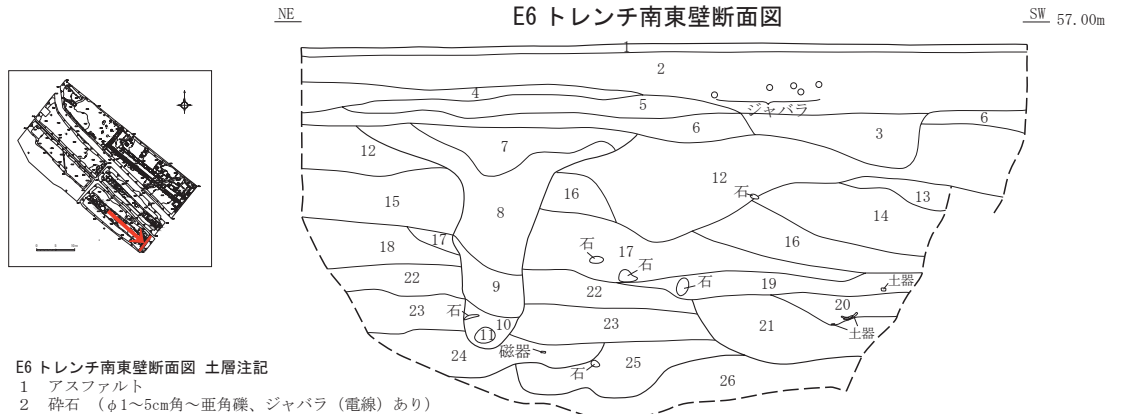
C5 トレンチ北西壁断面図



C5 トレンチ北西壁断面図 土層注記

- 1 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(10YR4/3にぶい黄褐色極細砂粒30%、φ1~5cm亜角~亜円礫30%)
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘土(10YR4/4褐色粘土10%、φ1~12cm亜円礫10%、硬くしまる)
- 3 N1.5/黒色シルト(5層土2%、4層土3%、φ~2cm角礫20%)←炭層
- 4 10YR2/1黒色粘土質シルト(中砂粒20%、炭5%、φ~1cm角礫10%)
- 5 2.5Y5/6黄褐色シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト20%、φ3cm円礫1%)
- 6 10層土(C4トレンチ13層)と同じ、10層土よりしまる←鉄管埋土
- 7 10YR1.7/1黒色粘土質シルト(粗砂粒30%、φ1~2cm亜角~亜円礫5%)
- 8 5YR6/6橙色砂質土(粗砂粒)(炭10%、カルシウム分20%)←焼土層
- 9 5YR6/6橙色砂質土(粗砂粒)(10YR3/1黒褐色中砂粒50%)
- 10 C4トレンチ13層土 北から南へ流れ込み、層状に堆積
- 11 10YR3/2黒褐色粘土(φ1~3cm亜角~円礫7%、硬くしまる)
- 12 10YR3/2黒褐色粘土質シルト(φ1~5cm亜角~円礫10%、炭3%)
- 13 10YR3/2黒褐色粘土(φ1~15cm円礫10%、染付、硬くしまる)
- 14 10YR4/4褐色粘土質シルト(13層土20%、φ1~5cm亜角~円礫30%、脆い)
- 15 10YR2/1黒色粘土質シルト(粗砂粒20%、炭2%)
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色粘土(10YR3/1黒褐色粘土50%) 地山への漸移層

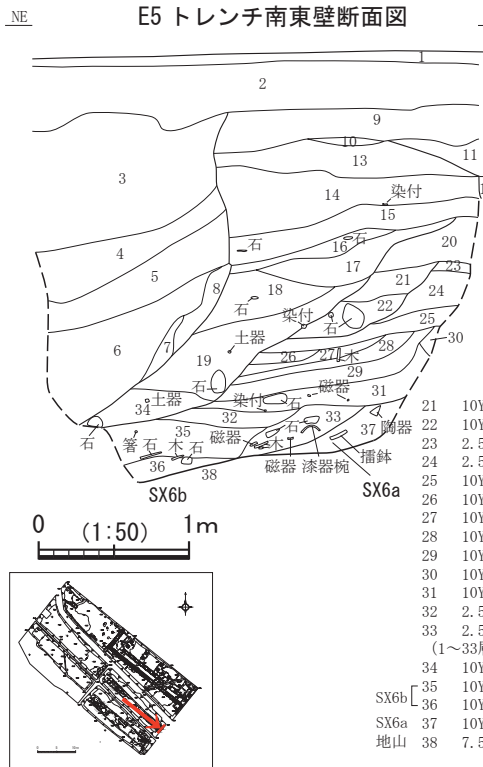
E6 トレンチ南東壁断面図



E6 トレンチ南東壁断面図 土層注記

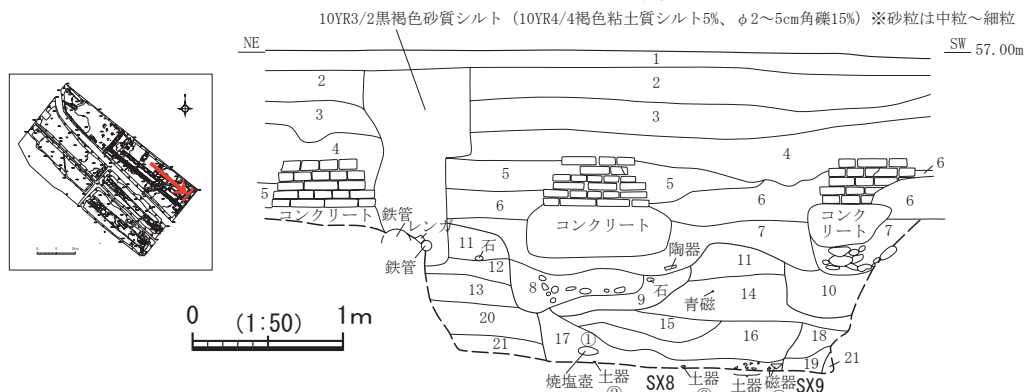
- 1 アスファルト
- 2 碎石 (φ1~5cm角~亜角礫、ジャバラ(電線)あり)
- 3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(6層土1%、φ1~8cm亜角~亜円礫30%)
- 4 2.5Y2/1黒色砂質土(中砂粒)(粗砂粒15%、φ1~5cm亜角~亜円礫5%)
- 5 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(φ1~5cm亜角礫7%)
- 6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト(極細砂粒20%、φ1~5cm亜円礫20%)
- 7 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(12層土50%、φ1~5cm亜角~亜円礫3%)
- 8 10YR2/1黒色粘土質シルト(10YR5/3にぶい黄褐色粘土15%、炭7%、φ1~5cm角~亜円礫10%)
- 9 10YR1.7/1黒色粘土質シルト(粗砂粒50%、炭10%)
- 10 10YR2/1黒色粘土質シルト(φ1~10cm亜角~亜円礫5%)
- 11 2.5Y2/1黒色シルト、軟らかい、粘性中←暗渠内堆積
- 12 C4トレンチ13層土
- 13 10YR3/2黒褐色粘土質シルト(10YR4/4褐色粘土質シルト3%)
- 14 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(10YR6/6明黄褐色粘土5%、φ1~5cm亜円礫3%)
- 15 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト(10YR4/4褐色粘土質シルト3%、φ0.5~5cm亜角~円礫3%)
- 16 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(2.5Y6/4にぶい黄色粘土30%、φ1~5cm亜円礫3%、硬い)
- 17 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(10YR4/4褐色粘土質シルト30%、φ1~10cm円礫3%)
- 18 10YR2/1黒色粘土質シルト(10YR4/4褐色粘土質シルト15%、φ0.5~3cm亜角~亜円礫5%、炭1%)
- 19 10YR2/1黒色粘土質シルト(φ1~17cm円礫1%、粘性小)
- 20 10YR2/1黒色粘土質シルト(φ1~5cm亜角~円礫5%、粘性中)
- 21 2.5Y3/1黒褐色粘土(φ1~2cm亜円礫1%)
- 22 10YR1.7/1黒色粘土質シルト(φ0.5~3cm亜角~円礫15%)
- 23 10YR1.7/1黒色粘土(炭1%、φ0.5~5cm亜角~亜円礫3%)
- 24 10YR1.7/1黒色粘土(26層土3%)
- 25 2.5Y2/1黒色粘土(26層土3%、φ1~12cm亜円礫1%)
- 26 2.5Y6/6明黄褐色粘土(2.5Y3/1黒褐色粘土20%)←地山(漸移的)Ⅲ

図8 トレンチ壁断面図(3)



- #### E5 トレンチ南東壁断面図 土層注記
- 1 アスファルト
 - 2 砕石(φ1~5cm角~亜角礫)
 - 3 10YR2/1黒色粘土質シルト(地山10%、φ1~8cm亜角~亜円礫10%)
 - 4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト(地山10%、粗砂粒30%、φ1~8cm亜円礫5%、5層土10%)
 - 5 10YR1.7/1黒色粘土(地山5%、φ1~5cm亜円礫5%)
 - 6 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(地山7%、φ0.5~5cm亜角~円礫10%)
 - 7 10YR2/1黒色粘土(φ0.5cm亜円礫10%)
 - 8 10YR2/1黒色粘土質シルト(地山40%、φ1~3cm円礫3%、炭1%)
 - 9 N1.5/黒色シルト(10層土15%、φ1~5cm角~亜角礫10%、レンガ)
 - 10 10YR1.7/1黒色粘土質シルト(11層土50%)
 - 11 N1.5/黒色砂質土(中砂粒)(13層土3%、炭50%、焼土2%、φ1~5cm角礫2%)
 - 12 C4トレンチ13層土(修正後No.)
 - 13 10YR1.7/1黒色粘土質シルト(地山15%、φ1~8cm角~亜円礫3%)
 - 14 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(φ1~5cm亜円礫15%、地山3%)
 - 15 10YR3/1黒褐色粘土(地山30%、φ1~6cm角~円礫1%)
 - 16 10YR2/1黒色粘土質シルト(地山1%、17層土3%、φ1~7cm円礫1%)
 - 17 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト(10YR3/1黒褐色粘土50%、φ1~7cm角~円礫1%)
 - 18 10YR1.7/1黒色粘土質シルト(φ1~7cm角~円礫3%、地山2%、焼土1%)
 - 19 10YR1.7/1黒色粘土質シルト(φ0.5~15cm角~円礫7%、地山1%)
 - 20 10YR1.7/1黒色粘土質シルト(φ1~5cm角~亜円礫2%、17層土7%、焼土・炭1%)
 - 21 10YR1.7/1黒色粘土(φ1~8cm角礫2%)
 - 22 10YR2/1黒色粘土(φ5~20cm角~円礫20%)
 - 23 2.5Y2/1黒色粘土質シルト(2.5GY5/1オリーブ灰色細砂粒5%)
 - 24 2.5Y2/1黒色粘土(中砂粒10%、φ1cm円礫1%、炭1%)
 - 25 10YR3/1黒褐色粘土(中砂粒10%、植物片3%)
 - 26 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(2.5GY5/1オリーブ灰色細砂粒25%、φ1~3cm円礫7%、炭1%)
 - 27 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(地山1%)
 - 28 10YR3/2黒褐色粘土質シルト(粗砂粒3%、φ1~2cm円礫2%)
 - 29 10YR2/1黒色粘土質シルト(φ1~5cm円礫2%、炭2%)
 - 30 10YR1.7/1黒色シルト(10YR3/1黒褐色粘土20%)
 - 31 10YR3/1黒褐色粘土(粗砂粒2%、φ0.5~15cm円礫30%、炭5%、磁器)
 - 32 2.5Y2/1黒色粘土質シルト(中砂粒2%、φ0.5~10cm角~円礫5%、炭2%、2.5Y3/2黒褐色粘土質シルト3%)
 - 33 2.5Y2/1黒色粘土質シルト(粗砂粒7%、φ0.5~7cm角~円礫20%、木片・炭2%、脆い)
 - (1~33層までの地山=10YR6/6明黄褐色粘土)
 - 34 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(φ1~5cm角~亜円礫3%、植物片2%)
 - 35 10YR2/1黒色粘土質シルト(φ1~14cm角~円礫1%、植物片15%)
 - SX6b 36 10YR1.7/1黒色粘土(38層土5%)
 - SX6a 37 10YR2/1黒褐色粘土質シルト(φ1~5cm円礫1%、植物片5%、30層土3%)
 - 地山 38 7.5Y7/2灰白色粘土 III

F5 トレンチ南東壁断面図



- #### F5 トレンチ断面図 土層注記
- 1 アスファルト
 - 2 砕石(φ1~5cm角~亜角礫)
 - 3 2.5Y5/4黄褐色細砂粒
 - 4 10YR2/1黒色粘土(10YR4/4褐色粘土質シルト10%、炭2%)
 - 5 10YR2/2黒褐色粘土質シルト(10YR4/4褐色粘土質シルト5%、炭2%)
 - 6 10YR2/2黒褐色粘土質シルト(10YR4/4褐色粘土質シルト30%、炭2%、硬くしまる)
 - 7 10YR2/2黒褐色粘土質シルト(10YR4/4褐色粘土質シルト25%、炭1%、φ2~5cm円礫1%、やや脆い)
 - 8 10YR2/2黒褐色粘土質シルト(10YR4/4褐色粘土質シルト30%、脆い) ←根固め
 - 9 10YR2/1黒色粘土質シルト(10YR4/4褐色粘土質シルト40%)
 - 10 10YR2/2黒褐色粘土(10YR4/4褐色粘土質シルト30%、炭1%、やや脆い)
 - 11 10YR4/4褐色粘土(10YR2/2黒褐色粘土質シルト15%、10YR1.7/1黒色粘土質シルト5%、φ1~5cm角~円礫3%)
 - 12 10YR3/2黒褐色粘土質シルト(11層土2%、焼土・炭1%)
 - 13 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(11層土20%、炭3%)
 - 14 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(炭2%、φ1~3cm角~円礫5%、硬い)
 - 15 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(炭2%、φ1~3cm円礫1%)
 - 16 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(炭10%、焼土20%)
 - 17 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(炭7%、21層土5%、φ1~3cm角~円礫2%、遺物多)
 - 18 10YR3/1黒褐色粘土質シルト(炭1%、脆い)
 - 19 10YR3/1黒褐色粘土(炭3%、φ1cm角~円礫1%)
 - 20 10YR2/1黒色粘土質シルト(炭1%、φ3cm角~円礫1%、21層土1%)
 - 21 10YR5/4にぶい黄褐色粘土(10YR3/2黒褐色粘土質シルト25%)
- 近代SB8掘り方
- SX8 10YR3/2黒褐色粘土質シルト(21層土7%、焼土1%)
- SX9 10YR3/2黒褐色粘土質シルト(21層土7%、焼土1%)
- SX10 10YR3/2黒褐色粘土質シルト(21層土7%、焼土1%)

図9 トレンチ壁断面図(4)

第3節 遺構

今回の宝町遺跡第19次発掘調査で検出した遺構は、建物1棟、溝4条、土坑28基、ピット18基、その他（不明遺構）10基である（図10～12）。その他（不明遺構）としたものは、おそらく土坑や溝の一部と考えられるが、いずれも調査区内で部分的に検出したものばかりで、全体形等の詳細は分からない。

なお、遺構の年代について、上層（近代）・下層（近世）の二時期を確認しており、前者については遺構記号の前に「近代」の語を付した。

以下、各遺構について種別に報告するが、表1の遺構観察表も合わせて参照されたい。

1) 上層の遺構

現地表下-0.6m～-1.5m前後で検出した建築遺構を上層の遺構とする。建物跡1棟、ピット7基を検出した。

建物跡

近代 SB8

近代SB8としたものは、A区東からB区東にかけて検出したレンガ建物の跡である。検出した範囲だけでも、約25m×約8mを測る。1905（明治38）年8月に完成した石川県金沢病院以来の眼科病棟の基礎部分と見られ、その平面配置は金沢大学資料館所蔵の「石川県金沢病院新築配置図」（図面の詳細時期は不明）・「金沢大学医学部附属病院平面配置図」（1949（昭和24）年7月時点）とも合致する。遺構内外からは、近世・近代の遺物が散在的に出土しているが、明確に本遺構に伴うものとしては、根固めから出土した近代の磁器鉢底部が挙げられる。

ピット

近代 P1～近代 P7

近代P1～P7としたものは、B区東C3・D3グリッドで検出したピット群である。平面形は、長軸・短軸0.4～0.5m程度の円形または楕円形を呈する。いずれも確認できたのは底面のみで、近代P3以外は遺構内に5～20cm大の円礫・垂円礫が多数残っていた。近代P5からは、近代に位置づけられる染付磁器小杯が1点出土している。少なくとも、あと1か所は同様のピットがあったものと推測され、柱8本以上の建物になると見られるが、金沢大学資料館所蔵の「石川県金沢病院新築配置図」や「金沢大学医学部附属病院平面配置図」には該当する建物が描かれていない。近代SX8に隣接・平行する平面配置のため、同時期に存在していたものと考えられるが、本ピット群については戦後に下る可能性もあるだろうか。宝町キャンパスが整備された昭和40年代中葉の航空写真（金沢大学50年史編纂委員会1999）には該当する建物が写っていないため、少なくともそれよりも前の建物の柱跡であると考えられるが、詳細は不明である。

以上、上層の遺構については、石川県金沢病院以来の眼科病棟跡及び関連遺構群（ピット群）と考えられる。これらは、現在の宝町地区よりも前の病院の姿そのものであり、金沢大学附

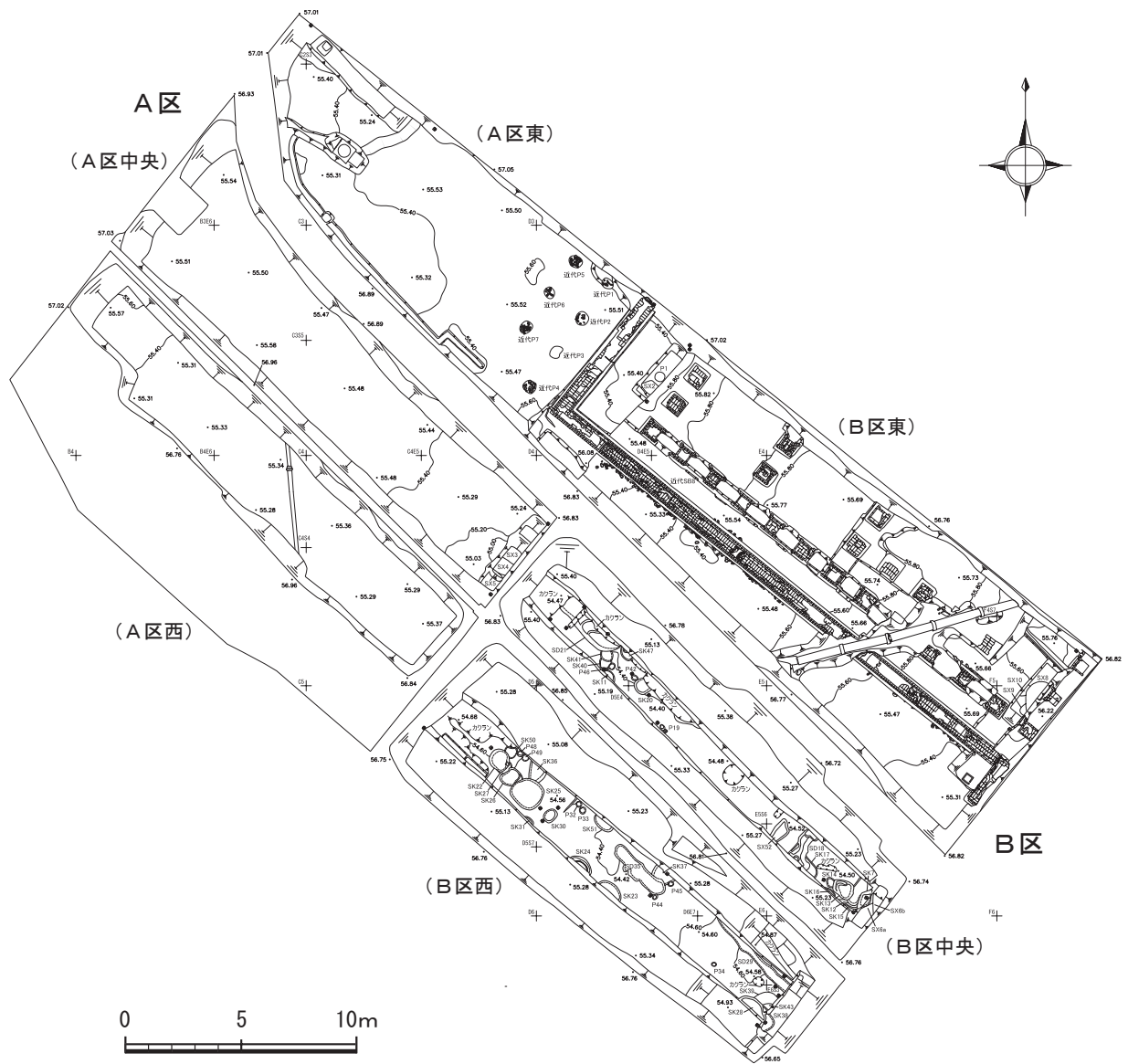


图 10 今回の調査区の全体平面図

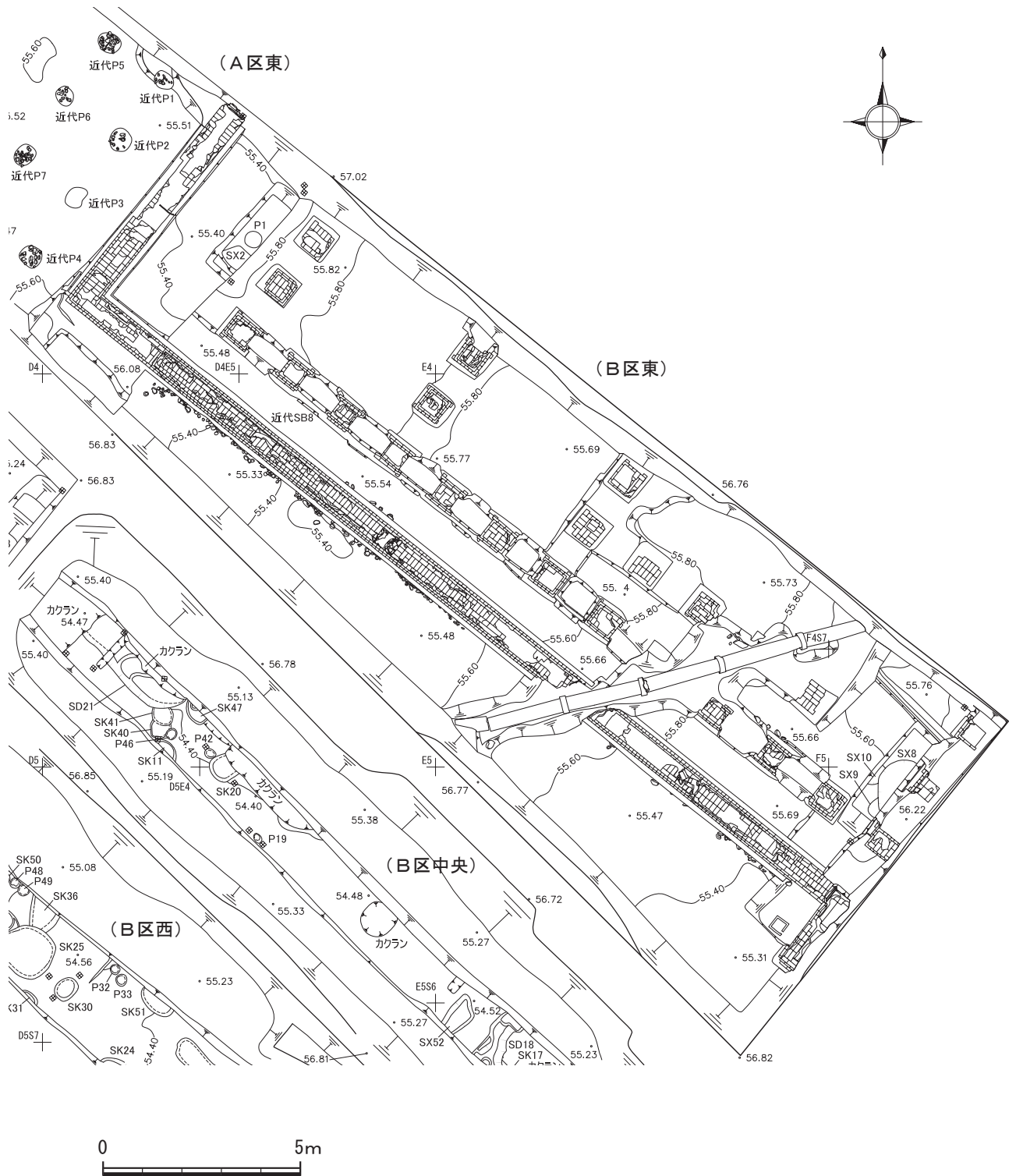


図11 A区東・B区東の遺構平面図

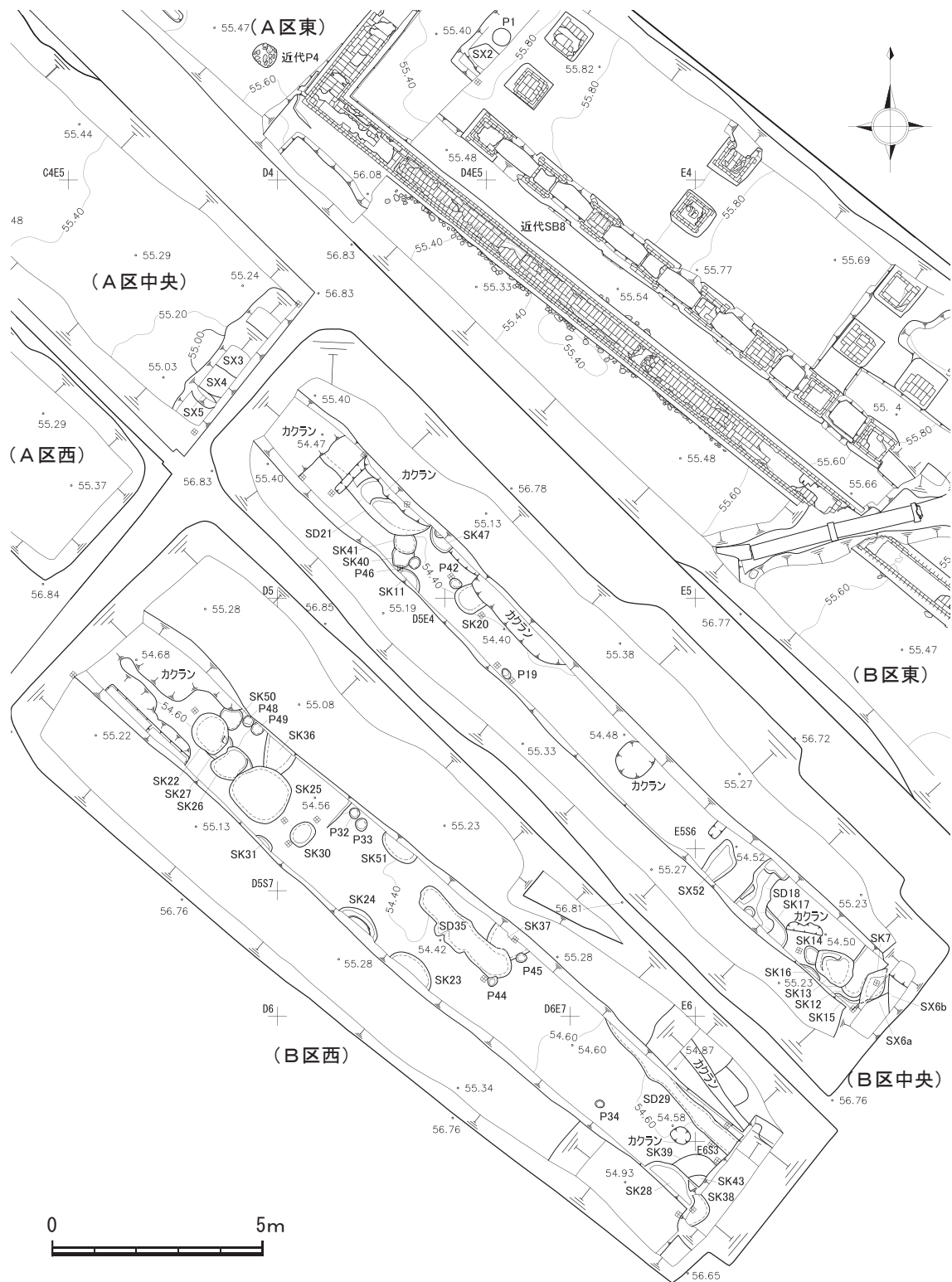


図 12 A区中央・B区中央・B区西の遺構平面図

属病院の前史を考える上で貴重な発見と言えよう。今回の調査区では遺構には伴わなかったが、次節で紹介するように金沢医科大学時代の病院食器やガラス瓶などが出土しており、ここで述べた上層遺構と合わせて当時の様子が浮かび上がる。

2) 下層の遺構

現地表下 - 2 m前後、Ⅲ層上面で検出した遺構を下層の遺構とする。具体的には、溝 4 条、土坑 28 基、ピット 11 基、その他（不明遺構）10 基（後述の SX6a・SX6b を別遺構として計上）である。各遺構内の出土遺物や埋土から見て、いずれも近世のものと考えられる。

溝

SD18

B 区中央 E5 グリッドで検出した幅約 0.5 ～ 1 m、深さ約 0.9 m の溝である。調査区を北東 - 南西方向に走り、SK17 を切る。断面形は有段 U 字形を呈し（図 12）、平面形は L 字形に曲がる可能性がある。

SD21

B 区中央 D4 グリッドで検出した大型の溝である。検出した範囲だけでも、長さ約 3 m、幅約 0.8 m を測る。深さ約 0.4 m で、断面形は楕形を呈する（図 15）。調査区を北西 - 南東方向に走り、SK41 を切る。

SD29

B 区西 D6・E6 グリッドを北西 - 南東方向に走る直線的な溝である。幅約 0.4 m、深さ約 0.2 m で、長さは 4 m 以上になる。断面形は楕形を呈する（図 15）。

SD35

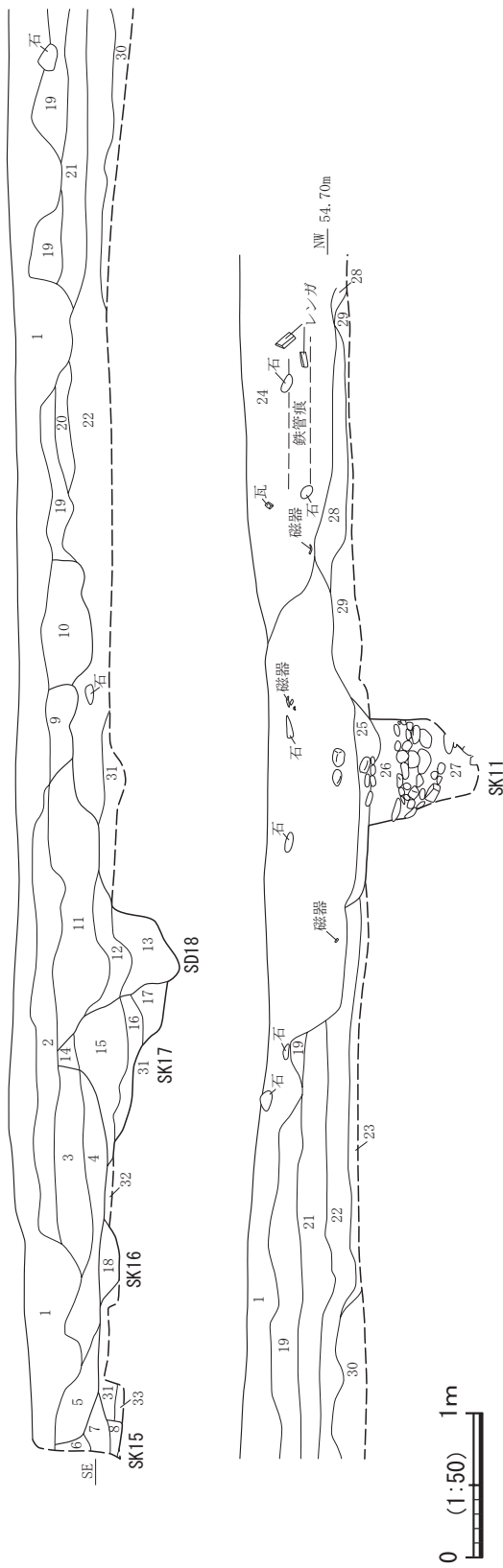
B 区西 D5 グリッドで検出した直線的な溝である。調査区を北西 - 南東方向に走るが、長さは 3 m 弱しかない。幅約 0.8 m、深さ約 0.1 m で、断面形は皿形である。SK37 を切り、P44 に切られる。図化できないほどの小片だが、遺構内から近世陶器片が数点出土している。

土坑

SK7

B 区中央 E5 グリッドで検出した、平面形が不整形、断面形が逆台形の土坑である（図 15）。長軸約 1 m、短軸約 0.5 m、深さ約 0.2 m を測る。確実にこの遺構に伴うものとして、肥前の染付皿が出土している。さらに、SK7・SK12・SK15 のいずれかの埋土から出土したと判断される土師器皿・磁器片がある。いずれも年代的には 17 世紀後半のものである。切り合い関係としては、SK12 と SK15 を切る。

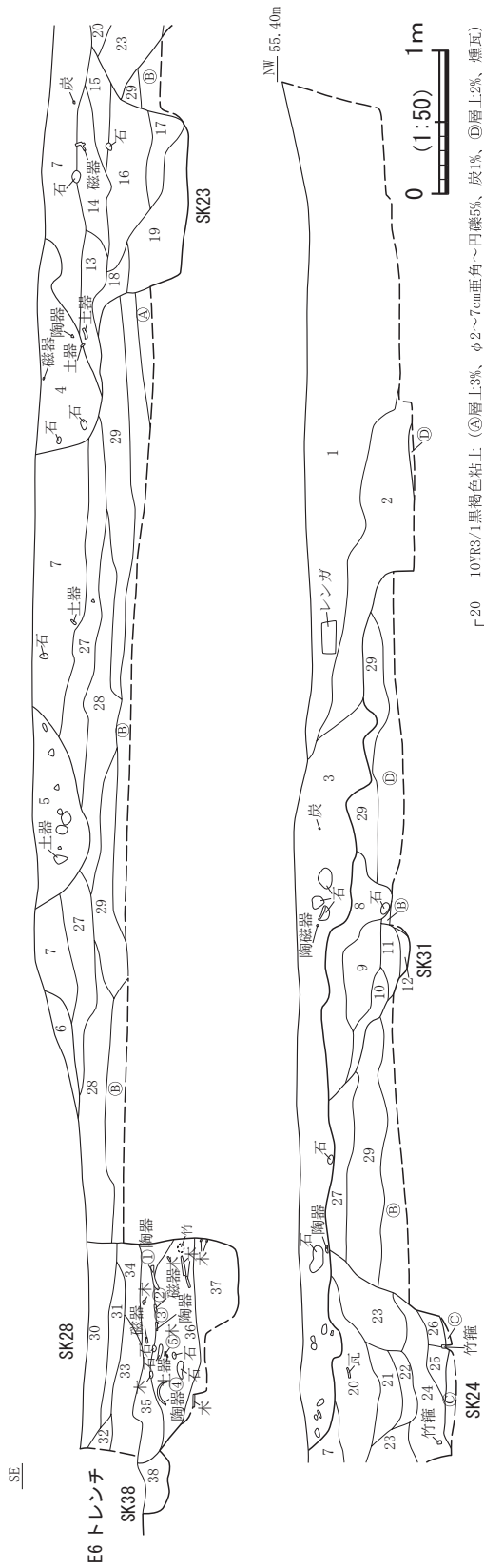
B区中央 南西壁断面図



- B区中央 南西壁断面図 土層注記**
- 近代盛土 I
- 1 10YR3/1黒褐色粘土質シルト (2.5Y6/6明黄褐色粘土質シルト2%、φ1~3cm亜円~円礫2%、炭2%)
 - 2 10YR2/1黒褐色粘土質シルト (φ1~3cm亜円~円礫2%、炭2%)
 - 3 2.5Y3/1黒褐色粘土 (2.5Y6/4にぶい)黄褐色粘土30%、硬い)
 - 4 2.5Y3/1黒褐色粘土 (2.5Y6/4にぶい)黄褐色粘土30%、硬い)
 - 5 2.5Y3/1黒褐色粘土 (2.5Y6/4にぶい)黄褐色粘土40%、硬い)
 - 6 10YR3/1黒褐色粘土質シルト (31層土3%)
 - 7 10YR3/1黒褐色粘土質シルト (31層土7%、軟らかい)
 - 8 10YR2/1黒褐色粘土 (31層土3%)
 - 9 10YR3/1黒褐色粘土 (炭1%)
 - 10 10YR1.7/1黒色粘土質シルト (10YR3/1黒褐色粘土30%、5Y6/4オリーブ黄色粘土5%、φ1~4cm亜円~円礫2%)
 - 11 10YR2/1黒色粘土質シルト (φ1~9cm円礫2%、炭1%)
 - 12 10YR2/1黒色粘土 (13層土3%)
 - 13 2.5Y4/2暗灰黄色粘土 (10YR3/1黒褐色粘土)
 - 14 10YR3/1黒褐色粘土
 - 15 10YR1.7/1黒色粘土質シルト (31層土3%)
 - 16 2.5Y3/1黒褐色粘土 (31層土2%、15層土5%)
 - 17 2.5Y4/2暗灰黄色粘土 (31層土2%、15層土7%)
 - 18 2.5Y4/1黄灰色粘土 (31層土30%、10YR1.7/1黒色粘土質シルト10%)
 - 19 10YR3/1黒褐色粘土 (φ0.5~1cm亜角~亜円礫5%)
 - 20 10YR2/1黒色粘土 (22層土25%、φ1cm亜角~円礫1%、炭1%)
 - 21 10YR2/1黒色粘土質シルト (5Y5/3灰オリーブ粘土帯状に10%、φ0.5~3cm亜角~円礫1%、炭1%)
 - 22 10YR1.7/1黒色粘土質シルト (31層土20%、包含層由来)
 - 23 10YR3/1黒褐色粘土 (31層土30%)
- 漸移層
- ~地山 III
- 24 C4トレンチ13層 (※修正済No.) ←鉄管掘り方が
 - 25 10YR3/1黒褐色粘土 (10YR5/6黄褐色粘土5%、炭2%、φ0.5~1cm円礫10%)
 - 26 10YR3/1黒褐色粘土質シルト (炭1%)
 - 27 10YR3/1黒褐色粘土質シルト (φ5~15cm円礫40%、軟らかい)
 - 28 10YR3/1黒褐色粘土質シルト (10YR4/4褐色粘土質シルト10%)
 - 29 10YR4/4褐色粘土質シルト (10YR3/1黒褐色粘土質シルト40%)
 - 30 2.5Y5/4黄褐色粘土質シルト (10YR1.7/1黒色粘土質シルト15%)
 - 31 5Y5/3灰オリーブ色粘土 (2.5Y5/1黄灰色粘土30%)
 - 32 10YR3/1黒褐色粘土 (31層土3%)
 - 33 5Y5/3灰オリーブ色粘土 (10YR1.7/1黒色粘土質シルト15%)

図 13 下層壁断面図 (1)

Ｂ区西 南西壁断面図



Ｂ区西 南西壁断面図 土層表記

- | | | | |
|--|--|------------------------------|---|
| 1 | C4トレンチ13層 | | |
| 2 | 10VR3/1黒褐色粘土質シルト | (粗砂粒10%, φ1~5cm円礫3%, 炭・焼土5%) | 10VR3/1黒褐色粘土 (A層土3%, φ2~7cm垂直~円礫5%, 炭1%, ①層土2%, 燻瓦) |
| 3 | 10VR3/1黒褐色粘土質シルト | (φ1~14cm円礫5%, 粗砂粒10%) | 21 10VR2/1黒褐色粘土 (φ3cm円礫1%) |
| 4 | 10VR3/2黒褐色粘土質シルト | (φ2~10cm円礫3%, 炭1%, 炭片) | 22 10VR3/1黒褐色粘土 (D層土7%, 軟らかい) |
| 5 | 10VR2/2黒褐色粘土質シルト | (φ1~10cm垂直~円礫20%, 磁器) | 23 10VR2/1黒褐色粘土 (D層土25%, 炭1%, φ1cm円礫1%) |
| 6 | 10VR3/1黒褐色粘土質シルト | (φ1~10cm垂直~円礫15%, 炭5%) | 24 10VR3/1黒褐色粘土 (A層土25%) |
| 7 | 10VR2/2黒褐色粘土質シルト | (φ1~10cm垂直~円礫10%, 炭2%, 焼土3%) | 25 2.5Y2/1黒褐色粘土質シルト (中砂粒10%) |
| 8 | 10VR2/1黒褐色粘土質シルト | (φ3~5cm円礫3%, 炭2%, 焼土1%) | 26 10VR3/1黒褐色粘土 (A層土10%, ②層土5%) |
| 9 | 10VR2/2黒褐色粘土質シルト | (φ3~5cm円礫5%, ①層土2%, しまり弱) | 27 10VR2/1黒褐色粘土 (A層土10%, ③層土5%) |
| 10 | 10VR3/1黒褐色粘土 (D層土10%, 炭7%) | | 28 10VR1.7/1黒褐色粘土 (炭1%, 29層土10%, 軟らかい) |
| 11 | 10VR4/2灰黄褐色粘土 (D層土30%) | | 29 10VR3/1黒褐色粘土 (10VR4/1褐灰色粘土10%, 炭3%, 焼土2%) |
| 12 | 10VR4/2灰黄褐色粘土 (D層土30%) | | 30 10VR2/1黒褐色粘土質シルト (C層土5%, φ1~2cm円礫2%, 炭2%) |
| 13 | 2.5Y3/1黒褐色粘土 (φ1~3cm円礫2%, 炭・焼土1%, 土器) | | 31 2.5Y2/1黒褐色粘土質シルト (C層土5%, φ1~2cm円礫2%, 炭2%) |
| 14 | 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト (φ1~2cm円礫1%, 炭3%) | | 32 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト (A層土10%, 炭3%) |
| 15 | 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト (φ1~2cm円礫7%) | | 33 2.5Y2/1黒褐色粘土質シルト (C層土3%, φ1~7cm円礫5%) |
| 16 | 2.5Y2/1黒褐色粘土 (φ0.5~5cm円礫2%, ①層土5%, 硬い) | | 34 2.5Y3/1黒褐色粘土 (φ1~3cm円礫5%, 木片2%) |
| 17 | 2.5Y2/1黒褐色粘土 (①層土3%, 軟らかい) | | 35 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト (φ1~5cm垂直~円礫5%, 木片7%, 陶磁器、軟らかい) |
| 18 | 2.5Y2/1黒褐色粘土 (A層土5%, ①層土5%) | | 36 10VR2/1黒褐色粘土 (φ1~12cm垂直~円礫10%, 木片3%, 植物片30%) |
| 19 | 2.5Y2/1黒褐色粘土 (A層土30%, 炭・軟らかい) | | 37 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト (φ1~3cm垂直~円礫3%) |
| | | | 38 2.5Y2/1黒褐色粘土 (φ1~4cm円礫3%, 炭1%) |
| 地山 III | | | |
| ① 2.5Y5/3黄褐色粘土 | | | |
| ② 2.5Y5/3黄褐色粘土 (10VR4/1褐灰色粘土50%, 炭1%) | | | |
| ③ 5Y5/3灰オリーブ色粘土質シルト (粗砂粒10%, φ0.5~7cm円礫7%) | | | |
| ④ 10VR5/6黄褐色粘土 (10VR3/1黒褐色粘土50%) | | | |

図 14 下層壁断面図 (2)

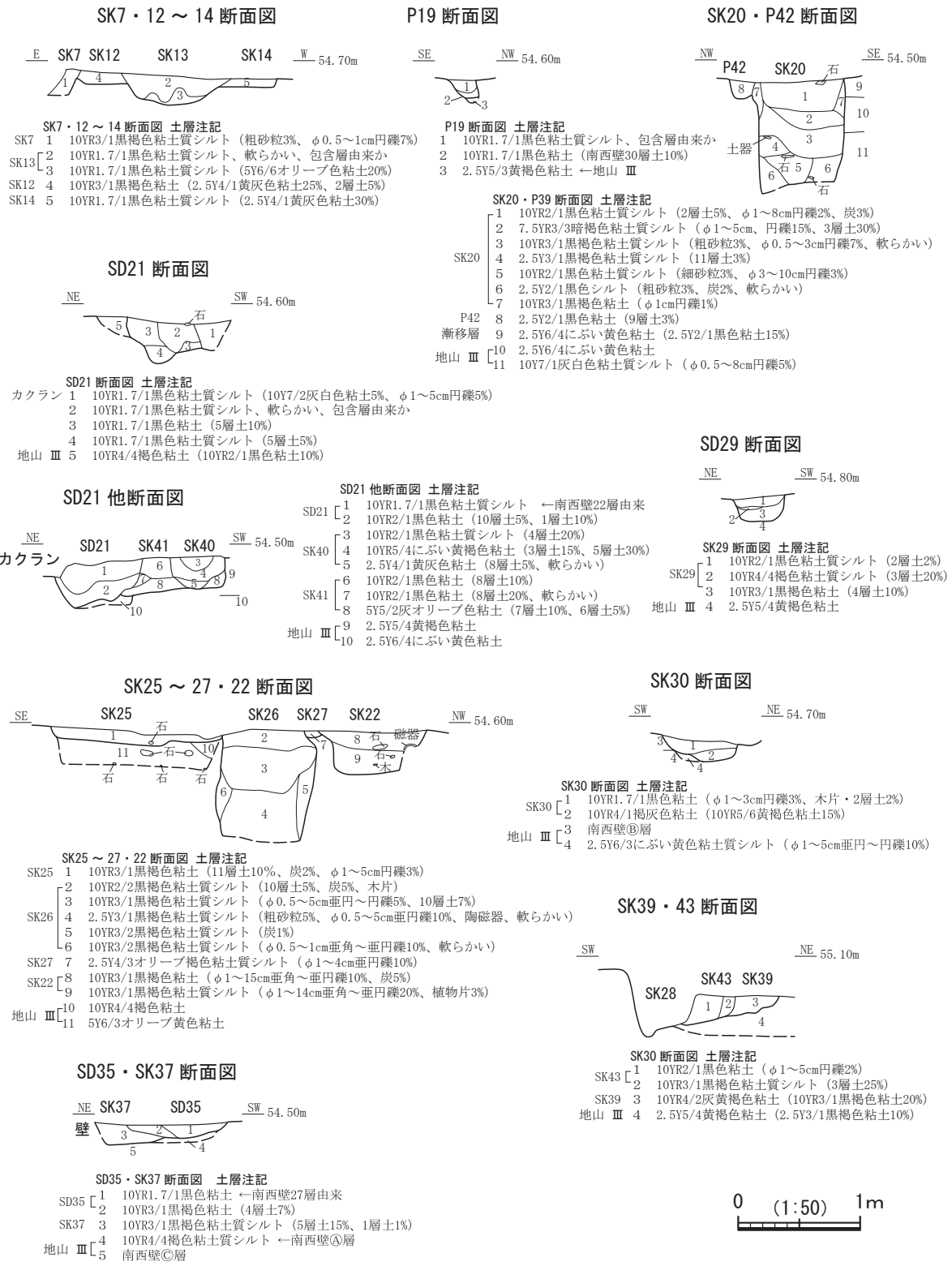


図 15 個別遺構断面図

SK11

B区中央D4グリッドで検出した土坑である。一部のみの検出で平面形は不明だが、断面形は有段U字形を呈し、深さ約0.9mを測る(図13)。土器・陶磁器等の人工物は出土しなかったが、拳大程度の垂角礫・垂円礫・円礫が大量に詰まっていたことが特筆される。

SK12

B区中央E5グリッドで検出した土坑である。SK7・SK13に切られて平面形が不明だが、断面形は皿形を呈し、深さは約0.1mである(図15)。この遺構に確実に伴う遺物はないが、SK7・SK12・SK15のいずれかの埋土から出土したと見られる土師器皿・磁器片がある。土師器皿は17世紀後半に位置づけられる。

SK13

B区中央E5グリッドで検出した土坑である。平面形がやや歪な楕円形、断面形が椀形を呈し、長軸約1m、短軸約0.8m、深さ約0.3mを測る(図15)。SK12・SK14を切る。

SK14

B区中央E5グリッドで検出した土坑で、平面形が楕円形、断面形が皿形を呈する。長軸約0.5m、短軸約0.4mで、深さは0.1mもない(図15)。SK13に切られる。

SK15

B区中央E5グリッドで部分的に検出した土坑で、平面形も断面形も不明である。確認できる範囲での深さは、約0.5mである(図13)。SK7に切られる。確実な出土遺物はないが、SK7・SK12・SK15のいずれかの埋土から出土したと判断される土師器皿・磁器片があり、17世紀後半以前の可能性が考えられる。

SK16

B区中央E5グリッドで部分的に検出した土坑である。平面形は不明だが、断面形は皿形を呈し、深さは約0.2mを測る(図13)。

SK17

B区中央E5グリッドで検出した土坑であるが、平面形も断面形も不明である。確認できる範囲での深さは、約0.8mである(図13)。SD18に切られる。

SK20

B区中央D4・D5グリッドで検出した土坑である。今回の調査区では出土遺物が多い遺構の一つである。平面形は隅丸方形で、断面は箱形を呈する(図15)。一方の軸が長さ0.7mで、深さは約0.9mを測る。17世紀後半の土器・陶磁器とともに、箸・下駄などの木製品やモモ核が出土している。切り合い関係としては、P42を切る。

SK22

B区西 C5 グリッドで検出した土坑で、平面形は円形、断面形は箱形を呈する（図 15）。長軸約 1 m、短軸約 0.9 m、深さ約 0.4 mを測る。土器・陶磁器が多く出土し、加えて砥石が 1 点出土している。土器・陶磁器の年代については、一部 17 世紀末に遡る可能性があるが、18 世紀～19 世紀に位置づけられる。SK27・SK50 を切る。

SK23

B区西 D5 グリッドで検出した、平面形が楕円形、断面形が逆台形の土坑である（図 14）。深さは約 0.8 mを測る。18 世紀後半～19 世紀前半頃と見られる土器・磁器・石英が出土している。壁面の土層観察で、SK24 を切っていることが確認できる。

SK24

B区西 D5 グリッドで検出した土坑である。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、深さ約 0.9 mを測る（図 14）。埋土中に、結桶のものと見られる竹籬 1 段を確認した。より具体的には、S 方向のねじり籬（松永 2015）である。おそらく、結桶本体は抜き取られたが、最下段の竹籬のみが残されたものと考えられる。第 5 節にて詳述するが、現場で採取した埋土のサンプルに対して各種自然科学分析（寄生虫卵分析、リン・カルシウム分析、珪藻分析）を実施した結果、トイレ遺構であると考えられる。竹籬の他に、19 世紀の染付磁器と燻瓦が出土している。SK23 に切られる。

SK25

B区西 C5・D5 グリッドで検出した、平面形が円形、断面形が皿形の土坑である（図 15）。長軸約 1.4 m、短軸約 1.3 m、深さ約 0.2 mを測る。18 世紀頃の染付磁器が出土している。切り合い関係では、SK26・SK36 を切る。

SK26

B区西 C5 グリッドで検出した土坑である。平面形は歪な楕円形、断面形は箱形を呈し、一方の軸が長さ約 0.8 m、深さは約 0.9 mを測る（図 15）。近世の土器・陶磁器・磁器製品に加え、簪と見られる金属製品や曲物底板等の木製品も出土している。土器・陶磁器の年代は、17 世紀後半～18 世紀に位置づけられる。SK27 を切り、SK25 に切られる。

SK27

B区西 C5 グリッドで検出した平面形・断面形ともに不明の土坑である。確認できる範囲での深さも、0.1 mに満たない（図 15）。出土遺物はないが、SK22・SK26 に切られることから、17 世紀後半以前のものと考えられる。

SK28

B区西 D6 グリッドで検出した土坑である。平面形は楕円形、断面形は箱形を呈し、一方の軸が長さ約 1.5 mで、深さは約 1 mを測る（図 14）。近世の土器・陶磁器とともに、漆器・

結桶等の木製品が多数出土している。さらに、1点のみだが銭貨（寛永通宝）も出土した。土器・陶磁器の年代については、一部17世紀末に遡る可能性があるが、18世紀～19世紀に位置づけられる。切り合い関係としては、SK38・SK39・SK43を切ることが確認できる。

SK30

B区西D5グリッドで検出した土坑である。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈し、長軸約0.6m、短軸0.5m、深さ約0.2mを測る（図15）。18世紀末～19世紀初頭のものと思われる京・信楽の碗底部や、下駄歯が出土している。

SK31

B区西C5グリッドで部分的に検出した土坑である。断面形は椀形を呈し、深さは約0.6mを測る（図14）。

SK36

B区西C5・D5グリッドで部分的に検出した土坑である。断面形は椀形を呈し、深さは約0.3mを測る（図14）。SK25に切られる。

SK37

B区西D5グリッドで部分的に検出した土坑で、断面形が逆台形を呈し、深さは約0.2mを測る（図15）。SD35・P45に切られる。

SK38

B区西D6・E6グリッドで部分的に検出した土坑である。断面形は椀形を呈するようであるが、深さは約0.2m以上という程度しか分からない（図14）。18世紀～19世紀の土坑であるSK28に切られることから、それ以前の遺構であることだけは間違いない。

SK39

B区西D6・E6グリッドで部分的に検出した土坑である。断面形は皿形を呈し、深さは約0.2mである（図15）。SK28・SK43に切られることから、少なくとも18世紀～19世紀以前に位置づけられる。

SK40

B区中央D4グリッドで検出した、平面形が円形、断面形が椀形の土坑である。一方の軸が長さ約0.5mで、深さは約0.3mである（図15）。切り合い関係としては、土層断面観察によりSK41を切ることが確認できる。

SK41

B区中央D4グリッドで検出した土坑である。平面形は円形、断面形は箱形を呈し、一方の軸が長さ約0.6m、深さは約0.3mを測る（図15）。SD21・SK40に切られる。

SK43

B区西 D6・E6 グリッドで部分的に検出した土坑である。平面形は不明だが、断面形は楕形を呈し、深さ約 0.3 m を測る (図 15)。SK39 を切り、SK28 に切られる。特に SK28 に切られることから、18 世紀～19 世紀以前の遺構と考えられる。

SK47

B区中央 D4 グリッドで部分的に検出した土坑である。平面形はおそらく楕円形で、断面形は有段 U 字形を呈する。一方の軸が長さ約 0.7 m で、深さは約 0.2 m を測る。

SK50

B区西 C5 グリッドで検出した、平面形が隅丸方形、断面形が皿形の土坑である。長軸・短軸約 0.5 m、深さ約 0.1 m を測る。概ね 18 世紀～19 世紀に位置づけられる SK22 に切られることから、それ以前の遺構と考えられる。

SK51

B区西 D5 グリッドで部分的に検出した土坑である。平面形はおそらく楕円形で、断面形は皿形である。一方の軸が長さ約 1 m で、深さは約 0.2 m である。

ピット

P1

A区東 D3 グリッドで検出した、平面形が円形のピットである。A区の近世遺構は埋め戻し保護としたため、断面形と深さは分からないが、長軸・短軸ともに約 0.4 m である。

P19

B区中央 D5 グリッドで検出したピットである。平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈し、長軸約 0.3 m、短軸約 0.2 m、深さ 0.2 m を測る (図 15)。B区中央と B区西の間が既設埋設物により不明のため断定はできないが、P32 または P33・P46・P48 または P49 とともに一つの建物を成す可能性がある。

P32

B区西 D5 グリッドで検出したピットである。平面形は円形、断面形は楕形を呈し、長軸約 0.3 m、短軸約 0.2 m、深さ 0.1 m を測る。P19・P46・P48 または P49 とともに一つの建物を成す可能性がある。

P33

B区西 D5 グリッドで検出したピットである。平面形は円形、断面形は皿形を呈し、長軸・短軸ともに約 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。P19・P46・P48 または P49 とともに一つの建物を成す可能性がある。

P34

B区西D6グリッドで検出したピットで、平面形は円形、断面形は皿形を呈する。長軸・短軸ともに約0.2mで、深さは0.1mに満たない。

P42

B区中央D4グリッドで検出したピットである。平面形は楕円形、断面形は椀形を呈し、長軸約0.3m、短軸約0.2m、深さ約0.2mを測る（図15）。17世紀後半のSK20に切られることから、それ以前の遺構と考えられる。

P44

B区西D5グリッドで検出したピットである。平面形が歪な隅丸方形、断面形が椀形を呈し、長軸約0.3m、短軸約0.2m、深さ約0.2mを測る。切り合い関係としては、SD35を切っている。

P45

B区西D5グリッドで検出したピットである。平面形が円形、断面形が椀形を呈し、長軸約0.3m、短軸約0.2m、深さ約0.1mを測る。SK37を切る。

P46

B区中央D4グリッドで検出したピットで、平面形が円形、断面形が椀形を呈する。長軸・短軸ともに約0.3mで、深さは約0.1mである。P19・P32またはP33・P48またはP49とともに一つの建物を成す可能性がある。

P48

B区西C5グリッドで検出したピットである。平面形が円形、断面形が椀形を呈し、長軸約0.3m、深さは約0.1mを測る。P19・P32またはP33・P46とともに一つの建物を成す可能性がある。

P49

B区西C5グリッドで検出したピットである。平面形が円形、断面形が皿形を呈し、長軸約0.3m、深さは0.1mに満たない。P19・P32またはP33・P46とともに一つの建物を成す可能性がある。

その他（不明遺構）

SX2

A区東D3トレンチで部分的に検出した遺構である（図7）。A区の近世遺構は埋め戻し保護としたため、平面形だけでなく断面形や正確な深さも不明である。

SX3

A区中央C4トレンチで検出した遺構である。埋め戻し保護としたため、平面形や正確な

深さは不明だが、断面形は有段U字形のようである（図7）。D3 トレンチ壁面の土層観察で、SX4 を切っていることが確認できる。

SX4

A区中央C4 トレンチで検出した遺構である。埋め戻し保護としたため、平面形や正確な深さは不明である。断面形は楕形を呈すると見られる（図7）。D3 トレンチ壁面の土層観察から、SX3・SX5 よりも古い遺構であることが分かる。

SX5

A区中央C4 トレンチで検出した遺構である。同地点のSX3・SX4 同様、埋め戻し保護としたため、平面形や正確な深さは不明である。断面形は皿形のようである（図7）。D3 トレンチ壁面の土層観察から、SX4 よりも新しい遺構であることが確認できる。

SX6a・SX6b

SX6a・SX6b は、B区中央の南東端、E5 トレンチ内で部分的に検出した遺構である。両者とも断面楕形を呈し、SX6a は深さ約 0.3 m、SX6b は深さ 0.4 m を測る（図9）。検出・掘削当初はSX6 という一つの遺構と捉えていたが、掘り下げていく過程でSX6a・SX6b に分けられるという結論に至った。切り合い関係では、SX6a の後にSX6b が構築されている。SX6a から出土した近世陶磁器を見ると、その年代は17世紀後半に位置づけられ、SX6b はそれ以降ということになる。SX6a・SX6b 共通の特徴として、木製品が多く出土したことが挙げられる。

SX8

B区東の南東端、F5 トレンチで部分的に検出した遺構である。ちょうど近世の猷珠寺の一角にあたり、同寺で使用されていたと見られる土師器皿・陶磁器・焼塩壺が出土した。特に土師器皿は、完形品も含めて100枚分以上出土している。これらの遺物は、18世紀前半主体のものである。切り合い関係としては、SX9・SX10 を切る（図9）。

SX9

B区東F5 トレンチで部分的に検出した遺構である。詳細は不明だが、SX8 に切られることから、少なくとも18世紀前半以前に位置づけられる（図9）。

SX10

B区東F5 トレンチで部分的に検出した遺構である。SX9 同様、SX8 に切られ、18世紀前半以前に位置づけられる。

SX52

B区中央E5 グリッドで部分検出した遺構である。平面形が不整形で、断面形が皿形を呈する。幅約 0.6 m、深さ約 0.2 m の溝になる可能性があるだろうか。

以上のように、下層の遺構については、遺物を伴わない溝・土坑・ピット・その他（不明遺構）の割合が多いが、それゆえに近世遺物が集中的に伴う遺構（SK・SX）が一際目立つこととなった。具体的には、SK20・SK22・SK26・SK28・SX6a・SX6b・SX8が該当する。調査区内で部分的に検出したものについては断言できないが、基本的にこれらの遺構は廃棄土坑の類と考えることができよう。次節で詳しく述べるが、17世紀後半～19世紀の土器・陶磁器・木製品等が比較的まとまり良く出土しており、近世の調査区周辺における人々の生活を知る上で有益な情報を得ることができた。これら以外では、トイレ遺構と見られるSK24が特筆され、まさに近世当時の人々の生活が目に見えようような成果となった。

表1 遺構観察表

遺構記号	遺構番号	調査区	グリッド	埋土	法量 (m)			平面形	断面形	切り合い関係	備考
					長軸/長さ	短軸/幅	深さ				
近代SP	1	A区東	D3	—	0.52	0.42	0.16	楕円形	皿形		礎多数出土
近代SP	2	A区東	D3	—	0.58	0.55	0.05	円形	皿形		礎多数出土
近代SP	3	A区東	D3	—	0.59	0.46	0.04	楕円形	皿形		
近代SP	4	A区東	C3	—	0.54	0.52	0.05	円形	皿形		礎多数出土
近代SP	5	A区東	D3	—	0.60	0.47	0.02	楕円形	皿形		礎多数・磁器出土
近代SP	6	A区東	D3	—	0.47	0.43	0.07	楕円形	皿形		礎多数出土
近代SP	7	A区東	C3	—	0.57	0.45	0.01	楕円形	皿形		礎多数出土
近代SB	8	A区東・B区東	D3~F5	10YR2/2黒褐色粘土質シルト(地山10%、φ1~20cm角~垂角礫7%、炭1%)ほか	25.47	8.27	0.64	長方形	逆台形		磁器出土
P	1	A区東	D3	10YR3/1黒褐色粘土質シルト	0.43	0.42	—	円形	—		
SX	2	A区東	D3	10YR3/1黒褐色粘土質シルト	(0.61)	(0.54)	(0.05)	全体形不明	全体形不明		
SX	3	A区中央	C4	10YR3/1黒褐色粘土質シルト(地山1%、φ1~2cm垂円礫5%、炭2%、やや脆い)ほか	(0.63)	(0.59)	(0.56)	全体形不明	有段U字形	SX4→SX3	
SX	4	A区中央	C4	10YR2/2黒褐色粘土質シルト(炭3%、焼土2%)	(0.67)	(0.59)	(0.59)	全体形不明	楕形	SX4→SX3・SX5	
SX	5	A区中央	C4	10YR2/1黒褐色粘土質シルト(地山5%、炭1%)	(0.58)	(0.11)	(0.24)	全体形不明	皿形	SX4→SX5	
SX	6a	B区中央	E5	10YR2/1黒褐色粘土質シルト(φ1~5cm円礫1%、植物片5%、30層土3%)	(1.18)	(0.58)	0.31	全体形不明	楕形	SX6a→SX6b	陶磁器・木製品出土
SX	6b	B区中央	E5	10YR2/1黒褐色粘土質シルト(φ1~14cm垂円礫1%、植物片15%)ほか	(0.73)	(0.54)	0.40	全体形不明	楕形	SX6a→SX6b	木製品出土
SK	7	B区中央	E5	10YR3/1黒褐色粘土質シルト(粗砂粒3%、φ0.5~1cm円礫7%)	1.05	0.52	0.21	不整形	逆台形	SK12・SK15→SK7	磁器(・土器?)出土
SX	8	B区東	F5	10YR2/1黒褐色粘土質シルト(炭2%、φ1~3cm円礫1%)ほか	1.52	(0.57)	(0.41)	全体形不明	全体形不明	SX3・SX10→SX8	土器・陶磁器出土
SX	9	B区東	F5	10YR3/1黒褐色粘土質シルト(炭1%、脆い)ほか	(0.45)	(0.31)	(0.31)	全体形不明	全体形不明	SX9→SX8	
SX	10	B区東	F5	10YR3/2黒褐色粘土質シルト(地山漸移層土7%、焼土1%)	0.59	(0.20)	—	全体形不明	—	SX10→SX8	土器・磁器出土
SK	11	B区中央	D4	10YR3/1黒褐色粘土(10YR5/6黄褐色粘土5%、炭2%、φ0.5~11cm円礫10%)ほか	0.71	(0.22)	0.92	全体形不明	有段U字形		礎多数出土
SK	12	B区中央	E5	10YR3/1黒褐色粘土(2.5Y4/1黄灰色粘土25%、2層土5%)	(1.19)	(0.70)	0.11	全体形不明	皿形	SK12→SK7・SK13	(土器出土?)
SK	13	B区中央	E5	10YR1.7/1黒色粘土質シルトほか	1.02	0.75	0.26	楕円形	楕形	SK12・SK14→SK13	
SK	14	B区中央	E5	10YR1.7/1黒色粘土質シルト(2.5Y4/1黄灰色粘土30%)	(0.49)	0.38	0.07	楕円形	皿形	SK14→SK13	
SK	15	B区中央	E5	10YR3/1黒褐色粘土質シルトほか	(0.57)	(0.30)	0.45	全体形不明	全体形不明	SK15→SK7	(土器出土?)
SK	16	B区中央	E5	2.5Y4/1黄灰色粘土(31層土30%、10YR1.7/1黒色粘土質シルト10%)	0.60	(0.11)	0.15	全体形不明	皿形		
SK	17	B区中央	E5	10YR3/1黒褐色粘土ほか	(0.97)	(0.42)	0.75	全体形不明	全体形不明	SK17→SD18	
SD	18	B区中央	E5	10YR2/1黒褐色粘土質シルト(φ1~9cm円礫2%、炭1%)ほか	(1.35)	(1.10)	0.87	L字形か	有段U字形	SK17→SD18	
P	19	B区中央	D5	10YR1.7/1黒色粘土質シルトほか	0.26	0.18	0.20	楕円形	U字形		
SK	20	B区中央	D4・D5	10YR2/1黒褐色粘土質シルト(2層土5%、φ1~8cm円礫2%、炭3%)ほか	0.70	(0.54)	0.92	隅丸方形	箱形	P42→SK20	土器・陶磁器・石・木製品・モモ核出土
SD	21	B区中央	D4	10YR1.7/1黒色粘土質シルトほか	(3.07)	(0.81)	0.39	直線形	楕形	SK41→SD21	
SK	22	B区西	C5	10YR3/1黒褐色粘土(φ1~15cm垂角~垂円礫10%、炭5%)ほか	0.95	0.87	0.37	円形	箱形	SK27・SK50→SK22	土器・陶磁器・石製品出土
SK	23	B区西	D5	10YR3/1黒褐色粘土(φ1~3cm円礫2%、炭・焼土1%、土器)ほか	1.23	(0.37)	0.76	楕円形	逆台形	SK24→SK23	土器・磁器・石出土
SK	24	B区西	D5	10YR3/1黒褐色粘土(①層土3%、φ2~7cm垂角~円礫5%、炭1%、②層土2%、種豆)ほか	1.13	(0.37)	0.86	楕円形	逆台形	SK24→SK23	竹箆・磁器・瓦出土、トイレ遺構
SK	25	B区西	C5・D5	10YR3/1黒褐色粘土(11層土10%、炭2%、φ1~5cm円礫3%)	1.39	1.27	0.16	円形	皿形	SK26・SK36→SK25	磁器出土
SK	26	B区西	C5	10YR2/2黒褐色粘土質シルト(10層土5%、炭5%、木片)ほか	0.83	(0.70)	0.93	楕円形	箱形	SK27→SK26→SK25	土器・陶磁器・磁器製品・金属製品・木製品
SK	27	B区西	C5	2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルト(φ1~4cm垂円礫10%)	0.64	(0.27)	0.07	全体形不明	全体形不明	SK27→SK22・SK26	
SK	28	B区西	D6	10YR2/1黒褐色粘土質シルト(⑤層土帯状に10%、炭3%、焼土2%)ほか	1.49	(0.44)	1.03	楕円形	箱形	SK38・SK39・SK43→SK28	土器・陶磁器・金属製品・木製品出土
SD	29	B区西	D6・E6	10YR2/1黒褐色粘土質シルト(2層土2%)ほか	(4.36)	0.44	0.21	直線形	楕形		
SK	30	B区西	D5	10YR1.7/1黒色粘土(φ1~3cm円礫3%、木片・2層土2%)	0.63	0.50	0.22	楕円形	皿形		陶器・木製品出土
SK	31	B区西	C5	10YR2/2黒褐色粘土質シルト(φ3~5cm円礫3%、炭2%、焼土1%)ほか	0.52	(0.13)	0.61	全体形不明	楕形		
P	32	B区西	D5	10YR3/1黒褐色粘土質シルト(φ0.5cm垂円礫2%)	0.26	0.24	0.10	円形	楕形		
P	33	B区西	D5	10YR3/1黒褐色粘土質シルト	0.30	0.28	0.08	円形	皿形		
P	34	B区西	D6	10YR3/3黒褐色粘土(地山5%)	0.22	0.18	0.06	円形	皿形		
SD	35	B区西	D5	10YR1.7/1黒色粘土ほか	2.86	0.77	0.11	直線形	皿形	SK37→SD35→P44	陶器出土
SK	36	B区西	C5・D5	10YR2/1黒色粘土(φ1~6cm垂円~円礫2%、炭3%)	0.89	(0.60)	0.27	全体形不明	楕形	SK36→SK25	
SK	37	B区西	D5	10YR3/1黒褐色粘土質シルト(5層土15%、1層土1%)	1.05	(0.47)	0.18	全体形不明	逆台形	SK37→SD35・P45	
SK	38	B区西	D6・E6	2.5Y2/1黒色粘土(φ1~4cm円礫3%、炭1%)	(0.70)	(0.62)	(0.23)	全体形不明	楕形	SK38→SK28	
SK	39	B区西	D6・E6	10YR4/2灰黄褐色粘土(10YR3/1黒褐色粘土20%)	(0.83)	(0.67)	0.17	全体形不明	皿形	SK39→SK28・SK43	
SK	40	B区中央	D4	10YR2/1黒色粘土質シルト(4層土20%)ほか	0.53	(0.43)	0.27	円形	楕形	SK41→SK40	
SK	41	B区中央	D4	10YR2/1黒色粘土(8層土10%)ほか	0.56	(0.45)	0.31	円形	箱形	SK41→SD21・SK40	
P	42	B区中央	D4	2.5Y2/1黒色粘土(地山漸移層土3%)	0.29	0.24	0.15	楕円形	楕形	P42→SK20	
SK	43	B区西	D6・E6	10YR2/1黒色粘土(φ1~5cm円礫2%)ほか	(0.33)	(0.30)	0.27	全体形不明	楕形	SK39→SK43→SK28	
P	44	B区西	D5	—	0.27	0.23	0.15	隅丸方形	楕形	SD35→P44	
P	45	B区西	D5	10YR3/1黒褐色粘土(10YR4/4褐色粘土質シルト(地山)5%)	0.25	0.23	0.10	円形	楕形	SK37→P45	
P	46	B区中央	D4	2.5Y3/1黒褐色粘土(2.5Y5/4黄褐色粘土(地山)5%)	0.29	0.26	0.08	円形	楕形		
SK	47	B区中央	D4	10YR3/1黒褐色粘土質シルト(φ1~10cm円礫1%)	0.70	(0.30)	0.24	楕円形	有段U字形		
P	48	B区西	C5	10YR2/1黒色粘土(10YR3/2黒褐色粘土10%、地山5%、炭1%)	0.25	(0.24)	0.20	円形	楕形		
P	49	B区西	C5	10YR2/1黒色粘土(10YR3/2黒褐色粘土10%、地山5%、炭1%)	0.29	(0.25)	0.04	円形	皿形		
SK	50	B区西	C5	10YR2/1黒色粘土質シルト(地山3%、φ1~10cm円礫3%、炭3%)	0.53	0.53	0.09	隅丸方形	皿形	SK50→SK22	
SK	51	B区西	D5	10YR2/2黒褐色粘土(地山15%、φ1~3cm円礫5%)	0.98	(0.36)	0.19	楕円形	皿形		
SX	52	B区中央	E5	—	(0.96)	0.63	0.16	不整形	皿形		

第4節 遺物

今回の調査区で出土した遺物は、近世・近代合わせてプラスチックコンテナ18箱分である。本節では、それらを上層・下層に分けて、遺構内出土遺物を中心に報告する。前節では遺構種別に記述したが、本節の遺構内出土遺物については、ほとんどが土坑(SK)・その他(SX)から出土したものであり、遺構種別よりも遺構番号順を優先して記述する。

なお、本節における各遺物の年代観・産地等の記述にあたっては、専門家諸氏の教示を仰いだ上で、『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』(石川県金沢城調査研究所2014)、『金沢市木ノ新保遺跡』(石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002)、『図説江戸考古学研究事典』(江戸遺跡研究会2001)、『焼塩壺と近世の考古学』(小川2008)、『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会2000)、『増補 ガラス瓶の考古学』(桜井2019)、「金沢城下町遺跡における甕・播鉢の様相」『関西近世考古学研究』25(庄田2017)、『越前焼総合調査事業報告』(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2016)、「金沢城下出土の焼塩壺」『焼塩壺の旅—ものの始まり堺—』(増山2000)等を参考にした。

以下、上層の遺物から述べていくが、表2～8の遺物観察表も合わせて参照されたい。

1) 上層の遺物

概ね現地表下-2mよりも上で出土した遺物を上層の遺物とする。すなわち、近現代盛土層であるI層あるいは近代遺構内から出土したものである。ここで報告するのは当然近代のものを中心とするが、中には下層由来の混入物と見られる近世遺物も確認しており、合わせて記述する。

上層 遺構内出土遺物 (図16)

近代 P5 (図16)

1は、磁器小杯底部である。近代の染付と見られる。

近代 SB8 (図16)

2は、SB8の根固めから出土した磁器鉢底部である。碁笥底を呈し、外面に青磁釉、内面に透明釉・染付・赤上絵が施される。近代のものである。

上層 遺構外出土遺物 (図16)

3は、京・信楽のカンテラで、19世紀のものと思われる。4は、土製の乗燭である。5は、肥前の磁器紅皿である。貝殻状に型押し成形されたもので、19世紀に位置づけられる。6は、土製の独楽である。型合せによるもので、底面にも型の跡が残る。7・8は、型合せで作られた土人形の類である。7は、2人の力士が組み合う様を表現している。一方8は、舟を象ったものである。

以上、3～8については、近世遺物が混入したものであろう。

9は、銅版転写の染付で「附属醫院」の銘が入る磁器蓋である。金沢医科大学附属医院の病院食器のものと考えられる。

10～13はガラス瓶の類である。これらのうち10～12は、胴部に陽刻の目盛り線があり、

近代 P5

近代 SB8

上層 遺構外

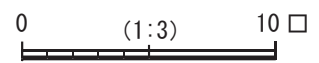
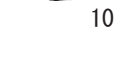
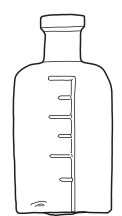
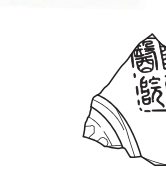
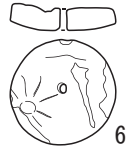
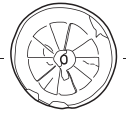
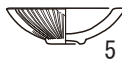
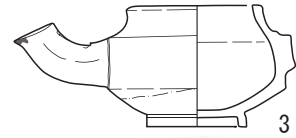
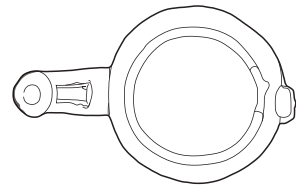
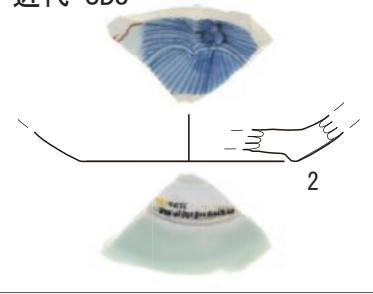
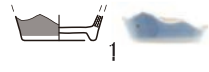


图 16 上層出土遺物

近代の病院で使われた薬瓶と見られる。特に 10 には、目盛り線の反対側に「金沢医科大学附属病院」の陽刻がある。13 は、胴部に「N. ANTOINE PARIS」の陽刻があり、近代のインク瓶と見られる。

このように、上層の遺物は、近代遺物に近世遺物が混じるような状況であるが、特筆すべきは病院食器やガラス製の薬瓶であろう。これらは金沢大学附属病院の前身病院で使用されていたものであり、金沢大学の病院史において貴重な資料である。

2) 下層の遺物

現地表下 - 2 m よりも下位で検出した遺構から出土した遺物と、遺物包含層であるⅡ層（相当層含む）から出土した遺物を合わせて下層の遺物とする。下層の遺物は、いずれも時代としては近世に属する。

遺構内出土遺物（図 17～30）

SX6・SX6a・SX6b・E5 トレンチ（図 17・18）

全体としては SX6、細別して SX6a・SX6b として取り上げた遺物群である。SX6a 出土遺物の内容が最も充実しているが、SX6 でも SX6b でも、木製品・植物製品が良好な状態で出土している。

14～22 は、SX6a 出土として取り上げた遺物群である。14～16 は、肥前の染付磁器で、11 は鉢か皿の底部、15 は碗の口縁部～体部、16 は油壺の口縁部～肩部である。17 は、肥前の陶器播鉢の口縁部である。これらの陶磁器類は、概ね 17 世紀後半に位置づけられる。18～21 は、木製品である。18 は、椀形の木製品である。ブナ属を横木取りしたものであるが、円孔が 1 か所穿たれており、椀ではない可能性がある。19 は、曲物底板である。アスナロを柀目取りしたもので、片面に焼印が施される。20 は、箸である。樹種はスギで、木取りは芯去削出である。21 は格子目状の刻みが入る部材である。小さい円孔が 1 か所穿たれている。樹種はアスナロで、木取りは追柀目である。22 はブナを横木取りした漆器椀で、外面黒漆、内面赤漆が施され、外面にはさらに赤漆で文様が描かれる。

23～27 は、SX6 出土として取り上げた遺物群である。SX6a・6b のいずれかに帰属すると考えられるが、判断できなかった。5 点全て、木製品である。23 はスギを柀目取りした曲物底板、24～27 はスギを削り出した箸である。

28～30 は、SX6b 出土の遺物である。28 はアスナロを削り出した箸である。29 はアスナロを柀目取りした部材である。30 は縄類である。実際には 5 本まとめて出土したが、明らかに同一・同種であり、うち 1 本の写真を示し、また 1 本を素材同定の対象とした。シュロを素材として、S 方向に諸撚りしたものである（縄文原体の L、松永 2014）。

31 は、漆器椀である。内外面全体に黒漆が施される。調査時は E5 トレンチのものとして取り上げたが、SX6b に帰属する可能性が高い。

SK7（図 19）

32 は、肥前の染付皿で、高台内に角「福」の銘が入る。17 世紀後半のものと思われる。

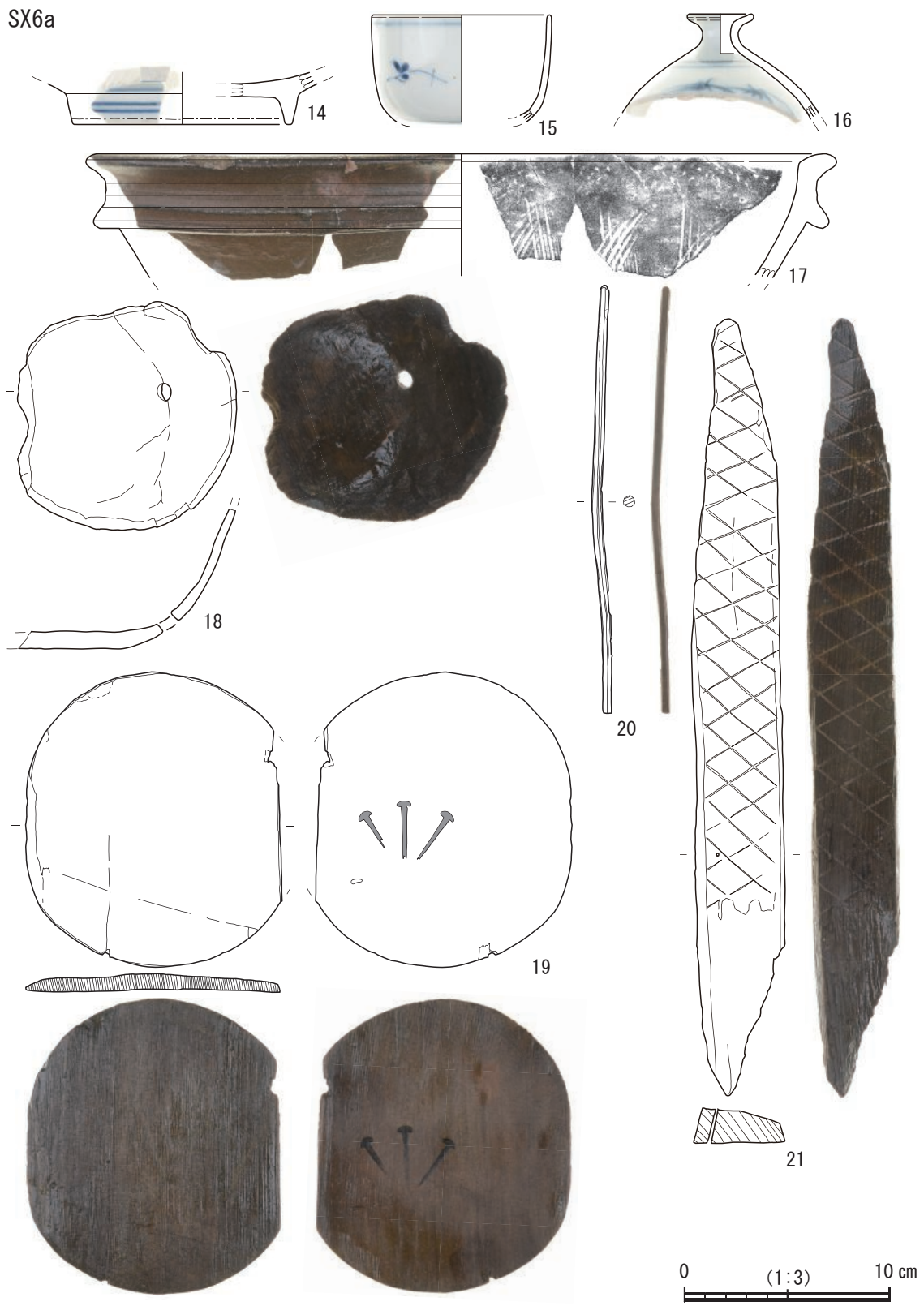
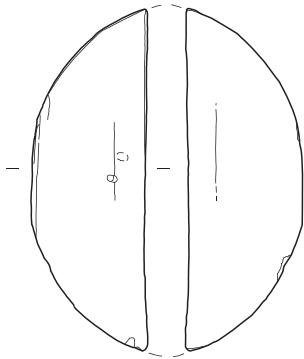
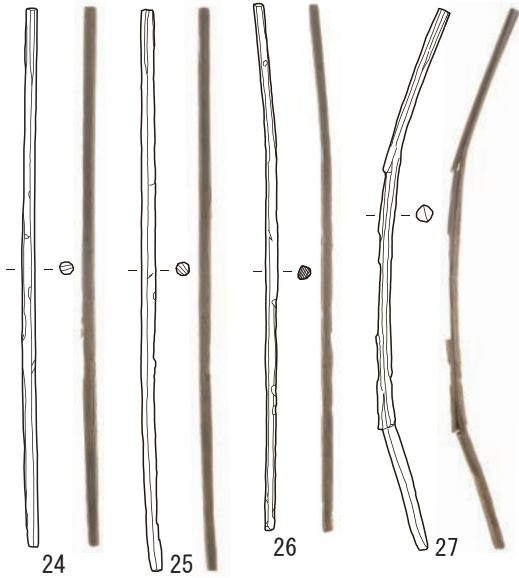


图 17 下層出土遺物 (1)

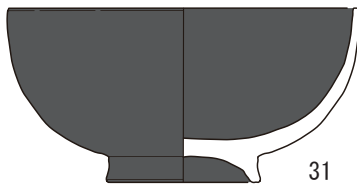
SX6



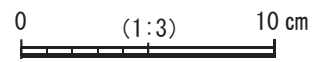
23



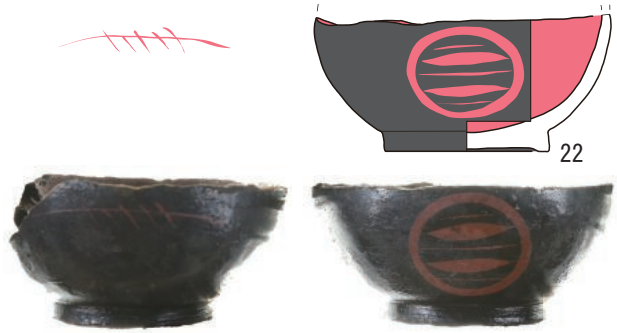
E5 トレンチ



31

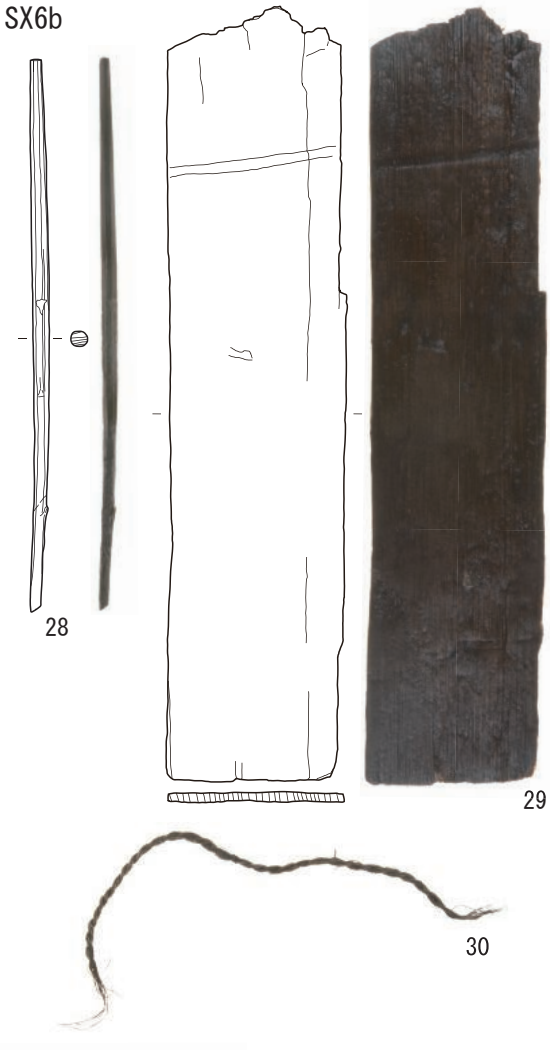


SX6a



22

SX6b



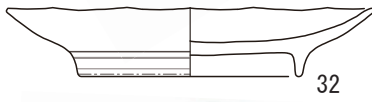
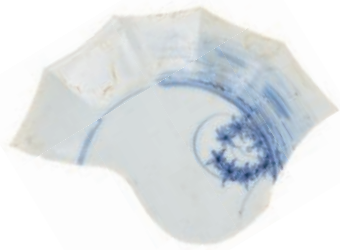
28

29

30

図 18 下層出土遺物 (2)

SK7



32



SK7 · SK12 · SK15



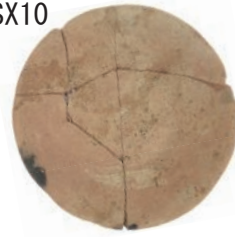
33

SK25



35

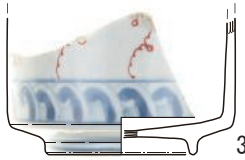
SX10



34

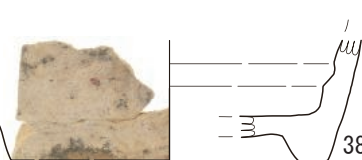


SK23



36

37

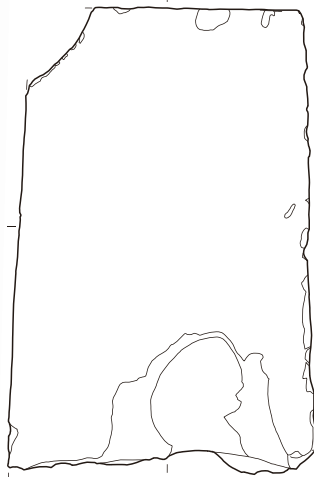


38



39

SK24



41



40

0 39 以外 (1:3) 10 cm

0 39 (1:2) 10 cm

图 19 下層出土遺物 (3)

SK7・SK12・SK15 (図 19)

SK7・SK12・SK15 のいずれかの埋土から出土したと判断される遺物である。33 は、手づくねの土師器皿である。口縁部に灯芯油痕が顕著に残る。17 世紀後半のものであろう。SK7 の肥前染付皿と年代的に整合するが、SK12 または SK15 に伴うものである可能性は否定できない。図化しなかったが、この土師器皿と一緒に肥前の染付磁器の小片も出土している。

SX8 (図 20)

42～49 は手づくねの土師器皿である。SX8 からは 100 枚分以上の土師器皿が出土したが、特に代表的なものを図示した。個体ごとの強弱はあるが、いずれも見込みに圈線が巡る。大きさとしては口径 8～9cm ほどの小型のものが大半を占めるが、49 のように 10cm を超えるものも認められる。また、口縁部に灯芯油痕が 1～数か所残るものが多く、基本的に灯明皿として短期使用されたと考えられる。50 は肥前の染付磁器鉢、51 は肥前の打ち刷毛目文陶器鉢である。52 は、京焼風肥前の碗である。高台内に「木下弥」の刻印が入る。53 は、在地産の瓶形焼塩壺である。これらの土器・陶磁器の年代は、17 世紀末～18 世紀前半の範疇におさまる。

SX10 (図 19)

34 は、手づくねの土師器皿である。17 世紀後半のもので、2 か所に灯芯油痕が残される。

SK20 (図 21・22)

54～56 は染付磁器である。54・55 は碗底部、56 は鉢か皿の底部で、54・56 は 17 世紀後半の肥前だが、55 は 19 世紀の瀬戸美濃の可能性もある。56 には漆継ぎの痕跡が確認できる。57 は肥前陶器で、刷毛目の鉢か皿の底部である。見込みに砂目跡が残り、17 世紀後半のものであろう。58 は、肥前の緑釉壺の耳部で、17 世紀後半に位置づけられる。この壺片は、64 の下駄とともに SK20 の底部付近から出土した。59・60 は、手づくねの土師器皿である。両者とも 17 世紀後半のもので、口縁部に灯芯油痕が残る。61・62 は、赤玉である（フォッサマグナミュージアムの宮島宏氏・小河原孝彦氏の岩石鑑定による）。言い換えれば赤碧玉であり、調査区周辺に自然に存在するようなものではない。実用品だとすれば火打石の可能性を想定するが、良質の赤玉でありそもそも実用品ではないのかも知れない。63～65 は、木製品である。63 はスギを削り出した箸である。64～66 は下駄類であるが、64 は差歯下駄の完形品、65 は差歯下駄の歯、66 は一木下駄である。64・65 には黒漆の痕跡が認められる。これら下駄類について、木取りは柾目または追柾目で、64 の台部分と 65・66 の樹種はアスナロ、64 の歯の樹種はモクレン属である。67 は、アスナロのみかん割りにした部材である。なお、人工物ではないが、この遺構では写真 5 のモモ核も出土している。



写真 5 SK20 出土モモ核

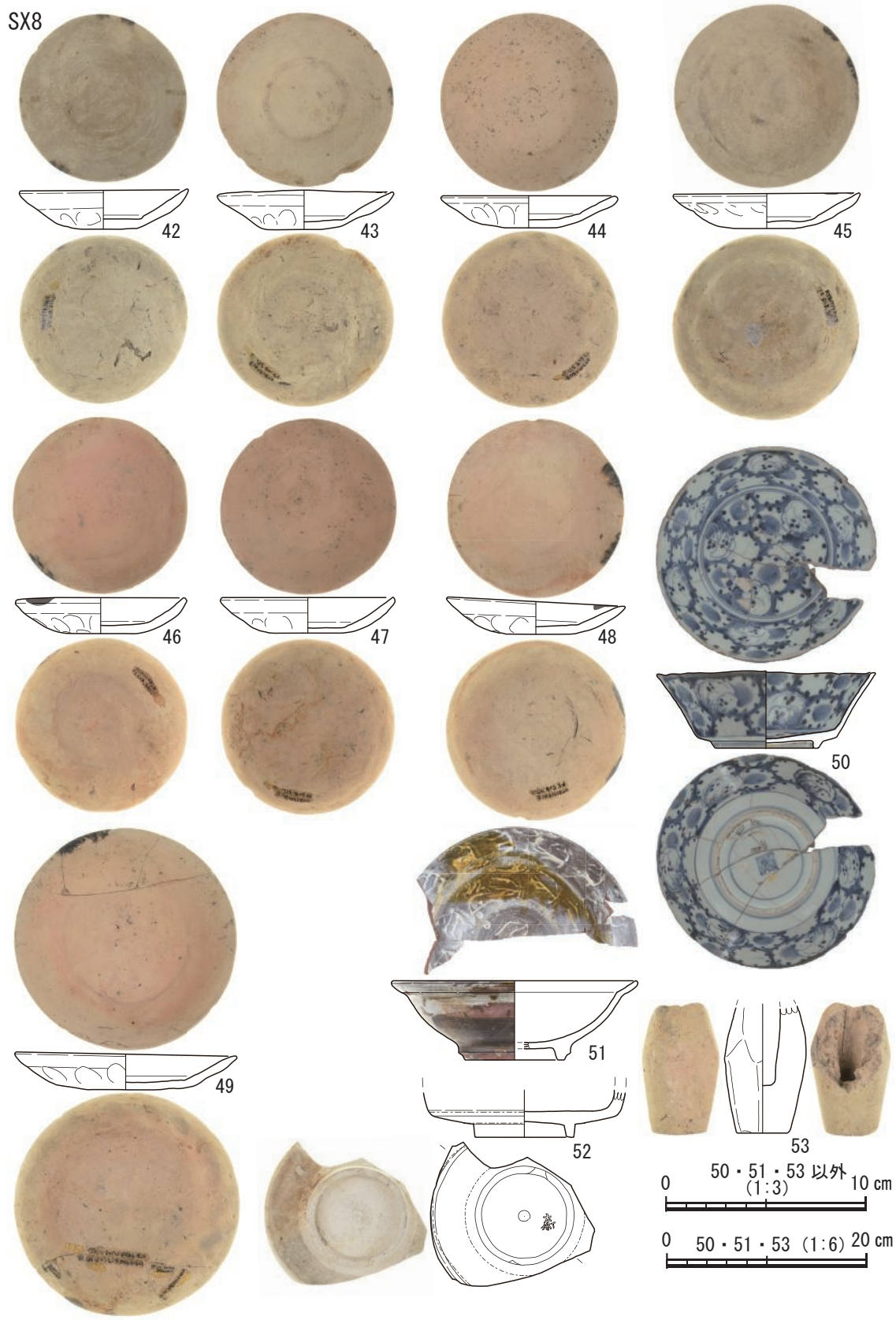


图 20 下層出土遺物 (4)

SK20 (1)

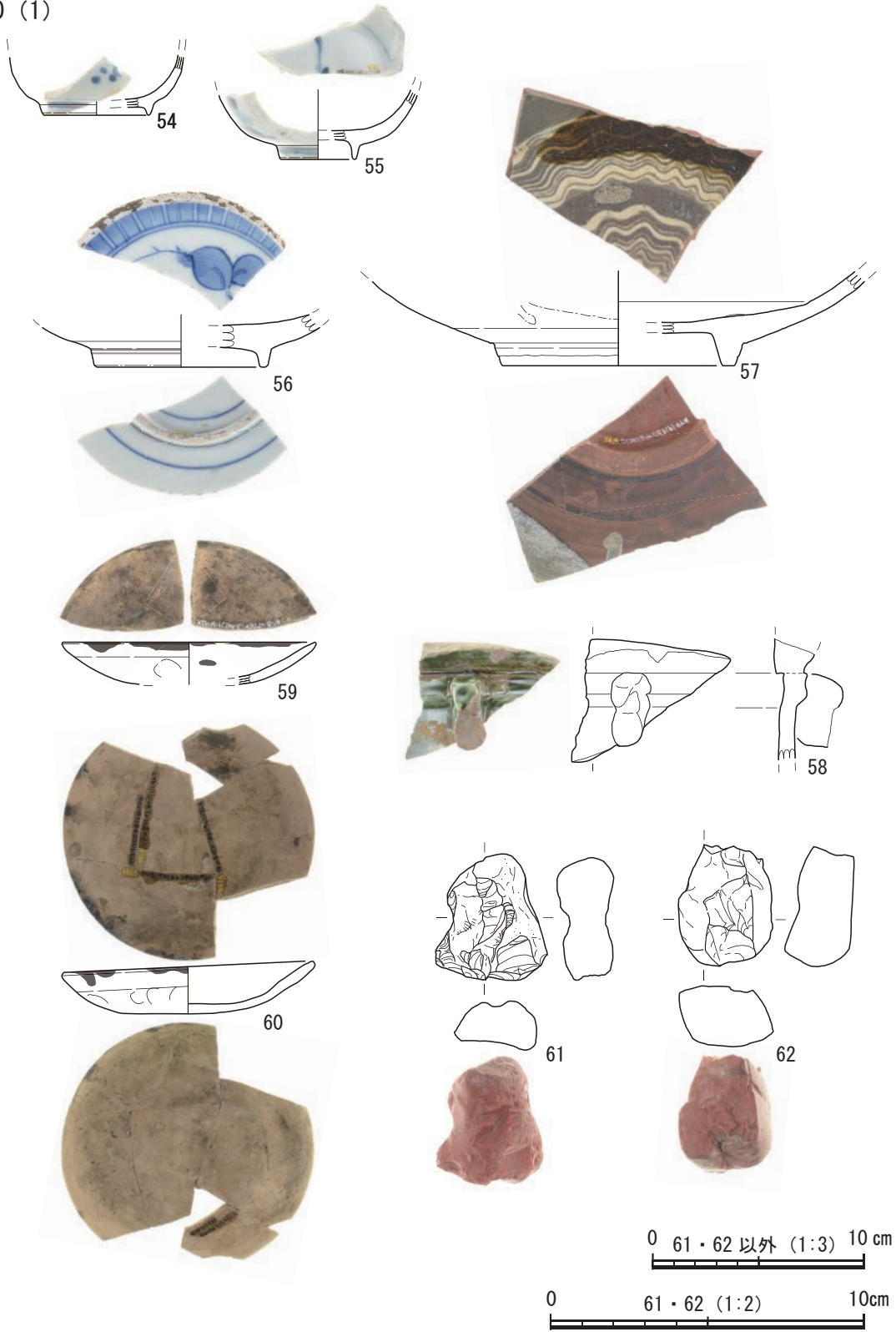


图 21 下層出土遺物 (5)

SK20 (2)

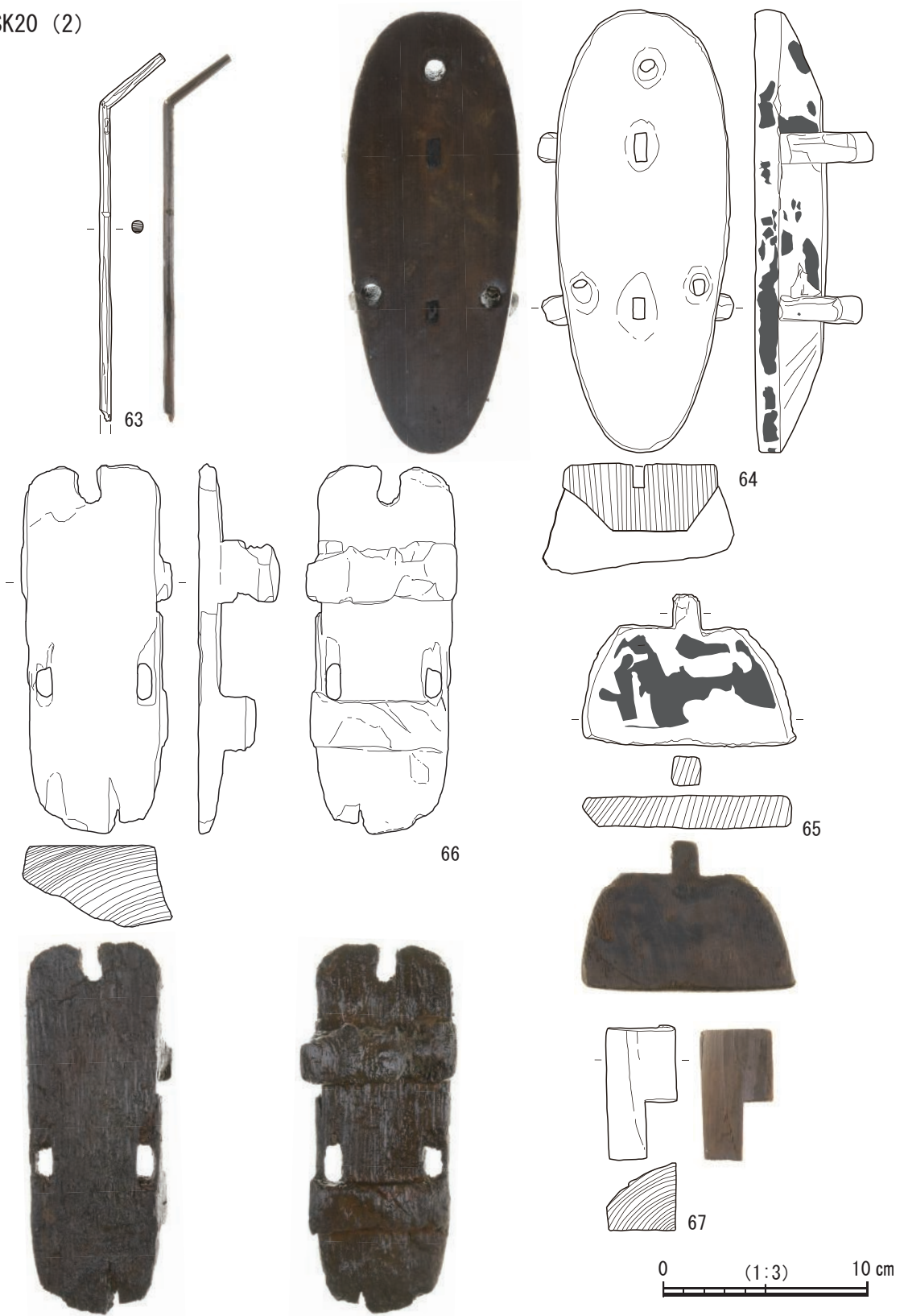


图 22 下層出土遺物 (6)

SK22 (図 23・24)

68～73は18世紀を中心とする染付磁器である。68は肥前の碗口縁部で、焼継ぎされている。69は碗口縁部で、70は碗底部である。これら2点は、19世紀の瀬戸美濃の可能性はある。72・73は、18世紀の肥前の皿で、72には漆継ぎの痕跡が確認できる。74は肥前の青磁香炉である。75は京・信楽の陶器蓋である。76は陶器の餌猪口で、鉄釉がかかる。76は在地産の火鉢の口縁部であり、外面に墨塗の跡がある。78は、型打ちの土師器皿で、18世紀末～19世紀前半に位置づけられる。79は越前の播鉢口縁部である。19世紀代のものであろう。80は、19世紀の須佐唐津鉢の口縁部～体部である。81・82はともに肥前陶器の播鉢であるが、81はタタキ成形によるもので18世紀後半、82はロクロ成形によるものでより後出的である。以上の土器・陶磁器は、概ね18世紀～19世紀の年代幅で捉えることができよう。83は、砂岩製の砥石である。側面に筋状の刃物痕が残る。

SK23 (図 19)

36は、肥前の染付碗の体部～底部である。37は、手づくねの土師器皿である。38は、土器底部で、植木鉢であろうか。この遺構の土器・陶磁器は残りが悪いが、18世紀後半～19世紀前半に位置づけられようか。39は、石英である（フォッサマグナミュージアムの宮島宏氏・小河原孝彦氏の岩石鑑定による）。このような石は、調査区周辺には存在しないことから、少なくとも人の手によって持ち運ばれたものと考えられる。実用品であれば、火打石であろうか。

SK24 (図 19)

40は、平瓦である。燻瓦の類で、凹面には細かい布目痕跡が残る。41は、染付磁器の端反碗である。19世紀の瀬戸美濃と見られる。

SK25 (図 19)

35は、肥前の染付磁器皿の口縁部～体部で、焼継ぎの痕跡が確認できる。18世紀代のものであろう。

SK26 (図 25・26)

84・85は、17世紀後半～18世紀初頭頃の肥前磁器である。84は染付碗で、漆継ぎの痕跡が確認できる。85は青磁で、香炉か火入れの体部～底部である。86～90は手づくねの土師器皿である。86～89は、見込みに圏線がなく、17世紀後半～末に位置づけられる。一方、90は、見込みに明瞭な圏線が巡ることから、18世紀に下る。91・92は、17世紀後半前後と見られる肥前の刷毛目文陶器の類である。91は鉢か皿の口縁部、92は鉢の口縁部～体部である。93は、動物形の磁器製品である。膝を抱えて座るサルを象ったものと見られ、全体に鉄釉が施される。中空であることから、水滴の一部の可能性を考えるが、側面の円孔が意図的なものなのか、欠損によるものなのかが判然とせず、断定はできない。94は、棒状の金属製品である。匙のようにも見えるが、頭部が匙にしてはあまりにも薄く脆弱な上、元素マッ

SK22 (1)

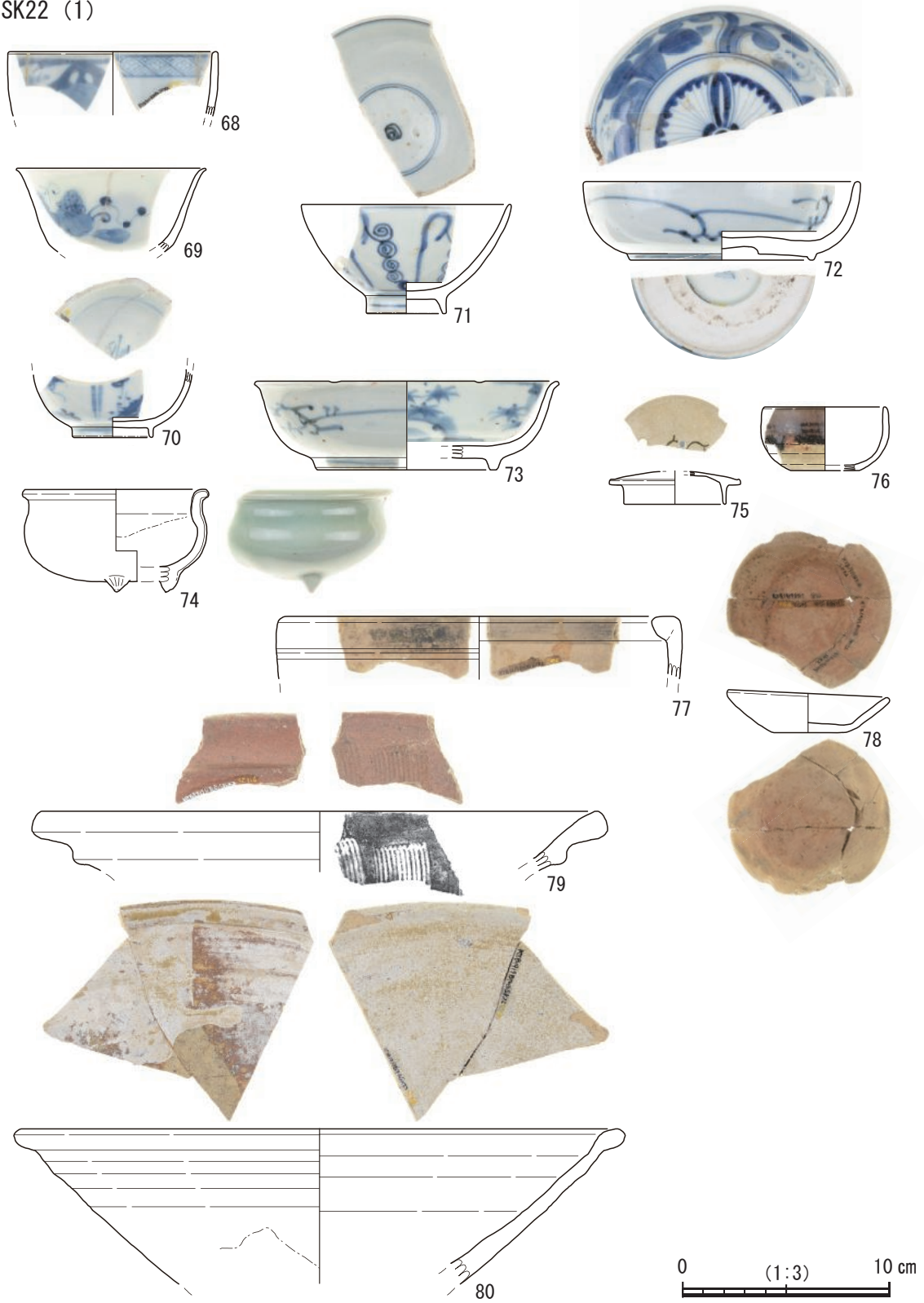


图 23 下層出土遺物 (7)

SK22 (2)

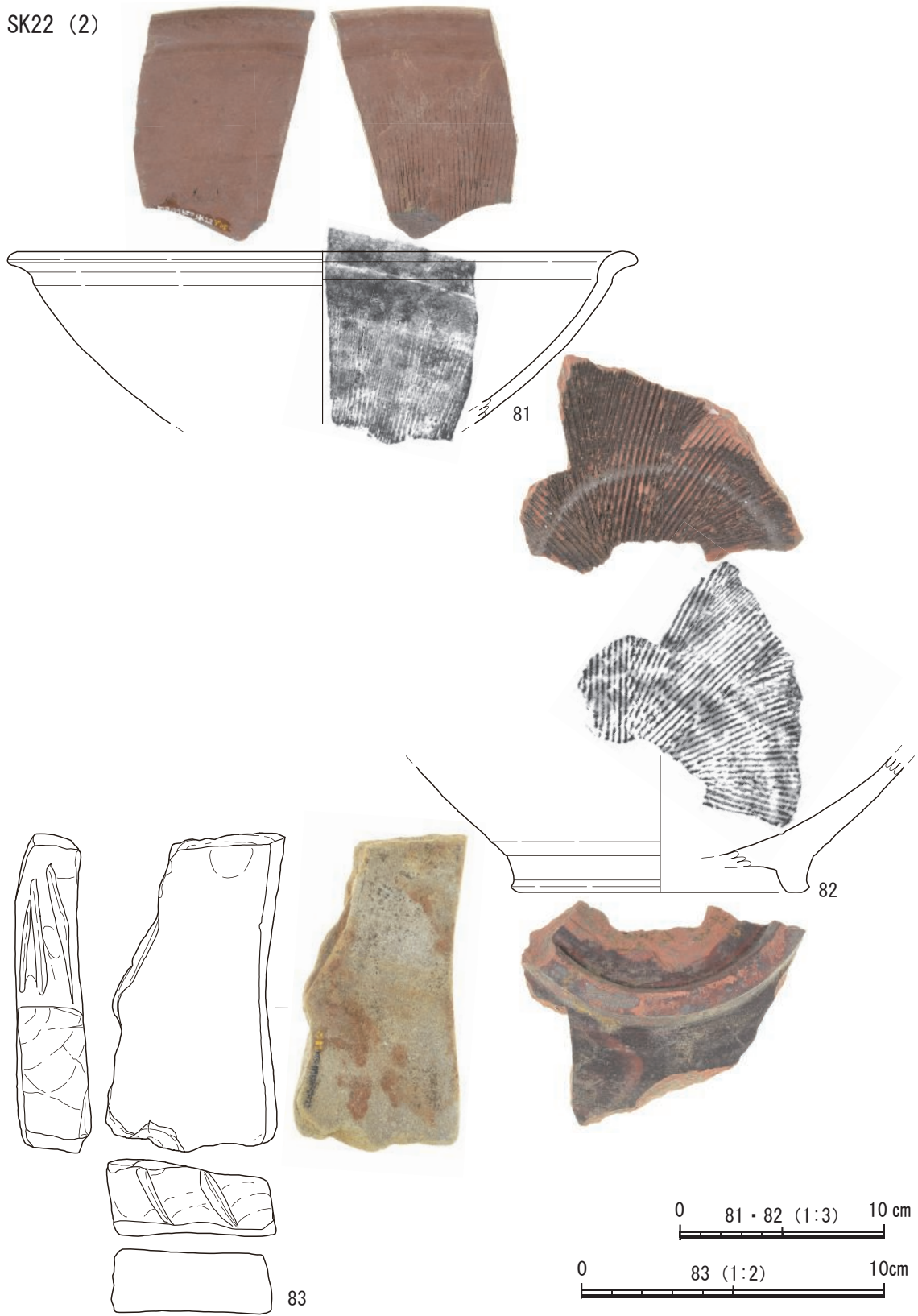


图 24 下層出土遺物 (8)

SK26 (1)

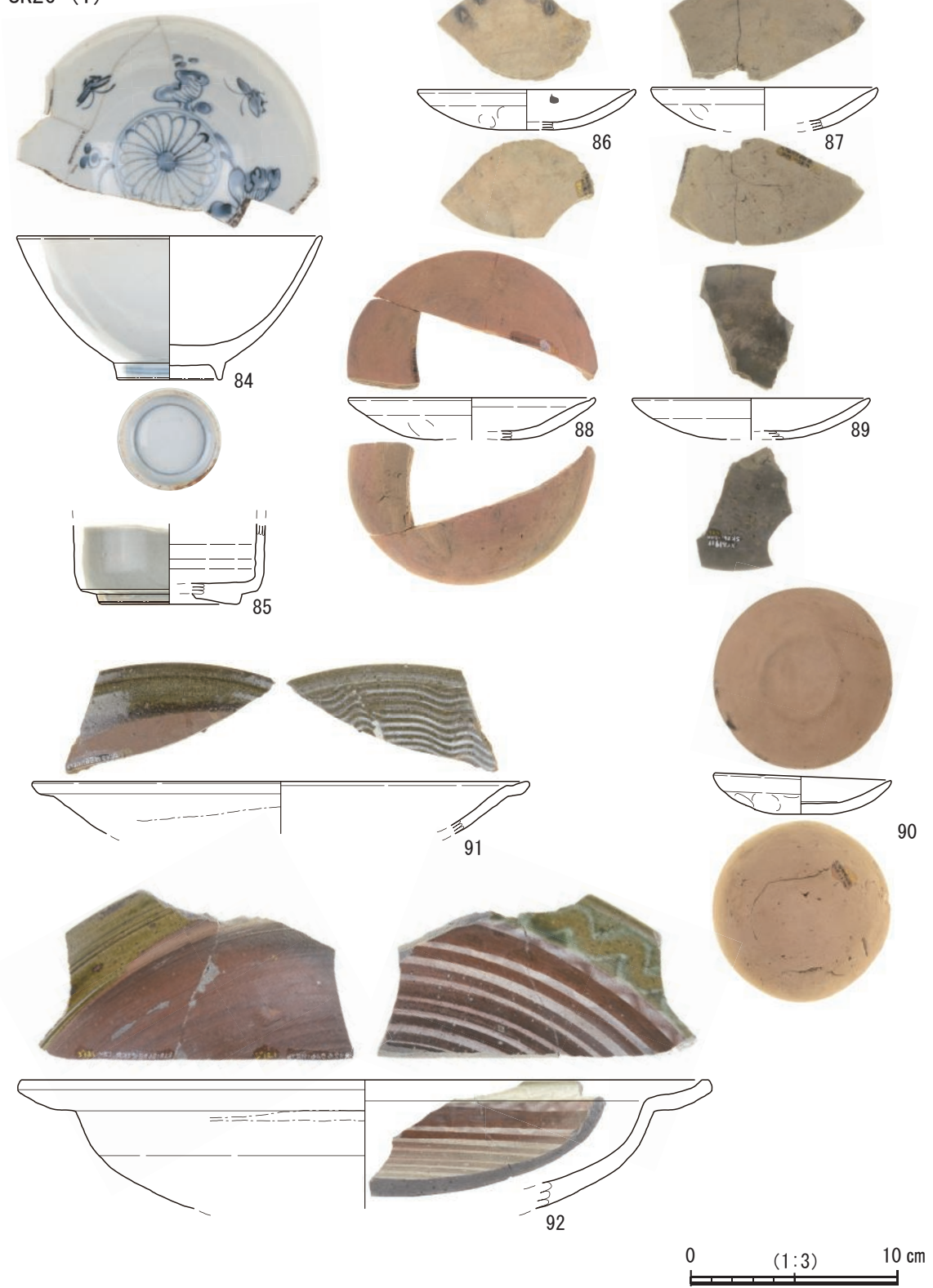


图 25 下層出土遺物 (9)

SK26 (2)

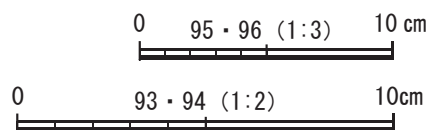
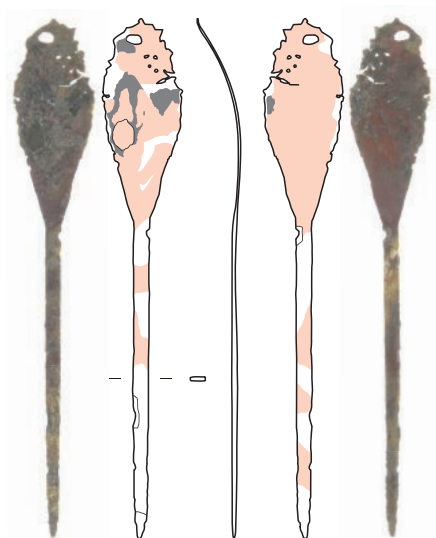
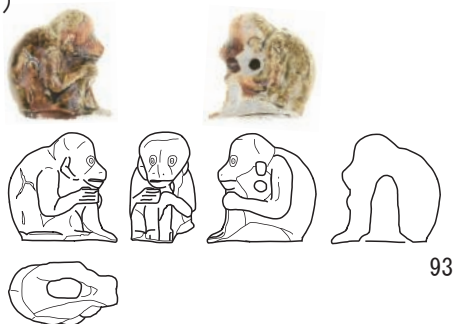


图 26 下層出土遺物 (10)

ピング分析で飾金具が接着されていた可能性も指摘されていることから、簪と判断した。銅の発色で赤くなっている部分を除き、金色を呈する。真鍮製である。95は、曲物底板である。アスナロを柾目取りしたもので、わずかに側板と木釘が残る。96は、部材である。円孔が1か所穿たれる。樹種はアスナロ、木取りは板目取りである。

SK28 (図 27 ~ 29)

97 ~ 99は、概ね18世紀前半頃に位置づけられる肥前の染付磁器である。97・98は碗、99は皿である。99はくらわんか手で、見込みには五弁花のコンニャク印判が施される。また高台内には渦「福」の銘が入る。100は、肥前の青磁染付碗の口縁部~体部である。101は、肥前の青磁碗の口縁部~体部である。102・103は、同一個体と見られる京・信楽の陶器碗である。104は、肥前の陶器播鉢口縁部で、18世紀代の位置づけが考えられる。105は、19世紀と見られる大型の土師器皿である。内面に煤が認められる。106は、京・信楽の両手鍋である。19世紀のものであろう。107は、産地不明の陶器甕である。108は、土製の独楽である。109は寛永通宝で、「寶」がハ貝になっていることから新寛永に分類できる。110 ~ 119は、この遺構から特徴的に出土した木製品である。110は、漆器片である。実際の現場では13点の漆器の小片がまとまって出土したが、一番残りが良いものを図示した。トチノキを横木取りしたもので、内外面に黒漆を施し、外面にはさらに赤漆で文様が描かれる。111は、結桶の側板である。樹種はアスナロ、木取りは柾目で、外面には箍痕、内面には底板痕・黒漆痕が確認できる。112 ~ 114は比較的小型の部材である。112は、7か所に円孔を有する板で、樹種はスギ、木取りは追柾目である。113は、有段の部材で、3か所に円孔が穿たれる。樹種はアスナロ、木取りは板目である。114は、切り欠きのある部材である。樹種はマツ属複雑管束亜属、木取りは追柾目である。115は、曲物底板で、スギを柾目取りしている。116は、差歯下駄の歯である。樹種はモクレン属、木取りは柾目である。117 ~ 119は、大型の部材である。117は、2か所に円孔を有する板で、樹種はマツ属複雑管束亜属、木取りは追柾目である。118は、4か所に円孔を有する板で、樹種はスギ、木取りは板目である。長さ75.5cmをはかり、今回の調査区最大の遺物である。119は、1か所に円孔を有する板である。樹種はアスナロ、木取りは追柾目である。

SK30 (図 30)

120は、京・信楽の碗底部である。18世紀末~19世紀初頭頃のものと思われる。121は、差歯下駄の歯である。黒漆痕が認められ、樹種はモクレン属、木取りは追柾目である。

下層 遺構外出土遺物 (図 30)

122 ~ 126は肥前の染付磁器である。これらのうち、122は17世紀後半~末頃に位置づけられるが、それ以外は概ね18世紀代のものである。122は皿の底部である。見込みが蛇ノ目釉剥ぎとなる。123は皿で、見込みに五弁花のコンニャク印判が施され、高台内には渦「福」の銘が入る。また、漆継ぎの痕跡が確認できる。124は、蛇ノ目凹形高台の皿である。高台内に角渦「福」の銘が入る。125は、小杯の体部~底部である。体部外面にコンニャク印判が施される。126は、仏飯器下半部である。E6トレンチ内から出土したもので、SK28等の遺

SK28 (1)



图 27 下層出土遺物 (11)

SK28 (2)

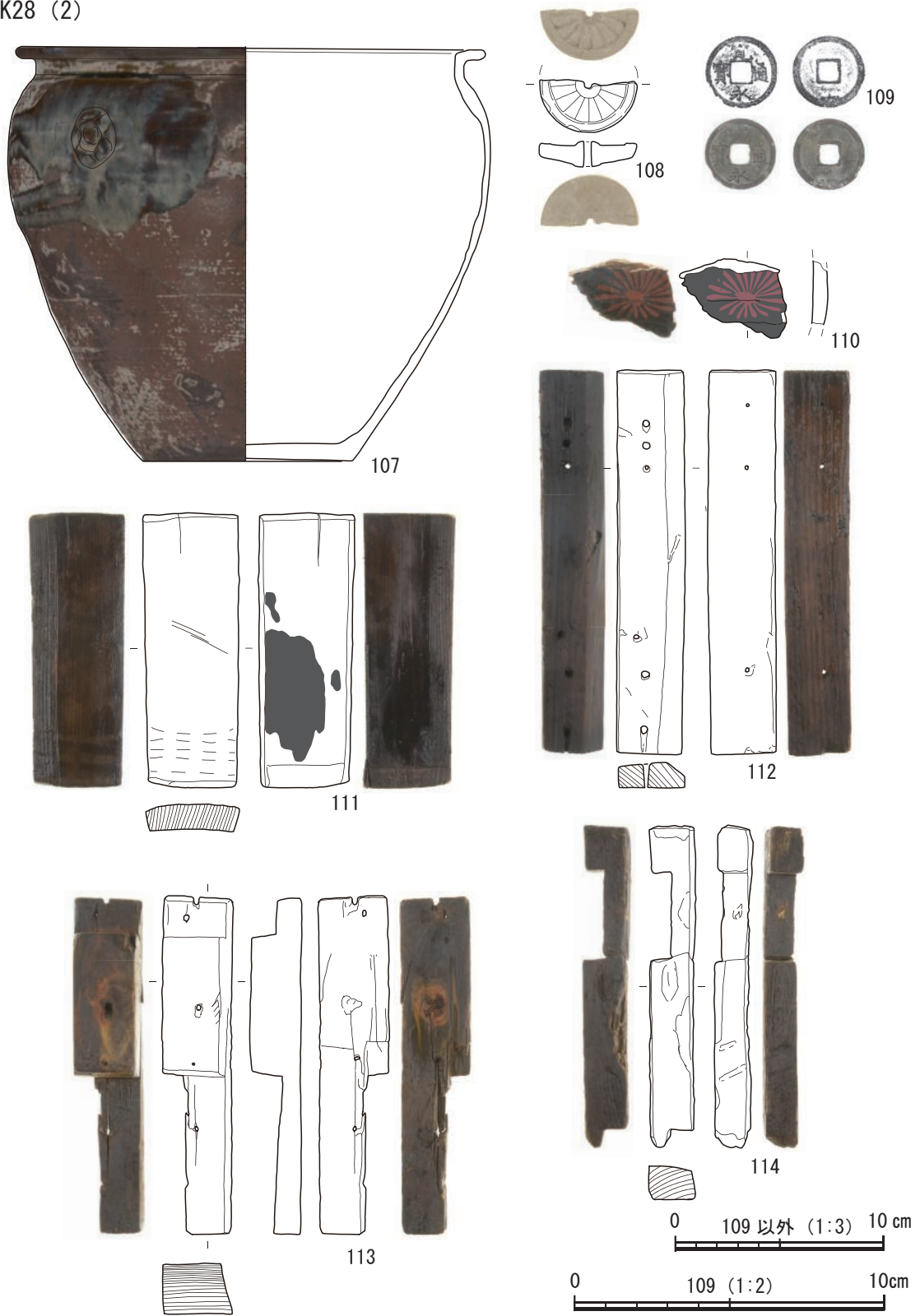


图 28 下層出土遺物 (12)

SK28 (3)

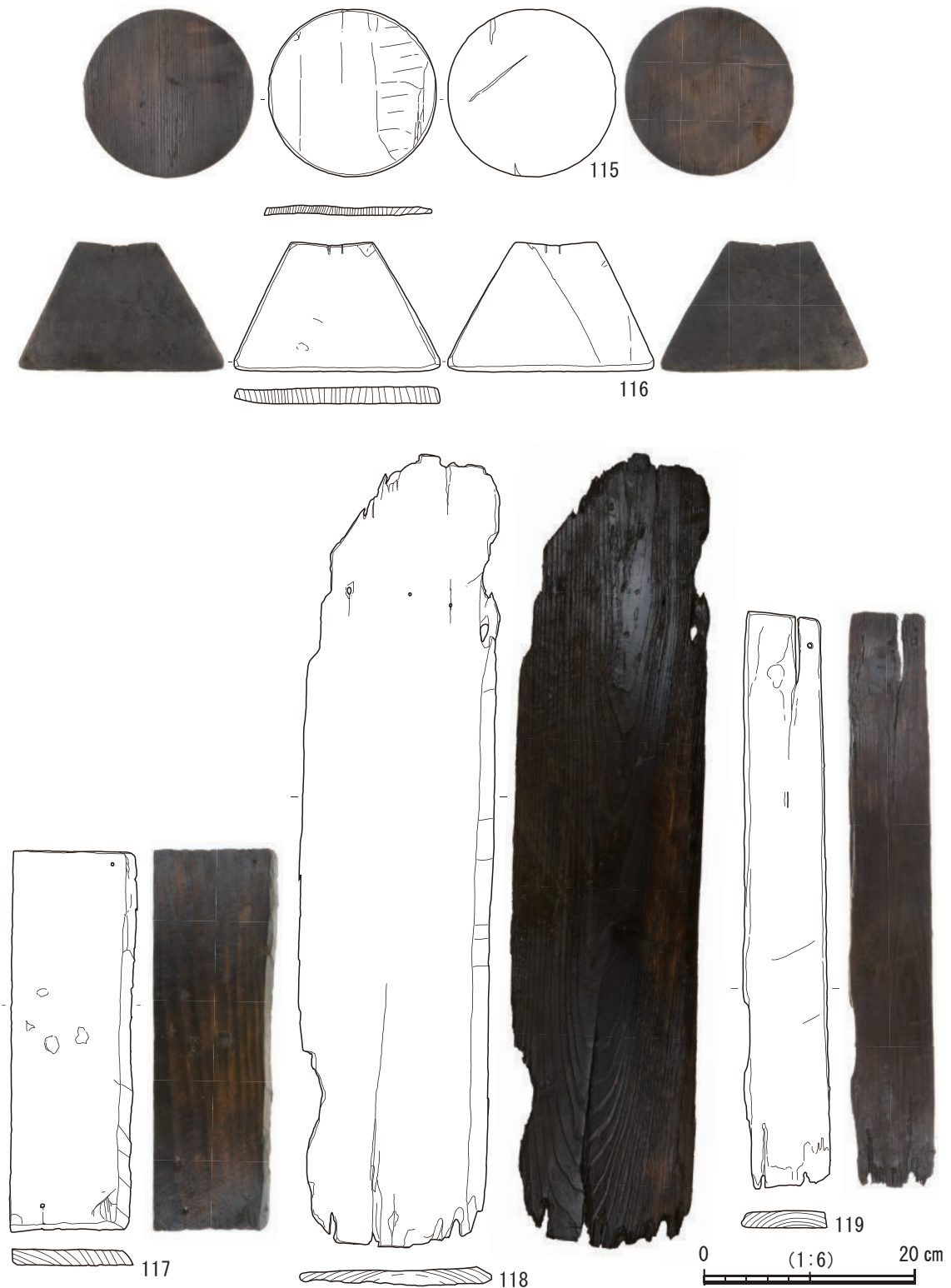
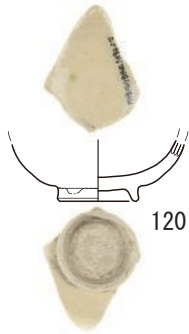


图 29 下層出土遺物 (13)

SK30

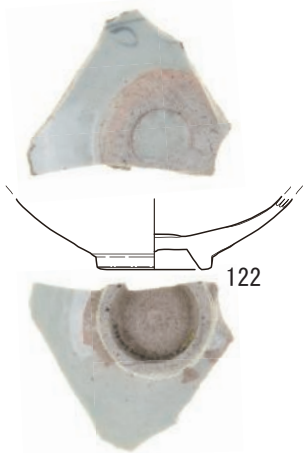


120

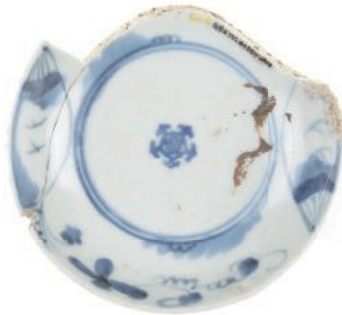


121

下層 遺構外



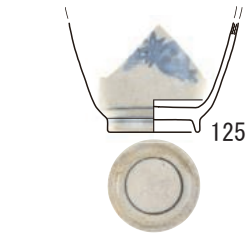
122



123



124



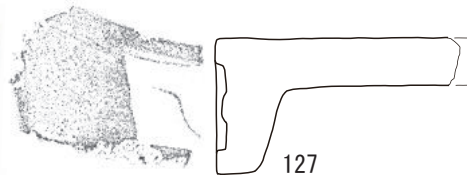
125



126



127



128

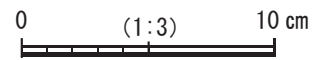


图 30 下層出土遺物 (14)

構に伴うものであった可能性がある。

127・128 は、瓦である。いずれも釉薬瓦である。今回の調査区では、瓦がほとんど出土しなかったため、これらは貴重な資料である。127 は、赤瓦の軒平瓦である。唐草文の端部のみが確認できる。128 は軒丸瓦で、左回りの巴文と珠文が確認できる。巴文は、前の尾部が2つ目の巴頭部まで届く。

以上のように、下層の遺物は、17世紀後半～19世紀の範疇に位置づけられる近世遺物である。基本的に土師器皿や肥前染付磁器をはじめとする土器・陶磁器類が多いが、SX6・SX6a・SX6b・SK20・SK26・SK28・SK30からは木製品が良好な状態で出土しており、宝町遺跡においてはこれまでにない重要な成果である。器種にもよるが、スギとアスナロを多く利用する傾向が確認できたことは非常に興味深い。また、SX8から大量に出土した土師器皿とそれに伴う陶磁器・焼塩壺は、当時の献珠寺で使用されていたものと見られ、近世における同寺の状況を知る上で貴重な資料と言えよう。

表2 遺物観察表（土器・陶磁器）

遺物番号	種別	器種	調査区	出土地点	法量 (cm)			技法	軸葉等	色調	備考
					口径	器高	底径				
1	磁器	小杯	A区東	D3 近代P5	—	(1.1)	2.8	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
2	磁器	鉢	A区東	D3 近代SB8	—	(1.8)	8.6	ロクロ	青磁釉・透明釉・染付・赤上絵	N9/白	
3	陶器	カンテラ	B区西	C5 壁立て I層	5.0	4.8	4.1	ロクロ	灰釉	2.5YR/2灰白	
4	土器	乗燗	B区西	D6 壁立て I層	4.3	2.2	2.4	手づくね	—	5YR7/6橙	
5	磁器	紅皿	B区西	D6 近代盛土 I層	4.6	1.4	1.4	型押し	透明釉	5Y8/1灰白	
9	磁器	蓋	A区中央	機械掘削 I層	—	(2.6)	—	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	銅版転写、「附属醫院」銘
14	磁器	鉢小皿	B区中央	E5 SX6a	—	(2.5)	10.6	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	取り上げNo.4
15	磁器	碗	B区中央	E5 SX6a	8.6	(5.2)	—	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	取り上げNo.7
16	磁器	油壺	B区中央	E5 SX6a	3.0	(5.1)	—	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	取り上げNo.5
17	陶器	播鉢	B区中央	E5 SX6a	35.6	(6.0)	—	ロクロ	鉄釉	5YR6/4にぶい橙	
32	磁器	皿	B区中央	E5トレンチ 北西壁 SK7	14.4	2.7	8.8	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	高台内角「福」銘
33	土器	土師器皿	B区中央	E5 SK7・SK12・SK15	10.2	(1.7)	—	手づくね	—	10YR7/3にぶい黄橙	灯芯油痕
34	土器	土師器皿	B区東	SX10	8.7	1.8	3.5	手づくね	—	7.5YR7/4にぶい橙	灯芯油痕
35	磁器	皿	B区西	SK25	—	(2.6)	—	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	焼継ぎ
36	磁器	碗	B区西	SK23 2層 (南西壁14層)	—	5.4	5.8	ロクロ	透明釉・染付・赤上絵	N9/白	
37	土器	土師器皿	B区西	SK23	10.8	(1.5)	—	手づくね	—	7.5YR7/3にぶい橙	
38	土器	鉢	B区西	SK23 1層 (南西壁13層)	—	(4.8)	12.4	ロクロ	—	10YR7/2にぶい黄橙	
41	磁器	碗	B区西	SK24 5層 (南西壁24層)	10.3	5.6	4.0	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
42	土器	土師器皿	B区東	F5 SX8 3層	8.4	2.0	3.2	手づくね	—	10YR8/3浅黄橙	取り上げNo.③、灯芯油痕
43	土器	土師器皿	B区東	F5 SX8 3層	8.7	2.0	2.8	手づくね	—	10YR8/3浅黄橙	取り上げNo.③、灯芯油痕
44	土器	土師器皿	B区東	F5 SX8 3層	8.7	1.6	2.6	手づくね	—	7.5YR8/4浅黄橙	取り上げNo.③
45	土器	土師器皿	B区東	F5 SX8 3層	9.3	1.8	3.1	手づくね	—	10YR8/3浅黄橙	取り上げNo.③、灯芯油痕
46	土器	土師器皿	B区東	F5 SX8 3層	8.6	1.8	3.5	手づくね	—	7.5YR7/4にぶい橙	取り上げNo.③、灯芯油痕
47	土器	土師器皿	B区東	F5 SX8 3層	8.6	1.8	3.6	手づくね	—	7.5YR7/4にぶい橙	取り上げNo.③
48	土器	土師器皿	B区東	F5 SX8 3層	8.9	1.9	3.5	手づくね	—	7.5YR8/4浅黄橙	取り上げNo.③、灯芯油痕
49	土器	土師器皿	B区東	F5 SX8 3層	11.0	1.9	4.0	手づくね	—	7.5YR8/4浅黄橙	取り上げNo.③、灯芯油痕
50	磁器	鉢	B区東	F5 SX8 3層	22.1	7.8	10.5	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	取り上げNo.③
51	陶器	鉢	B区東	F5 SX8 3層	24.2	8.0	10.0	ロクロ	灰釉・鉄釉・白泥	10R4/4赤褐	取り上げNo.③
52	陶器	碗	B区東	F5 SX8 3層	—	(2.4)	5.0	ロクロ	灰釉・白化粘土	10YR8/2灰白	取り上げNo.⑥、「木下赤」刻印
53	土器	焼塩壺	B区東	F5 SX8 3層	—	(12.7)	5.0	手づくね	—	10YR8/4浅黄橙	取り上げNo.①
54	磁器	碗	B区中央	SK20 上位～中位	—	(2.8)	5.0	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
55	磁器	碗	B区中央	SK20 上位～中位	—	(3.3)	3.5	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
56	磁器	鉢小皿	B区中央	SK20	—	(2.5)	8.0	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	漆継ぎ
57	陶器	鉢小皿	B区中央	SK20	—	(4.5)	11.0	ロクロ	灰釉・透明釉・鉄釉・白泥	10R5/6赤	砂目跡
58	陶器	壺	B区中央	SK20 底付近	—	(5.8)	—	ロクロ	緑釉	10YR6/1褐灰	
59	土器	土師器皿	B区中央	SK20 上位～中位	12.0	(2.0)	—	手づくね	—	10YR7/3にぶい黄橙	灯芯油痕
60	土器	土師器皿	B区中央	SK20 底付近	11.8	2.5	4.0	手づくね	—	10YR7/3にぶい黄橙	灯芯油痕
68	磁器	碗	B区西	SK22	10.2	(3.1)	—	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	焼継ぎ
69	磁器	碗	B区西	SK22	9.2	(4.0)	—	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
70	磁器	碗	B区西	SK22	—	(3.3)	3.8	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
71	磁器	碗	B区西	SK22	10.0	5.3	3.8	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
72	磁器	皿	B区西	SK22	13.4	3.8	9.0	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	漆継ぎ、蛇ノ目凹形高台
73	磁器	皿	B区西	SK22	14.6	4.3	8.8	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
74	磁器	香炉	B区西	SK22	8.8	5.0	—	ロクロ	青磁釉	N9/白	
75	陶器	蓋	B区西	SK22	6.8	(1.6)	—	ロクロ	灰釉・鉄釉	10YR8/2灰白	
76	陶器	煎猪口	B区西	SK22	5.9	3.1	3.4	ロクロ	鉄釉	10YR8/3浅黄橙	
77	土器	火鉢	B区西	SK22	19.0	(3.1)	—	ロクロ	墨塗	10YR7/3にぶい黄橙	
78	土器	土師器皿	B区西	SK22	7.9	2.1	3.5	型打ち	—	7.5YR7/4にぶい橙	
79	陶器	播鉢	B区西	SK22	27.0	(2.8)	—	ロクロ	—	5YR6/4にぶい橙	
80	陶器	鉢	B区西	SK22	29.2	(7.5)	—	ロクロ	灰釉	10YR7/3にぶい黄橙	
81	陶器	播鉢	B区西	SK22	30.0	(8.5)	—	タタキ	鉄釉	7.5YR5/2灰褐	
82	陶器	播鉢	B区西	SK22	—	(6.7)	14.0	ロクロ	鉄釉	2.5YR6/6橙	
84	磁器	碗	B区西	SK26	14.8	7.0	4.8	ロクロ	透明釉・染付	N8/灰白	漆継ぎ
85	磁器	香炉か火入	B区西	SK26	—	(3.9)	6.6	ロクロ	青磁釉	N8/灰白	
86	土器	土師器皿	B区西	SK26	10.4	2.0	2.6	手づくね	—	10YR7/2にぶい黄橙	灯芯油痕
87	土器	土師器皿	B区西	SK26 遺構面-1.0m	10.8	(2.1)	—	手づくね	—	10YR7/2にぶい黄橙	
88	土器	土師器皿	B区西	SK26	11.8	2.0	4.6	手づくね	—	2.5YR7/6橙	
89	土器	土師器皿	B区西	SK26 遺構面-1.0m	11.4	2.0	2.5	手づくね	—	10YR7/3にぶい黄橙	
90	土器	土師器皿	B区西	SK26 遺構面-1.0m	8.4	2.0	2.8	手づくね	—	7.5YR7/4にぶい黄橙	灯芯油痕
91	陶器	鉢小皿	B区西	SK26	24.0	(2.5)	—	ロクロ	鉄釉・白泥	10YR5/1褐灰	
92	陶器	鉢	B区西	SK26 遺構面-1.0m	33.2	(6.2)	—	ロクロ	鉄釉・灰釉・白泥	2.5Y5/1黄灰	
97	磁器	碗	B区西	SK28	8.6	5.6	3.4	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
98	磁器	碗	B区西	SK28	9.8	4.7	3.6	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
99	磁器	皿	B区西	SK28	13.1	3.6	7.0	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	
100	磁器	碗	B区西	SK28 7層 (南西壁36層)	8.0	(5.0)	—	ロクロ	青磁釉・透明釉・染付	N8/灰白	取り上げNo.②
101	磁器	碗	B区西	SK28 7層 (南西壁36層)	10.3	3.9	—	ロクロ	青磁釉・透明釉	N8/灰白	
102	陶器	碗	B区西	SK28 7層 (南西壁36層)	10.9	(2.4)	—	ロクロ	灰釉	2.5Y8/2灰白	103と同一個体
103	陶器	碗	B区西	SK28 7層 (南西壁36層)	—	(2.9)	3.5	ロクロ	灰釉	2.5Y8/2灰白	102と同一個体
104	陶器	播鉢	B区西	SK28	33.8	(3.5)	—	ロクロ	鉄釉	2.5YR5/4にぶい赤褐	
105	土器	土師器皿	B区西	SK28	17.4	(4.0)	6.0	ロクロ	—	2.5YR6/6橙	内面煤
106	陶器	鉢	B区西	SK28	16.7	8.9	7.2	ロクロ	鉄釉	7.5YR6/3にぶい褐	
107	陶器	甕	B区西	SK28 7層 (南西壁36層)	22.0	19.4	10.0	ロクロ	鉄釉	N7/灰白	取り上げNo.③・④
120	陶器	碗	B区西	SK30 上位	—	(2.4)	3.0	ロクロ	灰釉	10YR8/2灰白	
122	磁器	皿	B区西	D6 II層 (壁立て)	—	(2.9)	4.5	ロクロ	透明釉・染付	N8/灰白	蛇ノ目軸刺ぎ
123	磁器	皿	B区中央	D5 II層	13.2	3.7	7.7	ロクロ	透明釉・染付	N8/灰白	漆継ぎ、コンニャク印判、高台内満「福」銘
124	磁器	皿	B区西	C5 II層	14.6	4.1	9.0	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	蛇ノ目凹形高台、高台内角満「福」銘
125	磁器	杯	B区西	D6 II層	—	(4.3)	3.6	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	コンニャク印判
126	磁器	仏飯器	B区西	E6トレンチ	—	(4.3)	4.2	ロクロ	透明釉・染付	N9/白	

表3 遺物観察表（土製品・磁器製品）

遺物番号	種別	器種	調査区	出土地点	法量 (cm)			技法	軸葉等	色調	備考
					長さ	幅	厚さ				
6	土製品	独楽	B区東	D3 近代盛土 1層	4.2	4.2	1.0	型合せ	—	10YR5/1焼灰	
7	土製品	土人形	B区東	F5 近代盛土 1層	7.1	5.5	2.1	型合せ	—	7.5YR8/4浅黄褐色	組み合わせ力士
8	土製品	土人形	B区西	C5 機械掘削 1層	(4.2)	2.6	2.0	型合せ	—	7.5YR7/4にぶい褐色	舟
93	磁器製品	動物形	B区西	SK26 遺構面-1.0m	2.9	2.9	1.7	手づくね	鉄軸	N9/	水滴の一部か
108	土製品	独楽	B区西	SK28	4.7	(2.5)	1.2	型合せ	—	10YR6/2灰黄褐色	

表4 遺物観察表（瓦）

遺物番号	種別	器種	調査区	出土地点	法量 (cm)			瓦当文様	表面処理	色調	備考
					長さ	幅	厚さ				
36	瓦	平瓦	B区西	SK24 1層	(18.5)	(12.2)	2.2	—	濡	2.5Y7/1灰白	凹面布目痕
127	瓦	軒平瓦	B区西	D6 II層	(10.0)	(7.5)	2.0	唐草文	鉄軸	7.5YR7/4にぶい褐色	赤瓦
128	瓦	軒丸瓦	B区西	C5 機械掘削 1層	(8.5)	(8.4)	2.8	左回り巴文	灰軸	7.5YR6/3にぶい褐色	カキヤブリ痕

表5 遺物観察表（石製品）

遺物番号	種別	器種	調査区	出土地点	法量 (cm)			石材	備考
					長さ	幅	厚さ		
39	石製品	不明	B区西	SK23	2.5	1.8	1.7	石英	分析No. 石-3
61	石製品	不明	B区中央	SK20 上位～中位	4.0	3.5	1.8	赤玉	分析No. 石-1
62	石製品	不明	B区中央	SK20 上位～中位	3.8	3.0	2.2	赤玉	分析No. 石-2
83	石製品	砥石	B区西	SK22	10.5	5.6	2.6	砂岩	側面に筋状の刃物痕

表6 遺物観察表（金属製品）

遺物番号	種別	器種	調査区	出土地点	法量 (cm)			素材	備考
					長さ	幅	厚さ		
94	金属製品	簪	B区西	SK26 遺構面-1.0m	13.7	2.1	0.1	真鍮	分析No. 金-1
109	金属製品	銭貨	B区西	SK28	2.3	2.3	0.1	銅	寛永通宝（新寛永）

表7 遺物観察表（木製品・植物製品）

遺物番号	種別	器種	調査区	出土地点	法量 (cm)			木取り	樹種	備考
					長さ/口径	幅/器高	厚さ/底径			
18	木製品	木器種	B区中央	E5 SX6a	—	(6.8)	—	横木取り	ブナ属	取り上げNo.2、分析No.木-7、円孔1
19	木製品	曲物底板	B区中央	E5 SX6a	14.4	(12.5)	0.7	榫目	アスナロ	取り上げNo.6、分析No.木-8、片面焼印
20	木製品	箸	B区中央	E5 SX6a	20.9	0.5	0.5	芯去削出	スギ	取り上げNo.12、分析No.木-10
21	木製品	部材	B区中央	E5 SX6a	37.9	4.3	1.7	追榫目	アスナロ	取り上げNo.10、分析No.木-9、円孔1
22	木製品	漆器種	B区中央	E5 SX6a	—	(5.4)	6.5	横木取り	ブナ属	取り上げNo.1、分析No.木-6
23	木製品	曲物底板	B区中央	E5 SX6	13.5	4.5	0.4	榫目	スギ	分析No.木-1
24	木製品	箸	B区中央	E5 SX6	21.3	0.5	0.5	芯去削出	スギ	分析No.木-2
25	木製品	箸	B区中央	E5 SX6	22.2	0.5	0.5	芯去削出	スギ	分析No.木-3
26	木製品	箸	B区中央	E5 SX6	20.9	0.5	0.5	芯去削出	スギ	分析No.木-4
27	木製品	箸	B区中央	E5 SX6	21.9	0.6	0.6	芯去削出	スギ	分析No.木-5
28	木製品	箸	B区中央	E5 SX6b	21.8	0.7	0.6	芯去削出	アスナロ	取り上げNo.4、分析No.木-12
29	木製品	部材	B区中央	E5 SX6b	30.2	6.8	0.4	榫目	アスナロ	取り上げNo.2、分析No.木-11
30	植物製品	縄	B区中央	E5 SX6b	25.7ほか	0.3	0.3	—	シュロ	分析No.縄-1、S諸纏
31	木製品	漆器種	B区中央	E5 トレンチ南東壁33層	13.9	6.9	6.1	横木取り	広葉樹	分析No.木-31
63	木製品	箸	B区中央	SK20	(18.9)	0.6	0.6	芯去削出	スギ	分析No.木-13
64	木製品	差歯下駄	B区中央	SK20 底付近	21.8	9.4	5.8	榫・追榫目	材：アスナロ 歯：モクレン属	分析No.木-16、黒漆痕
65	木製品	下駄歯	B区中央	SK20 底付近	10.3	7.4	1.8	榫目	アスナロ	分析No.木-17、黒漆痕
66	木製品	一木下駄	B区中央	SK20	18.2	7.4	4.0	追榫目	アスナロ	分析No.木-15
67	木製品	部材	B区中央	SK20	6.4	3.4	3.3	みかん割り	アスナロ	分析No.木-14
95	木製品	曲物底板	B区西	SK26 遺構面-1.0m	10.8	10.8	0.9	榫目	アスナロ	分析No.木-18、側板・木釘残存
96	木製品	部材	B区西	SK26 遺構面-1.0m	50.8	4.0	1.0	板目	アスナロ	分析No.木-19、円孔1
110	木製品	漆器片	B区西	SK28	4.8	3.8	0.7	横木取り	トチノキ	分析No.木-21、黒漆・赤漆
111	木製品	結桶側板	B区西	SK28	13.2	4.4	1.1	榫目	アスナロ	分析No.木-22、箱痕・底板痕・黒漆痕
112	木製品	部材	B区西	SK28	18.5	3.2	1.2	追榫目	スギ	分析No.木-23、円孔7
113	木製品	部材	B区西	SK28 7層（南西壁36層）	16.3	3.3	2.5	板目	アスナロ	分析No.木-27、円孔3
114	木製品	部材	B区西	SK28	15.5	2.0	1.6	追榫目	マツ属複雑管束亜属	分析No.木-24
115	木製品	曲物底板	B区西	SK28 7層（南西壁36層）	16.0	16.0	0.7	榫目	スギ	分析No.木-26
116	木製品	下駄歯	B区西	SK28	19.5	12.2	1.6	榫目	モクレン属	分析No.木-20
117	木製品	部材	B区西	SK28 7層（南西壁36層）	36.0	11.8	1.5	追榫目	マツ属複雑管束亜属	分析No.木-29、円孔2
118	木製品	部材	B区西	SK28	75.5	18.0	1.6	板目	スギ	分析No.木-25、円孔4
119	木製品	部材	B区西	SK28 7層（南西壁36層）	65.0	8.0	1.6	追榫目	アスナロ	分析No.木-28、円孔1
121	木製品	下駄歯	B区西	SK30 上位	11.0	5.5	1.6	追榫目	モクレン属	分析No.木-30、黒漆痕

表8 遺物観察表（ガラス製品）

遺物番号	種別	器種	調査区	出土地点	法量 (cm)			技法	色調	備考
					口径	器高	底径			
10	ガラス製品	瓶	A区中央	機械掘削 I層	1.7	7.9	3.5	型吹き	無色透明	側面陽刻「金沢医科大学附属病院」銘・陽刻目盛り線
11	ガラス製品	瓶	B区中央	D4 壁立て I層	1.7	7.3	3.0	型吹き	無色透明	側面陽刻目盛り線・底面陽刻「正」銘
12	ガラス製品	瓶	B区西	D6 近代盛土 I層	1.6	6.3	2.8	型吹き	無色透明	側面陽刻目盛り線
13	ガラス製品	瓶	B区西	C5 壁立て I層	2.1	7.4	3.2	—	無色透明	側面陽刻「N. ANTOINE PARIS」銘

第5節 自然科学分析

1) 樹種同定

宝町遺跡出土木製品の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

石川県金沢市の宝町遺跡から出土した木製品の樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は、B区中央およびB区西から出土した木製品31点である。試料No. 16の差歯下駄については、台と前歯、後歯について同定を行なったため、同定数は33点となった。いずれも近世の木製品と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属とスギ、アスナロの3分類群と、広葉樹のモクレン属とブナ属、トチノキの3分類群の、計6分類群がみられた。アスナロが13点で最も多く、スギが10点、モクレン属が4点、マツ属複維管束亜属とブナ属が各2点、トチノキが1点であった。また、横断面の採取が行えず、広葉樹までの同定となった試料が1点あった。同定結果を表9に、一覧を表10に示す。

樹種/器種	差歯下駄		一木下駄	漆器椀	木器椀	曲物底板	結桶側板	漆器片	箸	部材	合計
	台	歯									
マツ属複維管束亜属										2	2
スギ						2			6	2	10
アスナロ	1	1	1			2	1		1	6	13
モクレン属		4									4
ブナ属				1	1						2
トチノキ								1			1
広葉樹				1							1
合計	1	5	1	2	1	4	1	1	7	10	33

表9 宝町遺跡出土木製品の樹種同定結果

以下に、同定された材の特徴を記載し、図31・32に光学顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図31 1a-1c (No. 24)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分

試料No.	遺物No.	地区	遺構等	器種	樹種	木取り	時期
1	木-1	B区中央	E5 SX6	曲物底板	スギ	榫目	近世
2	木-2	B区中央	E5 SX6	箸	スギ	芯去削出	近世
3	木-3	B区中央	E5 SX6	箸	スギ	芯去削出	近世
4	木-4	B区中央	E5 SX6	箸	スギ	芯去削出	近世
5	木-5	B区中央	E5 SX6	箸	スギ	芯去削出	近世
6	木-6	B区中央	E5 SX6a-1	漆器碗	ブナ属	横木取り	近世
7	木-7	B区中央	E5 SX6a-2	木器碗	ブナ属	横木取り	近世
8	木-8	B区中央	E5 SX6a-6	曲物底板	アスナロ	榫目	近世
9	木-9	B区中央	E5 SX6a-10	部材	アスナロ	追榫目	近世
10	木-10	B区中央	E5 SX6a-12	箸	スギ	芯去削出	近世
11	木-11	B区中央	E5 SX6b-2	部材	アスナロ	榫目	近世
12	木-12	B区中央	E5 SX6b-4	箸	アスナロ	芯去削出	近世
13	木-13	B区中央	SK20	箸	スギ	芯去削出	近世
14	木-14	B区中央	SK20	部材	アスナロ	みかん割り	近世
15	木-15	B区中央	SK20	一木下駄	アスナロ	追榫目	近世
16-1	木-16	B区中央	SK20 底付近	差歯下駄台	アスナロ	榫目	近世
16-2	木-16	B区中央	SK20 底付近	差歯下駄前歯	モクレン属	追榫目	近世
16-3	木-16	B区中央	SK20 底付近	差歯下駄後歯	モクレン属	追榫目	近世
17	木-17	B区中央	SK20 底付近	差歯下駄歯	アスナロ	榫目	近世
18	木-18	B区西	SK26 近世遺構面から-1.0m	曲物底板	アスナロ	榫目	近世
19	木-19	B区西	SK26 近世遺構面から-1.0m	部材	アスナロ	板目	近世
20	木-20	B区西	SK28	差歯下駄歯	モクレン属	榫目	近世
21	木-21	B区西	SK28	漆器片	トチノキ	横木取り	近世
22	木-22	B区西	SK28	結桶側板	アスナロ	榫目	近世
23	木-23	B区西	SK28	部材	スギ	追榫目	近世
24	木-24	B区西	SK28	部材	マツ属複雑管束亜属	追榫目	近世
25	木-25	B区西	SK28	部材	スギ	板目	近世
26	木-26	B区西	SK28-36層	曲物底板	スギ	榫目	近世
27	木-27	B区西	SK28-36層	部材	アスナロ	板目	近世
28	木-28	B区西	SK28-36層	部材	アスナロ	追榫目	近世
29	木-29	B区西	SK28-36層	部材	マツ属複雑管束亜属	追榫目	近世
30	木-30	B区西	SK30 上位	下駄歯	モクレン属	追榫目	近世
31	木-31	B区中央	E5トレンチ南東壁 33層	漆器碗	広葉樹	横木取り	近世

表 10 宝町遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don ヒノキ科 図 31 2a-2c (No. 4)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 2～15 列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1 分野に普通 2 個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(3) アスナロ *Thujaopsis dolabrata* (L. f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図 31 3a-3c (No. 12)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ 2～13 列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1 分野に 2～4 個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また、精油分が多く、耐朽性に優れている。

(4) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図 32 4a-4c (No. 20)

小型の道管が単独ないし 2～3 個複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、道管交互壁孔は階段状となる。放射組織は上下端 1 列が直立する異性で、幅 1～2 列となる。

モクレン属にはホオノキ、コブシなどがある。代表的なホオノキは、山間の肥沃なところに散生する落葉高木の広葉樹で、材は軽軟で堅くなく、切削その他の加工は極めて容易であ

る。

(5) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図 32 5a-5c (No. 6)

小型の道管が単独ないし 2～3 個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅 1～10 列である。

ブナ属にはブナとイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は、重硬で強度があるが、切削加工は困難ではない。

(6) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume ムクロジ科 図 32 6a-6c (No. 21)

小型の道管が単独ないし 2～3 個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列である。また、放射組織は層階状に配列する。

トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

(7) 広葉樹

道管は確認できたが、試料保護のため横断面の切片が採取できず、道管の配列が確認できなかった。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端 1～2 列が直立する異性で、幅 4 列以上となる。

4. 考察

差歯下駄の台はアスナロ、歯はアスナロとモクレン属、一木下駄はアスナロであった。アスナロは木理通直で真っすぐに生育し、加工性が良く、耐久性に優れた樹種である。またモクレン属は、軽軟で加工性の良い樹種である（伊東ほか 2011）。石川県内で確認されている江戸時代後半頃の一木下駄ではスギとモクレン属、トネリコ属が、差歯下駄の台と歯ではモクレン属が確認されている（伊東・山田編 2012）。宝町遺跡の差歯下駄の歯にはアスナロとモクレン属が利用されており、地域の傾向と一致するが、差歯下駄の台と一木下駄はアスナロであり、地域の傾向とは異なる傾向を示した。

漆器椀ではブナ属と広葉樹、木器椀ではブナ属、漆器片ではトチノキがみられた。ブナ属は堅硬だが比較的加工性が良く、トチノキは軽軟で加工性の良い樹種であり、いずれも漆器等の木胎として多く利用されている（伊東ほか 2011）。石川県内で確認されている江戸時代後半の漆器椀ではブナ属とトチノキが共に多く確認されており（伊東・山田編 2012）、傾向は一致する。

曲物底板はスギとアスナロ、結桶側板はアスナロであった。スギはアスナロと同じく、真っすぐで加工性の良い樹種である。石川県内で確認されている江戸時代後半の曲物底板はスギとヒノキ、結桶側板はスギとアスナロであり（伊東・山田編 2012）、傾向は概ね一致する。

箸では、スギとアスナロがみられた。石川県内で確認されている江戸時代後半の箸では、多くがスギとタケ亜科であり（伊東・山田編 2012）、傾向は概ね一致する。

石川県では、各時期を通してスギの利用が多いが、江戸時代頃の南加賀地方ではヒノキ科の樹種の利用が増加する傾向が確認されている（久田 2012）。宝町遺跡ではスギとアスナロが共に多く確認されており、傾向は一致する。

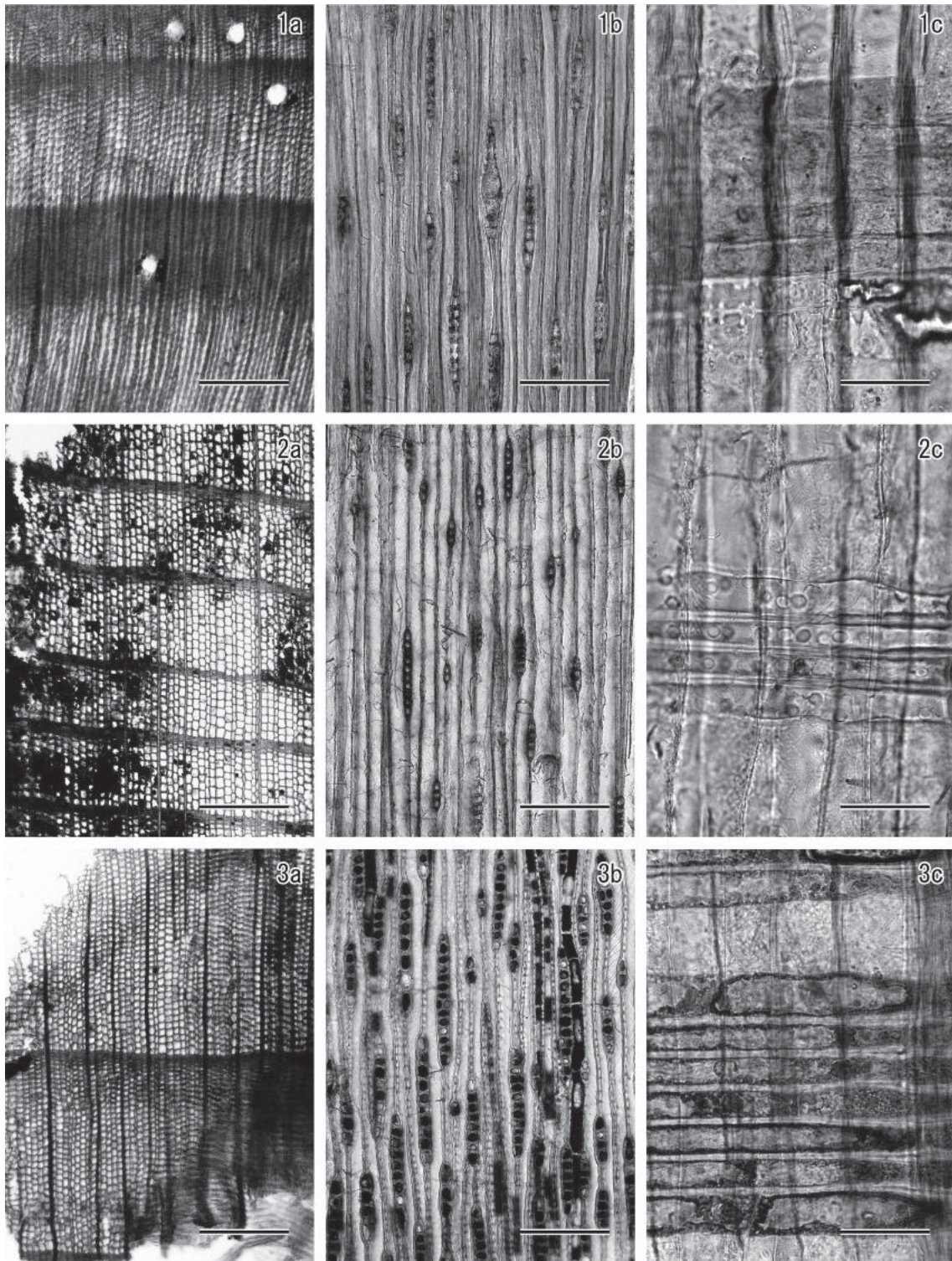


図 31 宝町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真 (1)

1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No. 24)、2a-2c. スギ (No. 4)、3a-3c. アスナロ (No. 12) a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接線断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=50 μm)

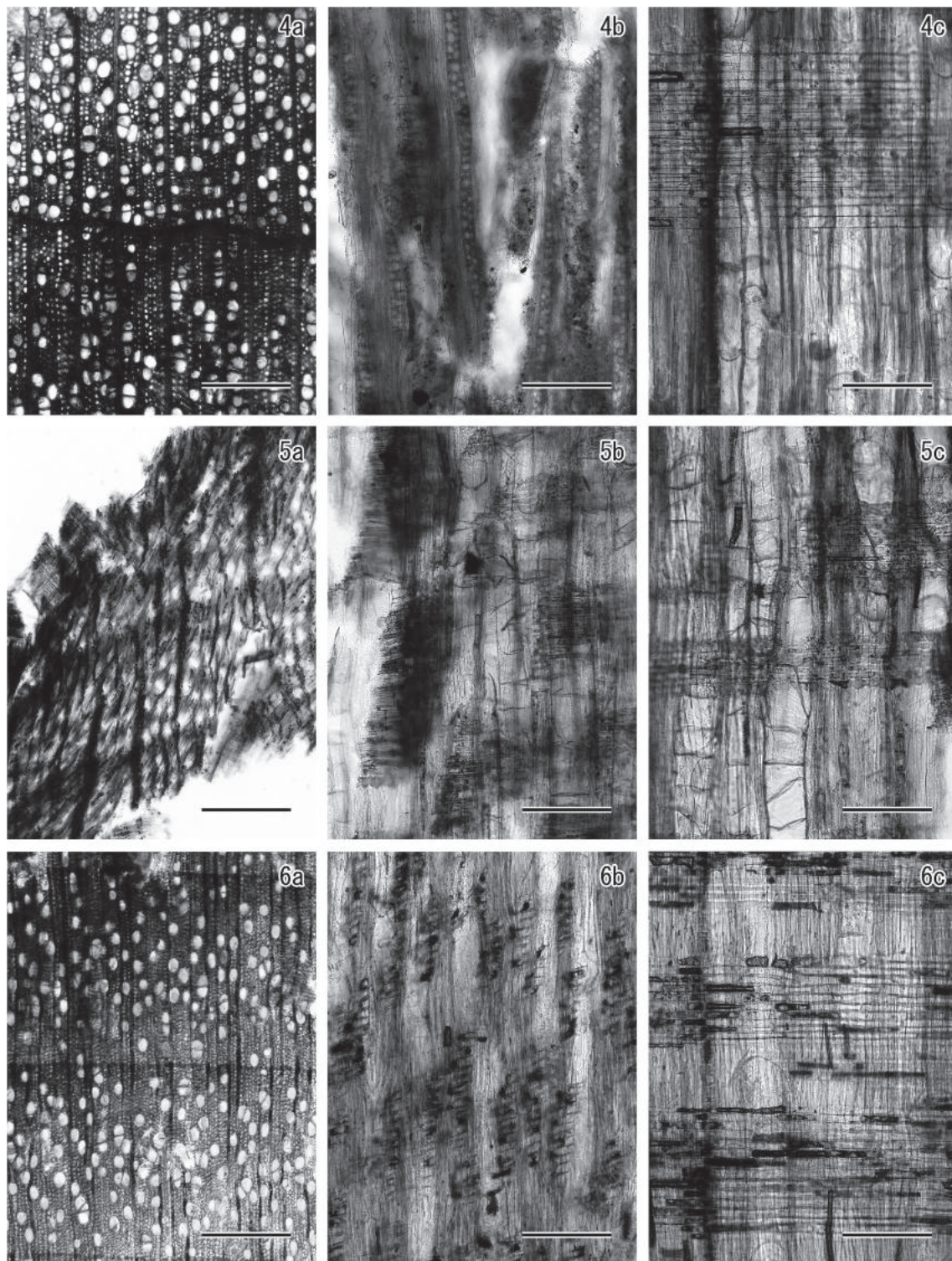


図 32 宝町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真 (2)

4a-4c. モクレン属 (No. 20)、5a-5c. ブナ属 (No. 6)、6a-6c. トチノキ (No. 21) a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接線断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=200 μm)

2) 繊維同定

金沢大学宝町遺跡出土の繊維製品の素材同定

黒沼保子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

金沢大学宝町遺跡第 19 次発掘調査で出土した縄 1 点について、樹脂包埋法による素材同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、B 区中央の E5 トレンチの SX6b から出土した縄である。遺構の時期は、近世と推測されている。

方法は、まず肉眼と実体顕微鏡で試料を観察し、樹脂包埋試料として一部を採取した。樹脂包埋では、アセトンの上昇系列で脱水処理を行なった後、エポキシ樹脂に包埋した。樹脂包埋試料はマイクロトームを用いて切片を作製し、プレパラートに封入した。プレパラートは光学顕微鏡下で観察し、現生標本と比較して同定を行った。プレパラートは、パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

同定の結果、縄はシュロの葉鞘繊維であった。結果を表 11 に示す。

次に、素材植物の特徴と同定根拠を示す。また、試料の写真と光学顕微鏡写真を図 33 に示す。

(1) シュロ *Trachycarpus fortunei* (Hook.) H. Wendl. ヤシ科 図 33 1-2 (縄-1)

繊維状遺物の断面は円形～楕円形で、直径は 0.3～0.5mm 程度である。断面を構成している細胞は繊維細胞で、厚壁で細胞間隙なく密集している。太い繊維細胞では 1 本の維管束とそれを帽子状に取り囲む大きな繊維細胞束からなり、細い繊維細胞では維管束はなく繊維細胞のみからなる。

No.	調査区	トレンチ	遺構	日付	サイズ	器種	素材	時期
縄-1	B区中央	E5	SX6b	2019. 6. 13	25.7×0.3×0.3cm (ほか)	縄類	シュロ	近世

表 11 宝町遺跡出土繊維製品の同定結果

4. 考察

SX6b 出土の縄は、シュロの葉鞘繊維であった。シュロは、西南日本に生育する植物である。石川県には自生しないが、近世には縄などの製品として流通していたと思われる。新宿区の若葉三丁目遺跡や、南元町遺跡などでもシュロの縄や束子が確認されている (小林ほか 2015)。シュロの葉鞘の繊維は、丈夫で水はけがよく、腐りにくいため、現代においても束子や縄の素材として利用されている。

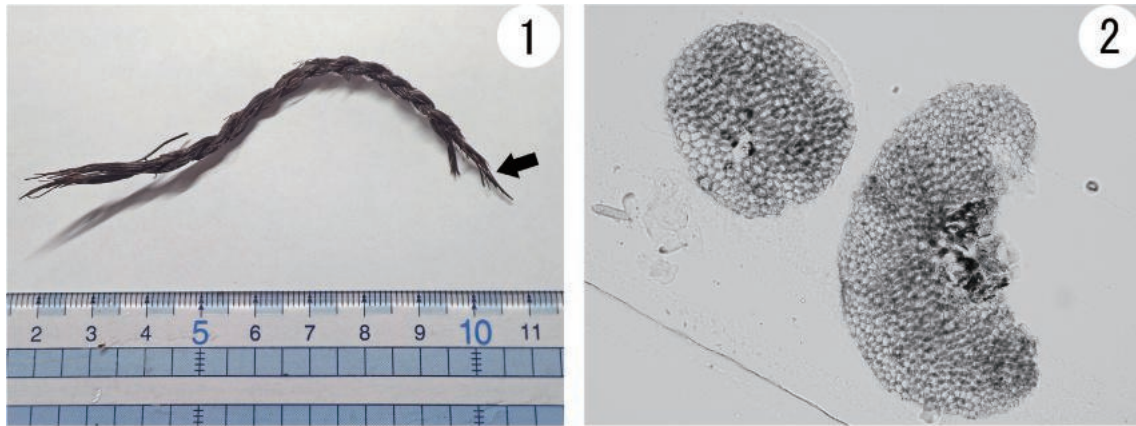


図 33 繊維同定の試料写真及び光学顕微鏡写真

1. 試料写真 (矢印: 試料採取位置) 2. シュロ葉鞘繊維 (縄-1)

3) 金属製品の元素マッピング分析

宝町遺跡出土金属製品の元素マッピング分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

金沢市宝町地内に所在する宝町遺跡より出土した金属製品について、元素マッピング分析を行い、その材質を検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、近世の土坑 SK26 より出土した簪である(表 12)。簪は、主に鈍い金色の箇所と、赤色の箇所が観察された。遺物について、元素マッピング分析、および特徴的な箇所のポイント分析を行った。

分析 No.	器種	出土 地区	出土 遺構	出土層位	寸法(cm)	備考
金-1	簪	B区西	SK26	近世遺構面から-1.0m	13.7×2.1×0.1	主に金色の箇所と赤色の箇所がみられる

表 12 元素マッピング分析の分析対象

分析には、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1.00mA のロジウム (Rh) ターゲット、X 線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、X 線検出器は高純度 Si 検出器で、検出可能元素はナトリウム (Na) ~ウラン (U) である。本装置は、試料ステージを走査させながらの測定により、元素マッピング分析が可能となる。元素マッピング分析を行った後、さらにマッピング図を基に特徴的な箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析が管電圧 50kV、管電流 1.00mA、ビーム径 100 μ m、測定時間 15000s を 1 回走査、ポイント分析が管電圧 50kV、管電流自動設定、ビーム径 100 μ m、測定時間 1000s に設定した。

定量分析は、ノンスタンダードFP法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

蛍光X線分析は表面分析であり、均一とは限らない金属製品の正確な組成比を必ずしも示しているとはいえないが、おおよその化学組成、含まれている微量元素を知る上では非常に有効な手法である。

3. 結果

元素マッピング分析により得られたマッピング図を図34に、マッピング図に示したa～fの各ポイントの半定量分析結果を表13に示す。アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、鉄 (Fe) といった表面の汚れに大きく影響される元素を除くと、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn)、セレン (Se)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) が検出された。

ポイント	Cu	Zn	Se	Ag	Sn	Pb	備考
a	86.74	11.07	—	—	1.38	0.81	金色部
b	85.69	11.67	—	—	1.53	1.11	金色部
c	93.85	4.70	—	—	1.18	0.26	赤色部
d	91.07	7.02	—	—	1.36	0.55	赤色部
e	75.90	1.08	0.25	0.18	17.31	5.28	鑢接痕?
f	78.54	8.00	0.11	—	8.21	5.14	鑢接痕?

表13 元素マッピング図中ポイントの半定量分析結果 (mass%)

4. 考察

分析の結果、銅 (Cu) と亜鉛 (Zn) を主成分とした銅合金である、真鍮製と確認された。金色の色調も合金本来の色調と考えられる。

一方、赤色の箇所については、赤色部の鉄 (Fe)、水銀 (Hg)、鉛 (Pb) のマッピング図の輝度が低く、ベンガラ、水銀朱、鉛丹といった顔料による着色ではない。金色の箇所と比較すると、赤色の箇所は亜鉛 (Zn) の含有量が少ない傾向が亜鉛のマッピング図やポイント分析結果から認められた。したがって赤色部は、腐食により亜鉛 (Zn) の溶脱と銅 (Cu) の酸化が起こり、表面に酸化銅 (I) が形成されて赤く発色していると推定される。これは、金属表面を人為的に着色する、煮込み着色と呼ばれる着色技法と同じ現象が遺物表面に起きているといえるが、今回の遺物の表面の腐食が埋蔵環境によるものか、人為的な着色技法によるものかは不明である。

ポイント e、f では、スズ (Sn) と鉛 (Pb) が多く検出された (表13)。これらの箇所は、マッピング図ではケイ素 (Si) や鉄 (Fe) の輝度も高いため、腐食による析出物である可能性が高いと考えられるが、鑢接による飾金具の接着が行われていた痕跡である可能性も指摘しておきたい。

5. おわりに

近世の土坑 SK26 より出土した簪について元素マッピング分析を行った結果、銅と亜鉛の銅合金である真鍮製と確認された。赤色部は銅による発色と考えられる。

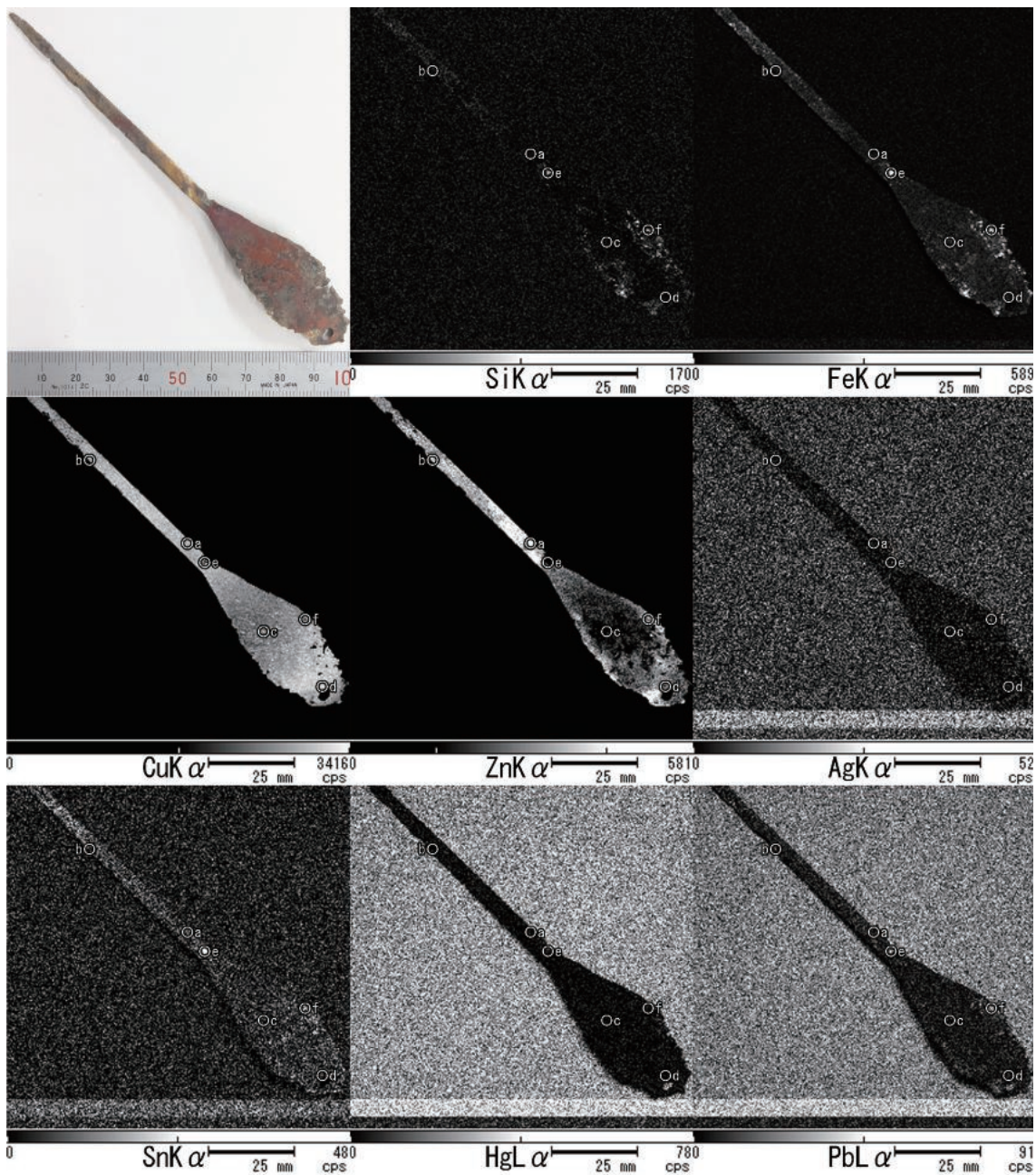


図 34 簪の元素マッピング図

Si : ケイ素 Fe : 鉄 Cu : 銅 Zn : 亜鉛 Ag : 銀 Sn : スズ Hg : 水銀 Pb : 鉛

4) 寄生虫卵分析、珪藻分析、リン・カルシウム分析

宝町遺跡の寄生虫卵分析、珪藻分析、リン・カルシウム分析

森 将志・野口真利江・竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

石川県金沢市宝町地内の宝町遺跡において、トイレの可能性が疑われる遺構（SK24）が検出された。この遺構の性格を検討するために、遺構埋土および遺構外から寄生虫卵分析、珪藻分析、リン・カルシウム分析用の試料が採取された。以下では、寄生虫卵分析、珪藻分析、リン・カルシウム分析の結果を示し、トイレ遺構の可能性について検討した。

2. 試料と分析方法

分析試料は、B区西の近世の遺構と考えられているSK24から採取された埋土1と埋土2の2試料である（表14）。また、比較試料として、SK24の横から地山と漸移層、包含層の3試料も採取された（表14）。これらの試料について、以下の手順に従って分析を行った。

試料No.	調査区	遺構	層位	堆積物の特徴	備考
1	B区西	SK24	埋土1	黒褐色 (10YR 3/1) 粘土	トイレ遺構？
2			埋土2	黒褐色 (10YR 3/1) 粘土	
3		SK24横	包含層	黒褐色 (10YR 3/1) 粘土	遺構外（比較試料）
4			漸移層	黄褐色 (2.5Y 5/3) 粘土	
5			地山	褐色 (10YR 4/4) 粘土	

表14 寄生虫卵分析、珪藻分析、リン・カルシウム分析の分析資料一覧

2-1. 寄生虫卵分析

試料を乾燥後、遠沈管にとり、計量した。そこに10%の水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。その後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、得られた残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。なお、試料1g中の寄生虫卵含有数は、次式で求めた。

$$X = BD/AC$$

X：試料1g中の寄生虫卵含有数、A：分析に用いた試料の重量(g)、B：濃縮試料+グリセリンの重量(g)、C：濃縮試料+グリセリンのうち、封入に用いた重量(g)、D：プレパラート中の寄生虫卵数

また、保存状態の良好な寄生虫卵を選んで単体標本（PLC. 3166、3167）を作製し、写真を図35に載せた。



図 35 産出した寄生虫卵

1. 回虫卵 (PLC. 3166 SK24 埋土 1) 2. 鞭虫卵 (PLC. 3167 SK24 埋土 2)

2-2. 珪藻分析

処理重量約 1.0g を取り出し、秤量した後ビーカーに移して 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。反応終了後、水を加え 1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を 10 回ほど繰り返した。懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下 600 ～ 1000 倍で観察し、プレパラートの面積の 2/3 以上または珪藻化石 200 個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1g 当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良い珪藻化石を選び、写真を図 36 に載せた。

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉 (1988) および安藤 (1990) が設定し、千葉・澤井 (2014) により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種 (?) として、海～汽水種は海～汽水不定・不明種 (?) として、汽水種は汽水不定・不明種 (?) として、淡水種は広布種 (W) として、その他の種はまとめて不明種 (?) として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明 (?) として扱った。以下に、小杉 (1988) が設定した海水～汽水域におけ

る環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群のうち、淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[上流性河川指標種群（J）]: 河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群（K）]: 河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群（L）]: 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群（M）]: 水深が約 1.5m 以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群（N）]: 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

[沼沢湿地付着生指標種群（O）]: 水深 1m 内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態に優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群（P）]: 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群（Q）]: 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

[陸生珪藻A群（Qa）]: 耐乾性の強い特定のグループである。

[陸生珪藻B群（Qb）]: A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

2-3. リン・カルシウム分析

分析は、藤根ほか（2008）の方法に従って行った。この方法は、元素マッピング分析によりリン、カルシウムを多く含む箇所を面的に検出し直接測定できるという利点がある。測定試料には、試料を乾燥後、極軽く粉砕して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で 20t・1 分以上プレスしたものを作製、使用した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1.00mA のロジウム（Rh）ターゲット、X 線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。また、試料ステージを走査させながら測定して元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い、元素の分布図を得た上で、リン（P）のマッピング図において輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では 50kV、1.00mA、ビーム径 100 μ m、測定時間 6000s、パルス処理時間 P3 に、ポイント分析では 50kV、0.10～0.40mA（自動設定）、ビーム径 100 μ m、測定時間 500s、パルス処理時間 P4 に設定して行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で行っており、半定量値である。

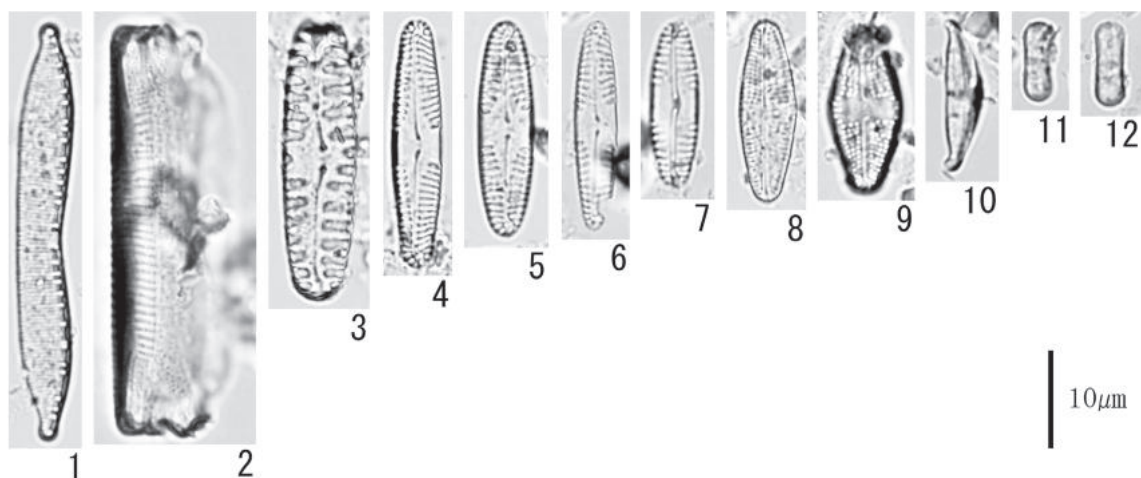


図 36 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

1. *Hantzschia amphioxys* (SK24埋土2) 2. *Eunotia* spp. (SK24横 包含層)
 3. *Pinnularia borealis* (SK24埋土2) 4. *Pinnularia subcapitata* (SK24埋土2)
 5. *Pinnularia subcapitata* var. *elongata* (SK24埋土2) 6. *Pinnularia subcapitata* (SK24埋土2)
 7. *Pinnularia subcapitata* var. *elongata* (SK24埋土2) 8. *Luticola mutica* (SK24埋土2)
 9. *Luticola mutica* (SK24埋土1) 10. *Amphora montana* (SK24埋土2)
 11. *Diadesmis contenta* (SK24埋土2) 12. *Diadesmis contenta* (SK24埋土2)

3. 分析結果

3-1. 寄生虫卵分析

計量し、検鏡した結果を表 15 に示す。SK24 の埋土 1 と埋土 2 から回虫卵と鞭虫卵が、SK24 横の包含層から回虫卵が検出された。SK24 の埋土 1 では試料 1cm³ あたり 145 個の寄生虫卵が、SK24 の埋土 2 では試料 1cm³ あたり 260 個の寄生虫卵が、SK24 横の包含層では試料 1cm³ あたり 12 個の寄生虫卵が検出されている。

	SK24		SK24横 (遺構外)		
	埋土1	埋土2	包含層	漸移層	地山
分析に用いた試料(g)	4.2604	3.5397	4.1120	3.6674	3.4190
残渣+グリセリン(g)	1.1926	1.3631	1.1532	0.8349	0.5650
封入に用いた量(g)	0.0595	0.0274	0.0593	0.0771	0.0688
試料の密度 (g/cm ³)	1.62	1.54	2.48	1.47	1.45
回虫卵	6	5	1	0	0
(試料1g当たりの個数)	28	70	5	0	0
鞭虫卵	13	7	0	0	0
(試料1g当たりの個数)	61	98	0	0	0
計	19	12	1	0	0
(試料1g当たりの個数)	89	169	5	0	0
(試料1cm ³ 当たりの個数)	145	260	12	0	0

表 15 試料の計測値と寄生虫卵数

3-2. 珪藻分析

検出された珪藻化石は、淡水種が16分類群12属7種2変種であった(表16)。これらの珪藻化石は、淡水域における4環境指標種群(0、P、Qa、Qb)に分類された(表16)。また、珪藻化石分布図を図37に示した。以下では、各試料における珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。

SK24の埋土1(試料No.1)

堆積物1g中の珪藻殻数は 8.0×10^3 個、完形殻の出現率は33.3%である。堆積物中の珪藻殻数は少ない。環境指標種群では、陸生珪藻A群(Qa)と沼沢湿地付着生指標種群(0)が検出された。

珪藻化石が少ない点と環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域の影響をわずかに受ける、基本的に乾燥した陸域環境が考えられる。

SK24の埋土2(試料No.2)

堆積物1g中の珪藻殻数は 1.7×10^5 個、完形殻の出現率は52.0%である。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、陸生珪藻A群(Qa)が多く、高層湿原指標種群(P)を伴う。

No.	分類群	種群	SK24		SK24横(遺構外)		
			埋土1	埋土2	包含層	漸移層	地山
1	<i>Amphora montana</i>	Qa		14			
2	<i>Caloneis aerophila</i>	Qa		3			
3	<i>Diadesmis contenta</i>	Qa	1	10			
4	<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i>	0	1		1		
5	<i>E.</i> spp.	?	2	4	5		
6	<i>Frustulia</i> spp.	?		3			
7	<i>Hantzschia amphioxys</i>	Qa	3	38	2	1	
8	<i>Luticola mutica</i>	Qa	2	8		1	
9	<i>Navicula</i> spp.	?		6			
10	<i>Neidium</i> spp.	?		5			
11	<i>Nitzschia</i> spp.	?		6			
12	<i>Pinnularia borealis</i>	Qa	1	10	2	1	
13	<i>P.</i> <i>subcapitata</i>	Qb		6			
14	<i>P.</i> <i>subcapitata</i> var. <i>elongata</i>	P		40	1		
15	<i>P.</i> spp.	?	2	37	6		
16	<i>Surirella</i> spp.	?		8			
17	Unknown	?		6			
	沼沢湿地付着生	0	1		1		
	高層湿原	P		40	1		
	陸生A群	Qa	7	83	4	3	
	陸生B群	Qb		6			
	淡水不定・不明種	?	4	69	11		
	その他不明種	?		6			
	海水種						
	海～汽水種						
	汽水種						
	淡水種		12	198	17	3	0
	合計		12	204	17	3	0
	完形殻の出現率(%)		33.3	52.0	41.2	33.3	-
	堆積物1g中の殻数(個)		8.0E+03	1.7E+05	1.2E+04	2.0E+03	0.0E+00

表16 堆積物中の珪藻化石産出表(種群は、千葉・澤井(2014)による)

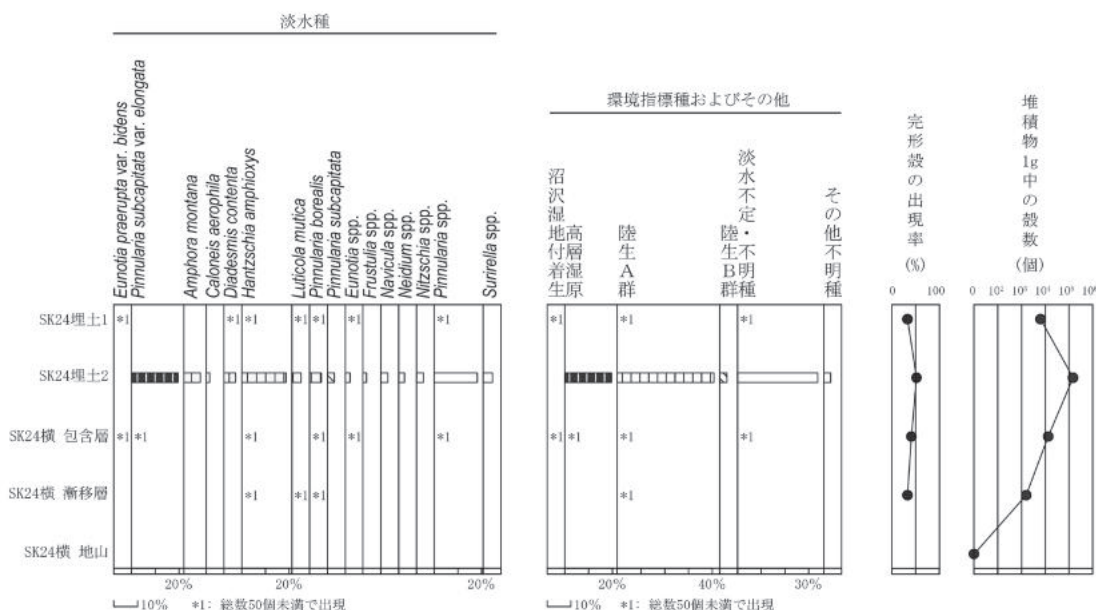


図 37 堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示）

環境指標種群の特徴から、高層湿原などを伴うジメジメとした陸域環境が推定される。SK24 横の包含層（試料 No. 3）

堆積物 1g 中の珪藻殻数は 1.2×10^4 個、完形殻の出現率は 41.2% である。堆積物中の珪藻殻数は少ない。環境指標種群では、陸生珪藻 A 群 (Qa)、高層湿原指標種群 (P)、沼沢湿地付着生指標種群 (O) が検出された。

珪藻化石が少ない点と環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域の影響をわずかに受ける、基本的に乾燥した陸域環境であったと考えられる。

SK24 横の漸移層（試料 No. 4）

堆積物 1g 中の珪藻殻数は 2.0×10^3 個、完形殻の出現率は 33.3% である。堆積物中の珪藻殻数は少ない。環境指標種群は陸生珪藻 A 群 (Qa) のみが検出された。

珪藻化石が少ない点と環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域の影響をわずかに受ける、基本的に乾燥した陸域環境であったと考えられる。

SK24 横の地山（試料 No. 5）

殻が半分以上残存する珪藻化石は検出されなかった。珪藻化石が検出されなかったため、基本的に乾燥した陸域環境であったと考えられる。

3-3. リン・カルシウム分析

試料のリンおよびカルシウムの各マッピング図にポイント分析を行った各 5ヶ所の位置を示した図を図 38 に、ポイント分析結果より酸化物の形で表した各元素の半定量値を表 17 に示す。なお、元素マッピング図は、元素ごとに輝度（蛍光 X 線強度）を相対的に比較できるように、各試料のブライトネスとコントラストを調整した。

分析の結果、SK24 の埋土 1（試料 No. 1）はリン (P205) が 0.24 ~ 1.54%、カルシウム (Ca0) が 0.32 ~ 0.49%、SK24 の埋土 2（試料 No. 2）はリン (P205) が 4.01 ~ 18.37%、カルシウム (Ca0)

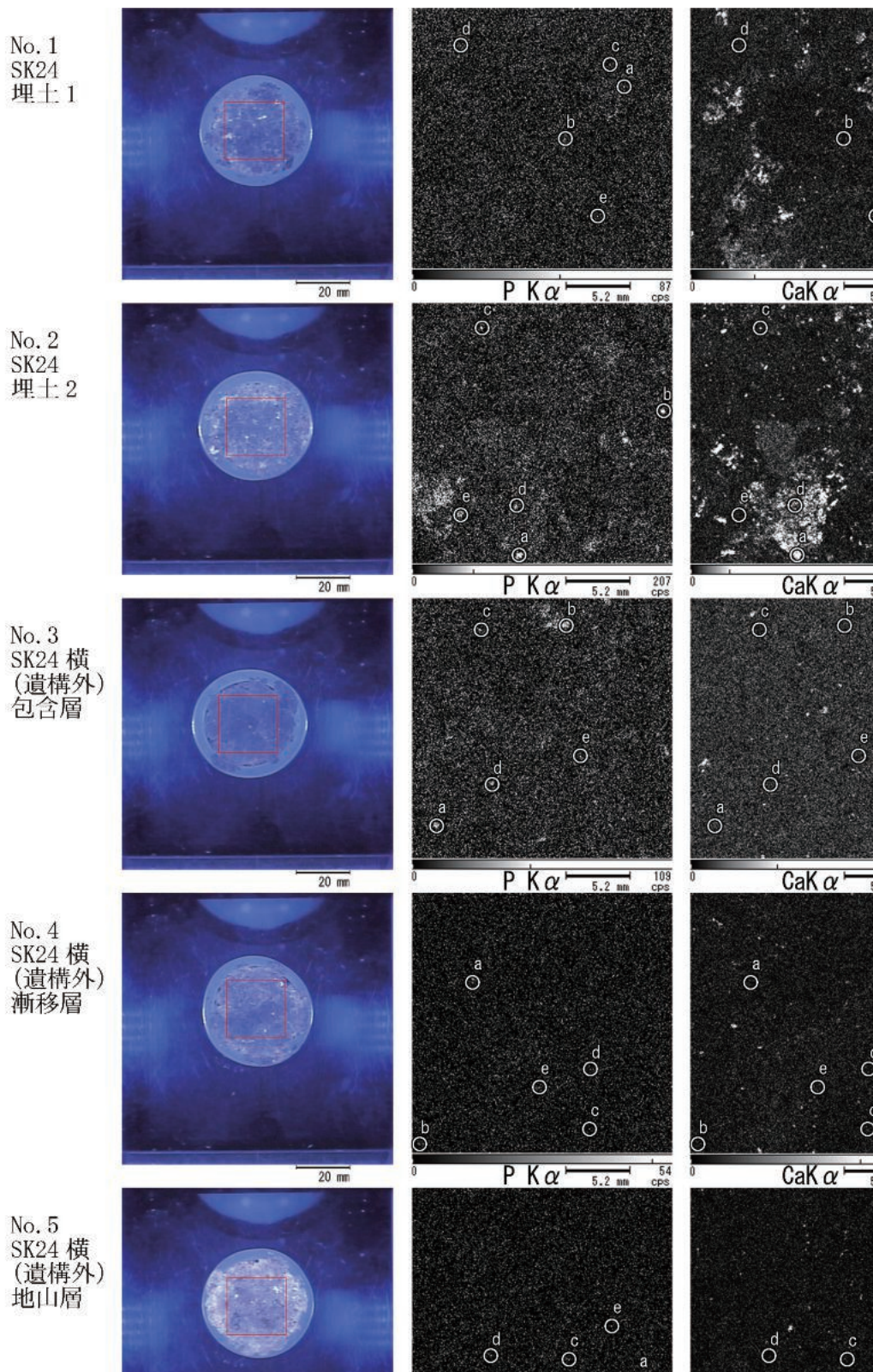


図 38 プレス試料及びリンとカルシウムの元素マッピング図

No.	ポイント	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	遺構・層位
1	a	0.81	18.17	70.94	0.24	0.39	1.83	0.32	1.13	0.05	6.05	0.02	0.01	0.00	0.03	SK24 埋土1
	b	0.77	20.14	60.95	1.54	0.60	1.75	0.39	1.42	0.04	12.34	0.02	0.01	0.01	0.03	
	c	0.00	16.90	72.00	0.57	0.47	2.10	0.49	0.88	0.04	6.50	0.02	0.01	0.01	0.03	
	d	0.35	22.44	66.35	0.92	0.58	2.13	0.47	1.21	0.04	5.45	0.01	0.01	0.00	0.02	
	e	0.86	19.69	67.34	0.42	0.37	2.25	0.36	1.24	0.04	7.34	0.01	0.01	0.01	0.04	
2	a	0.07	13.18	41.10	18.37	1.36	0.76	20.92	0.53	0.72	2.81	0.01	0.11	0.03	0.03	SK24 埋土2
	b	0.45	28.36	38.30	15.53	5.27	1.73	1.39	0.87	0.20	7.82	0.02	0.02	0.01	0.03	
	c	0.73	20.30	58.04	6.87	1.35	2.15	2.94	0.92	0.06	6.57	0.02	0.01	0.01	0.04	
	d	0.27	18.97	63.70	5.51	2.09	2.31	0.65	1.21	0.10	5.12	0.02	0.01	0.01	0.03	
	e	0.60	17.72	63.02	4.01	1.15	2.09	0.34	1.04	0.05	9.92	0.02	0.01	0.01	0.04	
3	a	0.42	17.41	36.50	14.18	0.33	1.06	1.24	0.64	0.83	27.27	0.03	0.03	0.01	0.06	SK24横 (遺構外) 包含層
	b	0.69	19.23	52.23	7.03	0.12	1.93	1.01	1.05	0.20	16.40	0.03	0.02	0.01	0.04	
	c	0.00	19.63	56.23	6.03	0.37	1.72	1.01	0.97	0.68	13.28	0.03	0.02	0.01	0.03	
	d	0.76	19.29	57.55	5.18	0.23	1.91	0.94	1.08	0.99	11.97	0.02	0.02	0.01	0.04	
	e	0.80	20.14	62.41	3.06	0.28	2.31	0.93	1.05	0.17	8.77	0.02	0.02	0.01	0.04	
4	a	0.04	19.20	52.50	1.41	0.23	2.04	0.80	0.96	1.35	21.32	0.05	0.03	0.01	0.07	SK24横 (遺構外) 漸移層
	b	0.18	19.91	58.56	0.37	0.16	2.31	0.74	1.19	0.04	16.42	0.04	0.02	0.01	0.06	
	c	0.00	20.31	62.88	0.31	0.10	2.23	1.01	1.21	0.09	11.72	0.04	0.02	0.01	0.06	
	d	0.89	18.19	68.32	0.92	0.12	2.20	0.64	0.90	0.04	7.66	0.03	0.03	0.01	0.05	
	e	0.21	17.84	66.43	0.62	0.07	2.16	0.65	1.03	0.03	10.83	0.04	0.02	0.01	0.07	
5	a	0.45	16.12	64.58	0.19	0.18	2.36	0.37	1.26	0.03	14.26	0.03	0.02	0.01	0.14	SK24横 (遺構外) 地山層
	b	0.00	22.77	55.18	0.38	0.11	2.09	0.57	1.31	0.05	17.37	0.04	0.03	0.02	0.07	
	c	0.23	17.07	65.01	0.39	0.14	1.98	1.09	1.28	0.09	12.60	0.03	0.03	0.01	0.05	
	d	0.59	16.00	40.07	1.70	0.29	1.34	0.47	0.76	0.25	38.33	0.05	0.03	0.01	0.10	
	e	0.12	19.10	60.44	0.16	0.20	2.25	0.34	1.04	0.03	16.18	0.04	0.03	0.01	0.07	

表 17 蛍光 X 線半定量分析結果 (mass%)

が 0.34 ~ 20.92% の値を示した。また、比較対象となる SK24 横の包含層 (試料 No. 3) はリン (P205) が 3.06 ~ 14.18%、カルシウム (CaO) が 0.93 ~ 1.24%、SK24 横の漸移層 (試料 No. 4) はリン (P205) が 0.31 ~ 1.41%、カルシウム (CaO) が 0.64 ~ 1.01%、SK24 横の地山層 (試料 No. 5) はリン (P205) が 0.16 ~ 1.70%、カルシウム (CaO) が 0.34 ~ 1.09% の値を示した。

4. 考察

珪藻分析の結果では、SK24 の埋土 2 では陸生珪藻 A 群 (Qa) が優勢な珪藻化石群集が得られており、SK24 の埋土 1 でも比較試料に比べるとわずかながら陸生珪藻 A 群 (Qa) が多く得られている。よって、SK24 は周辺よりも水分がやや多く、ジメジメした環境下で堆積したと推察される。

リン・カルシウム分析の結果では、SK24 の埋土 2 からはリンとカルシウムがともに明らかに多い箇所が検出された (表 17)。SK24 の埋土 2 は、マッピング図においてもリンとカルシウムの輝度が明らかに高い箇所が多くみられ、これらは、し尿に由来する物質である可能性は十分に考えられる。SK24 の埋土 1 は、リンのマッピング図の輝度が高い箇所は少ないが、SK24 横の漸移層や地山層 (ともに遺構外) と比較すると、全体的な輝度はごくわずかながら高い。また、カルシウムのマッピング図の輝度が明らかに高い箇所は多くみられ、これらは、し尿に由来する物質である可能性がある。なお、SK24 横の包含層 (遺構外) からリンの含

有量の明らかに多い箇所や、リンとカルシウムのマッピング図の輝度が高い箇所がみられ、SK24 埋土に影響を与えている可能性があるものの、埋土1のカルシウム、埋土2のリンとカルシウムのマッピング図で輝度の高い箇所は、包含層よりも明らかに多く、周辺環境の影響だけではないと考えられる。

また、寄生虫卵分析の結果では、SK24の埋土1と埋土2から寄生虫卵が検出された。SK24横の包含層（遺構外）からも寄生虫卵が検出されているものの、その密度はSK24よりも低い。このように、SK24の埋土1と埋土2では、周辺よりもやや水分が多く、ジメジメした堆積環境が推測され、リンとカルシウムの含有量が多く、寄生虫卵が多く検出される状況が確認された。よって、SK24はし尿が存在したトイレ遺構の可能性はある。ただし、寄生虫卵数については、試料1cm³中に1,000個以上あれば糞便の可能性があると考えられており（金原1997）、この目安に照らし合わせると、SK24から検出された寄生虫卵の密度は糞便堆積物の目安を下回る。糞便堆積物の目安を下回る要因としては、糞便の量が少なかったか、寄生虫卵があまり含まれていない糞便が存在していたか、堆積物で希釈されたかなど、いくつかの可能性が考えられる。

また、SK24の埋土1と埋土2から検出された寄生虫卵は、回虫卵と鞭虫卵である。回虫と鞭虫は、糞便とともに排泄された寄生虫卵が付着した野菜や野草、寄生虫卵が含まれた飲み水などの摂取によって経口感染するため、当時の人々は処理が十分ではない野菜や飲料水を摂取していたと考えられる。

第4章 総括

今回の調査区は、19回に及ぶ宝町遺跡発掘調査の一部に過ぎない。1998（平成10）年の第1次発掘調査から今回の第19次発掘調査に至るまでに、近世・近代の様々な遺構・遺物が見つかっている（金沢大学資料館2015、佐々木・妹尾・横山2017）。

ここでは、宝町遺跡における過去の発掘調査成果を概観し、近世絵図・近代図面とも照合した上で、今回の発掘調査の成果を総括したい。

図39は、宝町遺跡における過去の発掘調査区と今回の発掘調査区の位置を示したものである。この図を参照しながら、過去の発掘調査区の主な成果について述べる。

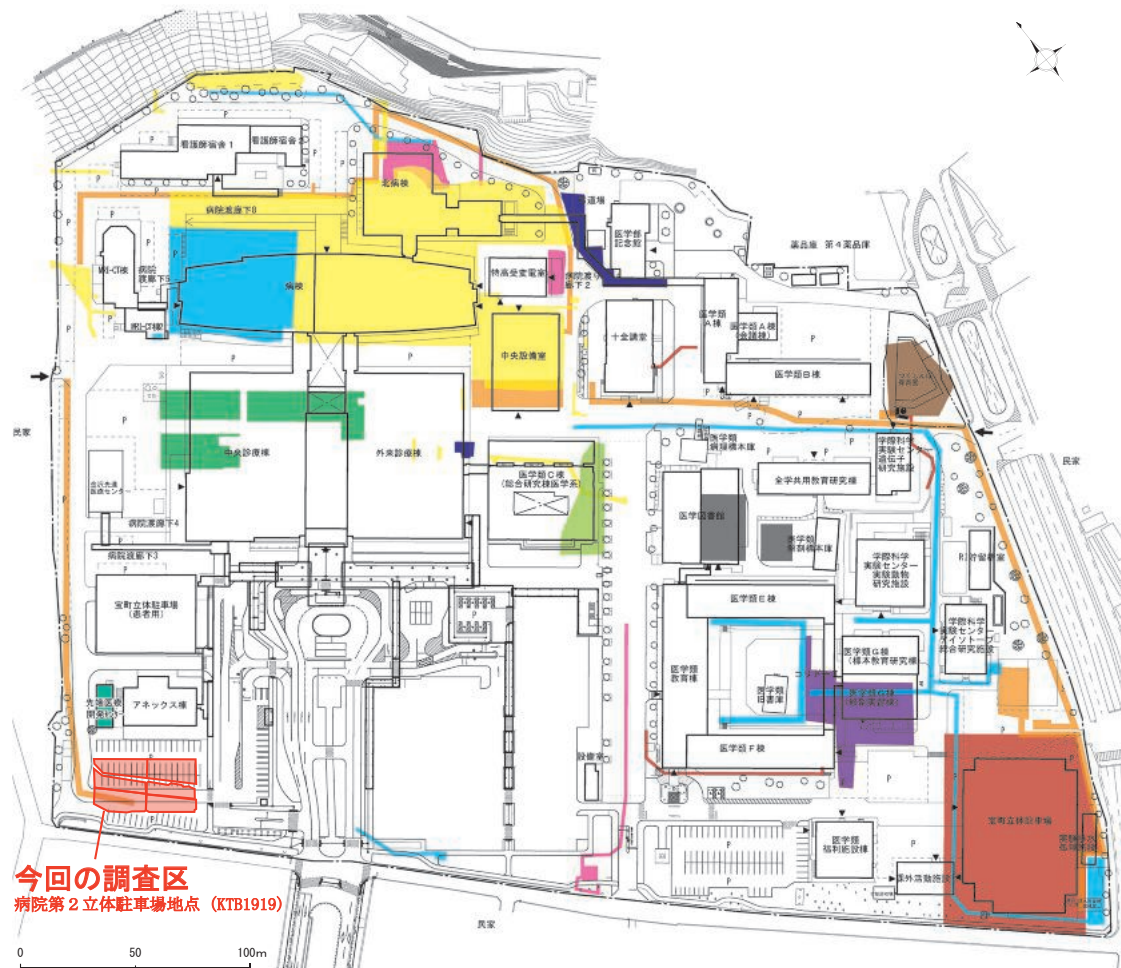
宝町遺跡の過去の調査で、真っ先に挙げるべきはやはり1998（平成10）年の第1次発掘調査である。病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ地点（KTB9801）として設定され、最初にして最大の6,926㎡を調査している。近世としては加賀藩与力町にあたり、各屋敷に伴う廃棄土坑・井戸・地下室・貯蔵施設等が多数検出されている。近世遺構の内外からは18世紀を中心として、17世紀～19世紀の土器・陶磁器等が大量に出土し、宝町遺跡の重要性を決定づける成果となった。それだけでなく、近代についても、金沢大学附属病院の前身にあたる近代病院の内科・外科・精神科等の病室跡が、当時の図面通りの位置で広範囲に検出されるという成果が得られている。それに伴って、歴代病院の銘が入った食器も多数出土しており、前身病院の様子がうかがわれる。

続いて挙げたいのが、2001（平成13）年の第9次発掘調査である。すなわち中央設備室Ⅱ地点（KTB0109）だが、この調査区では近世の井戸底付近から漆器椀・下駄・結桶などの木製品が大量に出土している。

また、近世寺院に関するものとして、1999（平成11）年の第5次発掘調査、2004（平成16）年の第11次発掘調査、2004（平成16）年の第11次発掘調査、2005（平成17）年の第12次発掘調査、2008（平成20）年の第15次発掘調査、2011（平成23）年の第17次発掘調査、などがある。第5次発掘調査区はグラウンド地点（KTG9905）、第11次発掘調査区は解剖実習棟地点（KTG0411）、第12次発掘調査区は立体駐車場地点（KTG0512）、第15次発掘調査区はつくしんぼ保育園地点（KTG0815）、第17次発掘調査区は図書館地点（KTG1117）にあたる。これらの調査区では、近世の如来寺や経王寺の寺域周溝が見つかっている。近世絵図とも整合的で、絵図に描かれた寺域の正確な位置を確認することに成功している。

他の調査区においても、近世の与力町や近代の病院・医学校に関する遺構・遺物が見つかっている。

これに対して、今回の第19次発掘調査区は、同じ近世でも与力町ではない百々女木町を対象とし、如来寺・経王寺ではない献珠寺の寺域を含み、さらに近代については過去に検出した病棟から離れた眼科病棟にあたる。つまり、過去の発掘調査区に連続するものというよりも、ある意味新規の調査地と言えるような場所なのである。



今回の調査区
 病院第2立体駐車場地点 (KTB1919)

- | | | |
|---|---|---|
| <p>【1998年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 病棟I・精神科病棟I地点 (KTB9801) 包み込みの森地点 (KTB9802) 中央設備室I地点 (KTB9803) <p>【1999年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 病棟II地点 (KTB9904) グラウンド地点 (KTG9905) <p>【2000年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 地下油槽地点 (KTB0006) 精神科病棟II地点 (KTB0007) <p>【2001年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 受水槽地点 (KTG0108) 中央設備室II地点 (KTB0109) | <p>【2002年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 中央診療棟地点 (KTB0210) <p>【2004年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 解剖実習棟地点 (KTG0411) <p>【2005年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 立体駐車場地点 (KTG0512) <p>【2006年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 渡り廊下地点 (KTB0613) 外科診療棟地点 (KTB0614) | <p>【2008年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> つくしんぼ保育園地点 (KTG0815) <p>【2009年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 総合研究棟地点 (KTB0916) <p>【2011年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 図書館地点 (KTG1117) <p>【2016年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 先端医療開発センター地点 (KTB1618) |
|---|---|---|

図 39 宝町遺跡の過去の調査区と今回の調査区の位置図



「加賀国金沢之絵図」
(金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵)

「延宝金沢図」
(石川県立図書館所蔵)

図 40 近世絵図と今回の調査区の照合

ここで、今回の発掘調査区を近世の絵図に当てはめてみよう。図 40 は、寛文 8 年の「加賀国金沢之絵図」(1668 年)と、延宝年間の「延宝金沢図」(1673～81 年)に、今回の発掘調査区を重ねたものである。これを見ると、近世遺構がほとんど検出できなかった A 区は武家地のようなのであるが、近世遺構が多数見つかった B 区については地子地と献珠寺(現在は近隣の大学構外に所在)の一部にあたるようである。「加賀国金沢之絵図」では、B 区は「侍屋舗」・「足軽屋舗」・「寺屋舗」にまたがって見えるが、1 年前の「寛文七年金沢図」を見ると「延宝金沢図」とほぼ同じ記載であり、おそらくこれは「加賀国金沢之絵図」の記載が「寛文七年金沢図」や「延宝金沢図」よりも比較的粗いことによるものであろう。他の近世絵図等を見ても、B 区の辺りは基本的に地子地だったようである。この地子地は、「武士・寺社・町人いずれの身分であろうと藩に地子銀を納めれば利用できる地種」(木越 2013)とされるが、管理は町人がしていたようである。

近代についても、当時の図面と見比べてみよう。図 41 は、金沢大学資料館所蔵の「石川県金沢病院新築配置図」に、今回の発掘調査区を重ねたものである。今回検出した近代 SB8 が、「眼科病室」に見事に合致する。金沢大学資料館には、1949(昭和 24)年 7 月 1 日時点の「金沢大学医学部附属病院平面配置図」も所蔵されているが、そちらを見ても同じ眼科病棟が描かれている。

このように、近世絵図・近代図面と照合すると、改めて宝町遺跡第 19 次発掘調査区の性格が明確なものとなる。

近世の絵図から浮かび上がった地子地と献珠寺を踏まえて、今回の発掘調査区の遺構・遺物を見ると、廃棄土坑が多く見つかったのは地子地にあたる。町人の管理地で、不要となった土器・陶磁器や木製品を捨てていたのだろうか。様々な遺物が出た割には、高級なものがほとんど見られなかったことから、町人地的な性格の方が強いように見える。その一角に、

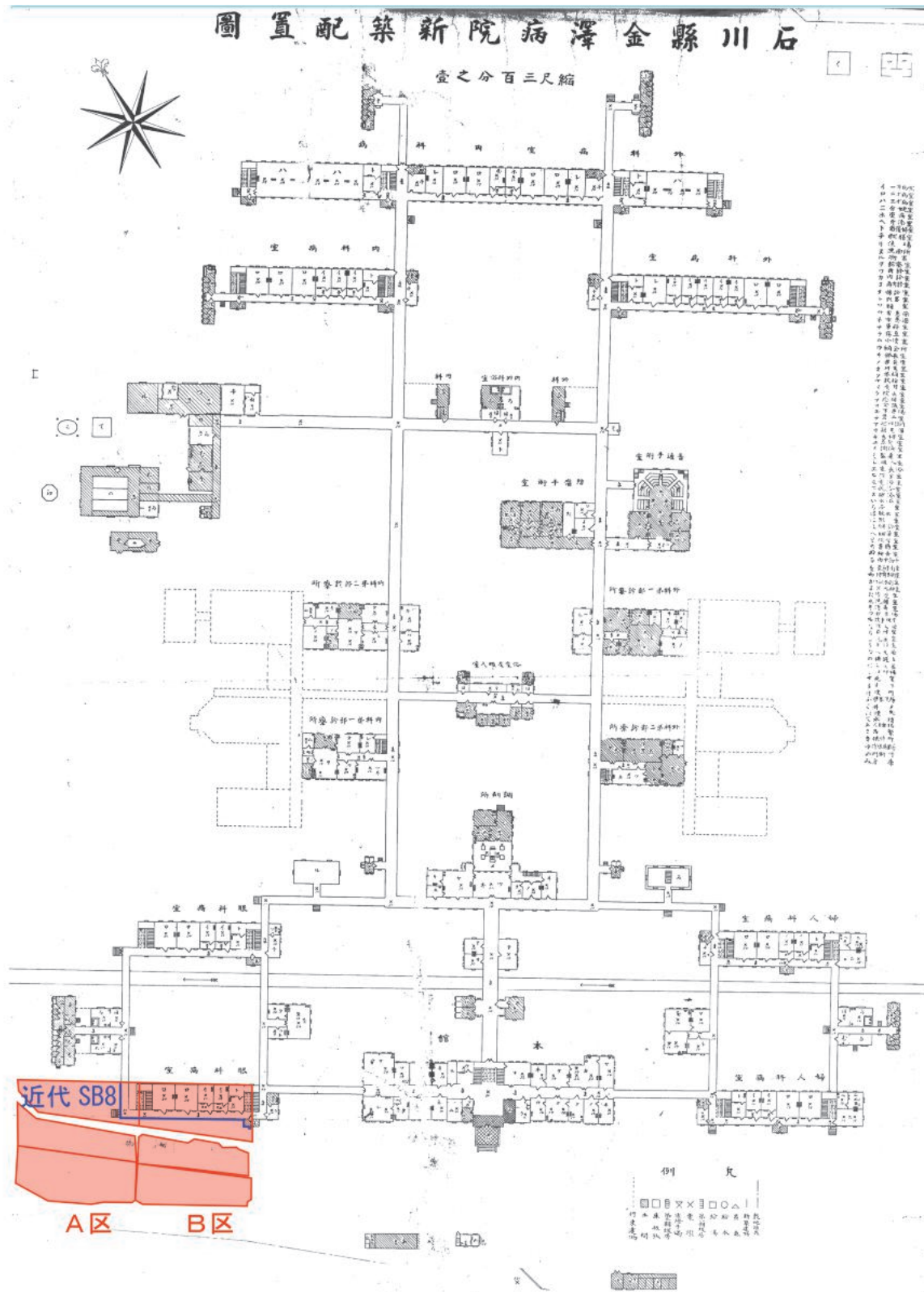


圖 41 近代病院図面と今回の調査区の照合
 (「石川県金沢病院新築配置図」金沢大学資料館所蔵)

SK24のトイレもあったということだろう。また、土師器皿が多く出土したSX8が、献珠寺の寺域内にあたることが絵図で確認できる。SX8の土師器皿を、単なる皿の大量廃棄と見るのではなく、同寺で使用されていた灯明皿のまとまりと見ると、その意味合いは変わってくるだろう。

近代については、近代SB8が石川県金沢病院以来の眼科病棟の跡であることが疑いようのない形で確認できた。眼科は、高安右人氏に代表されるように、金沢大学の近代医学史において極めて重要な分野である。その当時の建物が、現代の宝町の地に再び姿を現したことは、金沢大学として特筆すべきことであろう。ちなみに、今回の調査中、A区東の盛土層から「眼科第7研究室」のプレートが出土した（写真6）。埋蔵文化財として扱うことは難しいかもしれないが、金沢大学関係者としては興味深い。

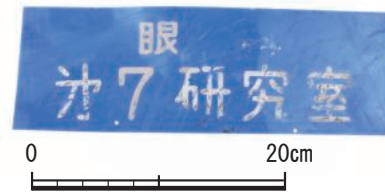


写真6 A区東から出土した眼科第7研究室のプレート

以上のように、今回の宝町遺跡第19次発掘調査区は、近世・近代の遺跡として、近世の土器・陶磁器・木製品の出土、近世の廃棄土坑の検出、近世寺域の検出、近代病棟の検出、近代の病院食器・ガラス瓶の出土など、過去の調査区と少なからず共通する部分はあるが、それ以上に新たな発見が多かった。近世については地子地や献珠寺、近代については眼科病棟に関する遺構・遺物が重要な調査成果である。むしろ、今回の調査成果と過去の調査成果を統合することで、宝町の地における近世・近代の人々の営みがより深く理解できるようになるだろう。

金沢大学宝町地区は、医学・医療の先端地として、これからも構内で様々な施設が建設されることだろう。埋蔵文化財保護の点では、埋蔵文化財包蔵地における掘削工事は可能な限り避けるべきであるが、どうしても必要な場合には今回のような発掘調査を確実に実施し、その成果を後世に伝えていかねばならない。それは金沢大学にとっても、地域にとっても、文化的・歴史的に極めて大切なことなのである。今回の宝町遺跡第19次発掘調査は、そのことを改めて示す成果となった。

引用・参考文献

- 安藤一男 1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』第42号 73～88頁
- 石川県金沢城調査研究所 2014『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002『金沢市木ノ新保遺跡』
- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011『日本有用樹木誌』海青社
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学—出土木製品用材データベース—』海青社
- 井上鋭夫 1969「金沢城址の発掘」『金沢大学法文学部論集 史学編16』1～30頁
- 江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房
- 小川望 2008『焼塩壺と近世の考古学』同成社
- 香取正彦・井尾敏雄・井伏圭介 1986『金工の伝統技法』理工学社
- 金沢市 2020『金沢市勢要覧2020』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005『石川県金沢市田上西遺跡Ⅱ』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2020『石川県金沢市金沢城下町遺跡(飛梅町3番地点)Ⅱ』
- 金沢大学資料館 2015『加賀藩与力 武士のほまれ』
- 金沢大学資料館 2020『金沢大学資料館だより』第62号
- 金沢大学50年史編纂委員会 1999『金沢大学五十年史通史編』金沢大学創立50周年記念事業後援会
- 金沢大学総務部広報室 2020『金沢大学概要2020』
- 金沢大学附属病院 2019『金沢大学附属病院概要2019』
- 金沢大学附属病院 2020『金沢大学附属病院概要2020』
- 金原正明 1997「自然科学的研究からみたトイレ文化」『トイレの考古学』東京美術 197～216頁
- 川崎茂 1993「石川県」『石川県大百科事典』北國新聞社 47頁
- 木越隆三 2013「城下町金沢の空間構造」『図説 金沢の歴史』金沢市 86～87頁
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』第27号 1～20頁
- 小林和貴・佐々木由香・能城修一・鈴木三男 2015「南元町遺跡第3次調査出土繊維製品等の素材植物」『南元町遺跡Ⅲ』住友不動産 248～254頁
- 桜井準也 2019『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房
- 佐々木達夫 1981「金沢城跡の発掘：1977年」『日本海域研究所報告13』89～108頁
- 佐々木花江・妹尾裕介・横山方子 2017『金沢大学構内遺跡』金沢大学埋蔵文化財調査センター
- 貞末堯司・石崎俊哉・前田清彦 1986『金沢城の発掘1981：藤右衛門丸北側法面裾部発掘報告』
- 庄田知充 2017「金沢城下町遺跡における甕・播鉢の様相」『関西近世考古学研究』25 関西近世考古学研究会 61～71頁
- 千葉 崇・澤井裕紀 2014「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom』第30号 7～30頁
- 出越茂和 2013「広坂の古代寺院跡と都の軒瓦」『図説 金沢の歴史』金沢市 22～23頁

- 中井 泉編 2005『蛍光 X 線分析の実際』朝倉書店
- 長野 裕・井尾建二 1998『金工の着色技法』理工学社
- 久田正弘 2012「中部日本海側—福井県・石川県・富山県・新潟県—」『木の考古学—出土木製品用材データベース—』海青社 210～223 頁
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016『越前焼総合調査事業報告』
- 藤根 久・佐々木由香・中村賢太郎 2008「蛍光 X 線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析」『日本文化財科学会第 25 回大会研究発表要旨集』108～109 頁
- 増山仁 2000「金沢城下出土の焼塩壺」『焼塩壺の旅—ものの始まり堺—』財団法人小谷丈郷土館 76～82 頁
- 松永篤知 2014「編物・縄類と縄文土器底部の「敷物圧痕」」『小竹貝塚発掘調査報告』第 2 分冊（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 11～18 頁
- 松永篤知 2015「井戸枠用結桶の竹籬について」『富山城跡・富山城下町遺跡主要部 発掘調査報告書』富山市教育委員会 189～190 頁
- 松永篤知 2019「金沢大学埋蔵文化財調査センター」『大学と埋蔵文化財』広島大学総合博物館 5 頁
- 村上 隆 2003『日本の美術 No. 443 金工技術』至文堂

写真図版



調査区遠景（南東から）※A区完掘時

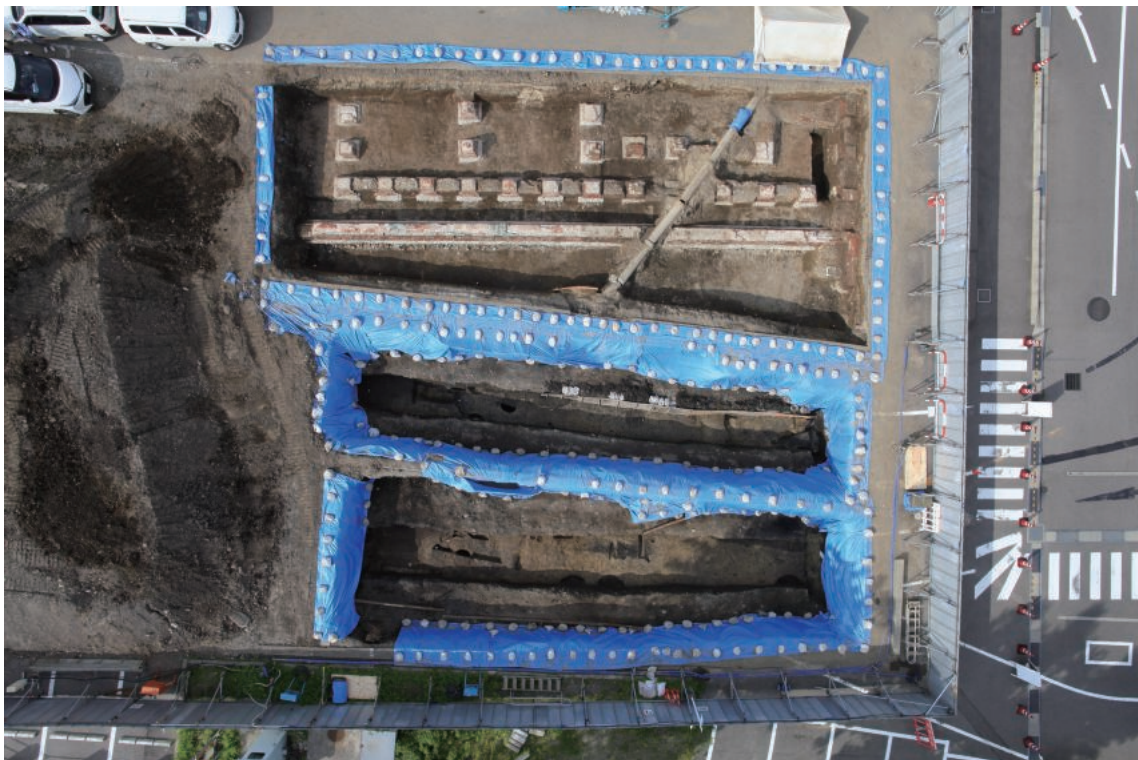


A区調査区全景（南西から）

写真図版1 調査区遠景・全景（1）



調査区遠景（西から）※B区完掘時



B区調査区全景（南西から）

写真図版2 調査区遠景・全景（2）



A区東 近代P1～近代P7 検出状況（南西から）



B区東 近代SB8 完掘状況（西から）

写真図版3 近代遺構



A区東 P1・SX2 検出状況（北東から）



A区中央 SX3・SX4・SX5 検出状況（北東から）

写真図版 4 A区近世遺構検出



B区中央 近世遺構近景（南東から）



B区西 近世遺構近景（南東から）

写真図版5 B区近世遺構近景



B区中央 SX6a 漆器等出土状況（西から）



B区東 SX8 土師器皿等出土状況（北西から）

写真図版6 B区近世遺構(1)



B区中央 SX11 礫出土状況（北東から）



B区中央 SK20 下駄出土状況（南西から）

写真図版7 B区近世遺構(2)



B区西 SK22 完掘状況（南西から）



B区西 SK24 竹箍出土状況（北東から）

写真図版8 B区近世遺構(3)



B区西 SK26 完掘状況（南西から）



B区西 SK28 部材等出土状況（北東から）

写真図版9 B区近世遺構(4)



B区中央 SK7・12～14 断面（北から）



B区中央 P19 断面（北東から）



B区中央 SD21・SK40・SK41 断面（北西から）



B区西 SK25・SK26・SK27・SK22 断面（東から）



B区西 SD29 断面（北西から）



B区西 SK30 断面（南東から）



B区西 SD35 断面（北西から）



B区西 SK39・SK43 断面（南東から）

写真図版 10 B区近世遺構（5）



SX6a 出土陶磁器



SX8 出土土器・陶磁器

写真図版 11 近世主要遺構出土土器・陶磁器 (1)



SK20 出土土器・陶磁器



SK22 出土土器・陶磁器

写真図版 12 近世主要遺構出土土器・陶磁器 (2)



SK26 出土土器・陶磁器



SK28 出土土器・陶磁器

写真図版 13 近世主要遺構出土土器・陶磁器 (3)

報告書抄録

ふりがな	かなざわだいがくこうないせき たからまちいせき							
書名	金沢大学構内遺跡 宝町遺跡							
副書名	宝町遺跡第19次発掘調査報告書							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編著者名	松永篤知、小林克也、黒沼保子、森将志、野口真利江、竹原弘展							
編集機関	金沢大学埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL076-265-6285							
発行機関	金沢大学埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL076-265-6285							
発行年月日	令和3年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。、′、″	東経 。、′、″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宝町遺跡	石川県 金沢市 宝町 1番 1号	172014	—	36° 33′ 24″	136° 40′ 18″	20190507 ～ 20190731	1,024	金沢大学 附属病院 第2立体 駐車場新 営工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宝町遺跡	城下町, 病院跡	近世以降	近世：溝・土坑・ ピット・その他（不 明遺構）、近代：建 物、ピット	近世：土器・陶磁 器・木製品・金属製 品、近代：病院食 器・ガラス瓶		近世については、 猷珠寺跡から大量の 土師器皿が出土し た。また、木製品を 含む廃棄土坑とトイレ 遺構を検出した。 近代については、 金沢大学附属病院の 前身病院の眼科病棟 跡を検出した。		
要約	金沢大学附属病院第2立体駐車場建設に伴い、宝町遺跡第19次発掘調査を実施した。1,024㎡を上層・下層に分けて調査し、上層では金沢大学附属病院の前身の近代眼科病棟跡を検出した。一方、下層では近世の地子地・猷珠寺の一部に関する遺構・遺物が見つかった。近世の地子地にあたる範囲では、廃棄土坑と見られる遺構を複数検出し、それぞれから近世陶磁器とともに良好な状態の木製品が出土した。廃棄土坑の他に、トイレ遺構と見られる土坑も1基確認した。近世の猷珠寺の一角にあたる部分では、100枚分以上の土師器皿がまとまって出土した。同寺で使われた灯明皿と見られる。							

金沢大学構内遺跡 宝町遺跡

宝町遺跡第 19 次発掘調査報告書

2021 年 3 月 31 日発行

発行 金沢大学埋蔵文化財調査センター

〒 920-1192 金沢市角間町

TEL 076-265-6285

印刷 能登印刷株式会社

正誤表

下記の通り、誤記がありましたので訂正いたします。

訂正箇所	誤	正
13頁 C5トレンチ北西壁断面図	NW SE	SW NE
19頁 11行目	図12	図13
25頁 13行目	測る (図14)。SK25に切られる。	測る。SK25に切られる。
28頁 28行目	以前に位置づけ	以前 (17世紀後半) に位置づけ
33頁 19行目	～21は木製品である。	～22は木製品である。
37頁 27行目	～65は木製品である。	～66は木製品である。
41頁 5行目	餌猪口で、鉄釉がかかる。76は	餌猪口で、鉄釉がかかる。77は
66頁 4・5・6行目	cm ³	cm ³
67頁 7行目	8.0×10 ³ 個	8.0×10 ³ 個
67頁 13行目	1.7×10 ⁵ 個	1.7×10 ⁵ 個
68頁 3行目	1.2×10 ⁴ 個	1.2×10 ⁴ 個
68頁 9行目	2.0×10 ³ 個	2.0×10 ³ 個
68頁 21・22行目	リン (P ₂ O ₅)	リン (P ₂ O ₅)
70頁 2・3・4行目	リン (P ₂ O ₅)	リン (P ₂ O ₅)
71頁 10行目	cm ³	cm ³
75頁 図41キャプション	金沢大学資料館所蔵	金沢大学資料館所蔵、階調を反転
78頁 7-8行の間に追加		文化庁文化財部記念物課2010『発掘調査のてびき』集落遺跡発掘編/整理・報告書編 同成社
87頁 上	SX11	SK11
89頁 上	南西から	北東から

69頁 図38 差し替え

